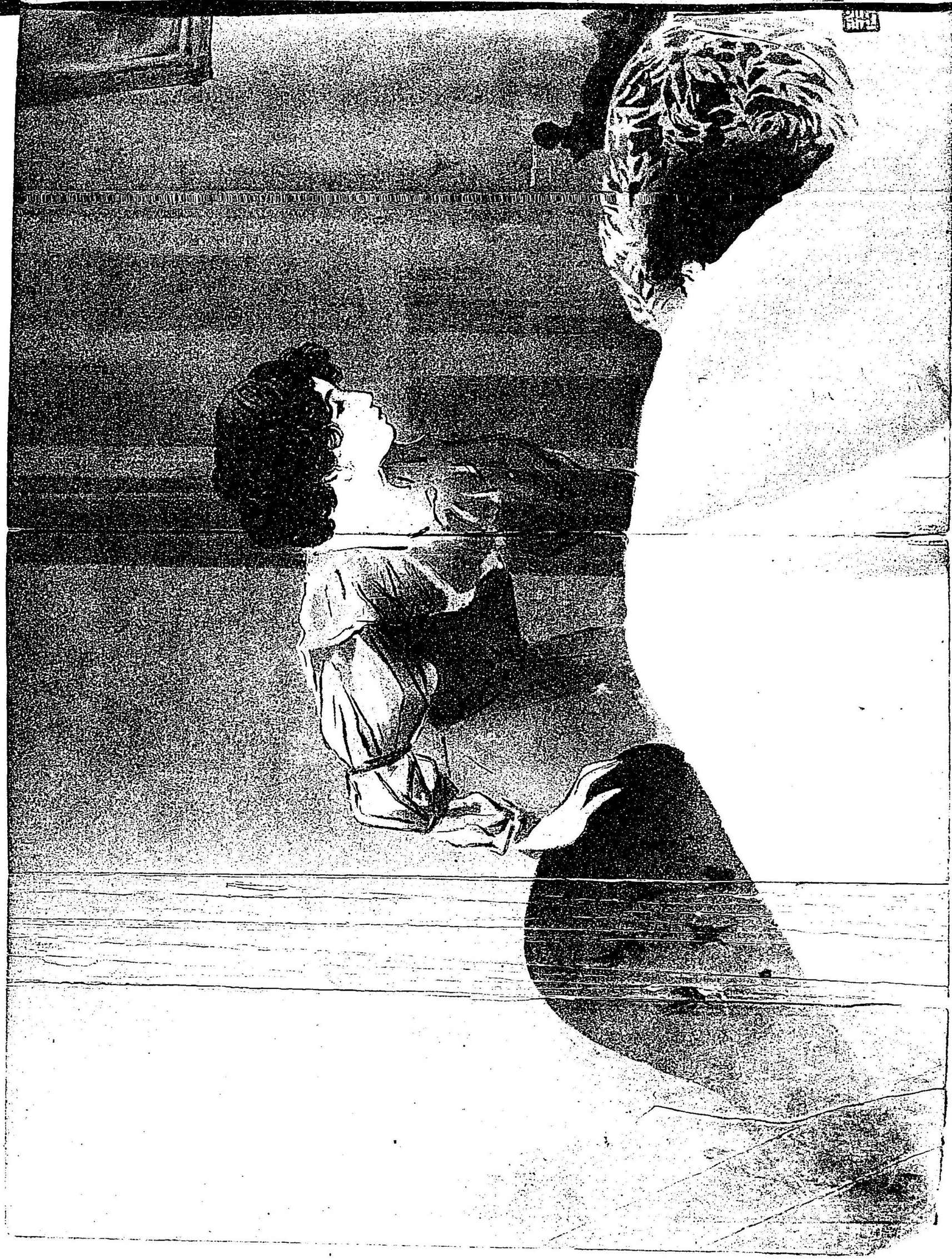
26-444

明治
41 8 4
内交



椿説

花あやめ

一　太郎と次郎

何千年の昔から血統連綿と續て居る貴族の家でも、盛衰と云ふ事は免かれぬ。若しも當主に馬鹿な放蕩な人が出れば、莫大な領地でも抵當と爲て竟には人手に渡りもする。又不幸にして子が無いとか緣類が死絕るとかすれば家名も財產も亡て了ふ

茲に說出す英國の子爵藏戶家の如きが一頃は殆ど其の一例と爲り掛けて居た。屋敷も領地も同族中で羨まれるほど立派で、家名は古く財產は多く、彌榮えに榮えて居たが、不幸にも三代ほど馬鹿な主人が續て、殆ど一家を零落の淵に沈め掛た。所が幸ひにも、其後を嗣だ今の當主正因と云ふ方が餘ほど心の確な、爾して知識にも人情にも富だ人て、自分の代と爲るが否や、紊れた一家の財政を整理して、家名を昔よりも高くするとに一心を傾け、五十五歲と云ふ今年まで卅年の間、殆ど必死に働き續けた。其の爲に數代抵當と爲て居た屋敷地面も悉く浮て出て其上に昔無ソ

た鑛山や森林なども手に入り。先祖よりも有福に立戻て。又も同族から羨まれる境遇とは成ッた

けれど唯一つ此の藏戸子爵の殘念に思ふのは。自分が生涯を唯だ一家の内事に打委ねて。廣く社會の舞臺に踏出すとの出來なんだ一事である。此の藏戸家は隨分英雄を出した家て。先祖の中には貴族院て大雄辯を揮ふた人も有る。三軍を叱咤した將軍も有る。國家の休戚を双肩に擔ふと云はれた大政治家も有る。自分とても若し家の事に屈托するに及ばなんだならば。二ケ國や三ケ國の勳章は胸間に輝いて居る者をと。時には愚痴と功名心との動くとも有るけれど今は最う出晩れた仕方が無い

其代り。自分の息子二人には。此身の丹精に積上た此莫大の身代を踏臺とさせて。立派に社會へ打て出させ。貴族の評判の聊か落ら掛けた此英國の社會へ再び貴族の花を咲かさねば成らぬと此樣に思ふて居る。實際此子爵には長を太郎。次を次郎と云ふ二人の息子がある。妻は早く死だけれど。太郎次郎を繼子と爲らせるが傷はしさに後妻をも娶らず十八年も獨身を守て來た。勿論死ぬ迄も其れを守るのだ

眞に太郎次郎が此子爵の望の網てある。何うしても兩個を貴族社會の達者にまて成出さねば成らぬとの決心て早くイトンの中學から牛津の大學にまて入れたが。兩個は顏形が貴族的に立派な

のみて無く。心も智慧も。父の見込に負かぬほど深く天から惠まれて居た。今より二年前に兄は廿二歳。弟は廿歳で。共に立派に卒業した。けれど大學の卒業だけては滿足せず。是からは活た社會の形勢にも通じねば成らぬと當人も云ひ父子爵も賛成して直に世界遇遊の旅に上らせた。其が濟て歸りさへせば兄は直ちに外務省へ。弟は貴族的政治團體の副首領にと。早や當はめる口まて出來て。子爵は嬉さの波を胸に打たせて待て居る

所が其歸るのが。最う間も無い。兩個は歐洲大陸から東洋へ。東洋から米國へ渡り。米國て政治や商工業の大掛な仕組をも充分に視察し了り。愈よ紐育からブリンス號と云ふ郵船に乘り。故郷へ向けて立つと云ふて來たのが。ツイ數日前てある。爾して其ブリンス號が紐育を出帆したのが六月の十八日。今日は同じ月の廿九日て有るのて。通例ならば。昨日か今日リバープールへ着く筈である。先日來引續いて天氣も穩かな上に。新造て堅牢と快速を兼たと云はれる船だから。今にもリバープールから懐しい電報が來るに違ひない

父御は。今まで滿二年の間を。爾まて待遠とも思はなんだのに。一日か二日と云ふ今に成て急に待乗る樣な氣がして。朝から幾度と爲く。緣側に出て。又玄關の所に行き『未だ新聞は來ぬか。郵便は。電信は』などと下僕に聞き。殆ど落着く場所の無い樣に見えて居たが。遂に耐兼ねて。

下僕の一人を捕へ『電信局から郵便局へ廻り、當家へ宛てた一切の配達物を受け取つて來い』と命じた

此家へ都からタイムスの届くのは通例午後である、今は十二時前だから、届かぬに不思議は無いが、唯だ父御は待遠い、親く下僕の出て行くのを見た上で、初て自分の居室に歸り、毎もは十一時に呑む可き茶の卓子の上に冷めて居るのを呑み乾して胸を撫でたが、此の所へ靜に歩入て來たのは、子爵と畧ぼ似寄た年頃の、品ある老婦人である、此婦人も最と心配げに『ねえ子爵、私しは兩三夜、引續いて夢見が悪いので氣に掛ッて成りませんよ』子爵は聊か嘲る句調で『又夢の話ですか、夢などが何の當に成りませう』老婦人『でも私しの夢は屹と當りますよ、此前にも齒の抜た夢を見たらー』子爵『翌朝入齒が飛出して居たでせうハヽハ』老婦人『イエ、笑談では有りやせん、今度は二晩續けて同じ夢を見たのだから、屹と太郎と次郎の身に何か事變が』子爵『今日か明日歸て來る者へ、延喜でも無い事を云て下さるな』老婦人『でも陸の旅と違ッて海だから、舟に何の樣な間違ひがー』子爵『舟に間違の有るのは、其れは貴女の夢ですよ、プリンス號に乘て居れば座敷に居るも同じ事です』老婦人『其れほどプリンス號とやらが確なら昨日の中にも電報の來る筈です』子爵『一日や二日は入港の遲れる事が有ますとも、夢の占は御免ですよ』寄せ附ぬほどの挨

拶に老婦人は取附く術も無く『アレ、人の夢が、何の樣な夢だか聞きも仕ないで』と呟きつゝも斷念めて退いたは家柄に相應な、最と素直な質と見える

抑も此夫人は子爵の異母の姉君で卅年前に葉井田何某と云ふへ緣附きしも所天の死せし爲め此家に歸り、爾來廿餘年子爵を助けて、家政を預て居る方である、今も葉井田夫人と呼ばれ、客分か掛人の樣に知らぬ人からは思れもするけれど、心榮が篤實で何人にも信切に行渡るので、深く子爵からも敬はれ、相談對手とせられて居る、唯だ考へが少し古かしく、動ともすれば夢などの事を說く爲め折には今の樣に子爵に冷ざるゝ事は有るけれど、此家の爲に無くて成らぬ人である

午後に及んで、先程の下僕が郵便物を受取て歸て來た、其の中にタイムスと云ふ新聞は有るけれど、電報は無い、子爵は少し不機嫌に、先づ新聞を開いて見たが、第一に目を射たのは、特に大活字で記した『悲む可き慘事、プリンス號の沈沒』と云ふ文字である、

二　一家は終に死絶て

『プリンス號の沈沒』の大活字で置た題號は藏戸子爵の目に、一度に映じた、讀直す必要も、考ふる必要も無い、待に待て居た我が息子二人の乘て歸る其船が沈だのだ、葉井田夫人の惡い夢見

と云たのが前兆を爲したのだ。けれど子爵は此文字が目に入た儘で。其の何の意味なるかを合點し得ぬ。茫然と新聞を持たまゝ顏を揚げた。之は合點し得ぬては無い。餘り合點が行き過ぎたのだ。見ると同時に此文字が腦の中樞にまで突入て。慄くと云ふ感じをさへ失なはせたのだ

新聞紙を手に持たまゝ子爵は庭の面に歩み出た。其の歩み振からして感覺の有る人の歩みとは違て居る。足が地を蹈緊て居る樣て無く。フラ〳〵と浮て居る。眼も何處を見て居るか分らぬ。唯だ空に注いで何所をも見ずに開いて居る。若し此時。子爵の前に巖の崖ても有たなら。子爵は避けるとをも知らず突當ッて額を碎く所だらう。若し足許に池ても有らば。心附かずに落入て溺れるだらう。我にして我に非ず。活て居て活た人の感じが無い。けれど幸ひに平なる庭の面て。突當る崖も無く。落て入る池も無い爲め。怪我もせずに徘徊ふたが。斯る中にも日頃の癖は何所にか殘ッて居ると見え。毎も腰掛る木の蔭の榻の所に行て腰を卸した。けれど其の茫然たる景狀は元の通りて。顏の筋は悉く弛み。腮も力無く垂れて。涎の落ぬばかりに口を開いて居る。眞に何事も知らぬ白痴の狀か。爾無くば夢中に往來すると云ふ離魂病者の體である

凡そ廿分ほども經て子爵の顏は自ら緊り初めた。爾して忽然と我に復た如く。目を張開いて四邊を見廻し。更に『大變だ』と叫んて。地を蹶て立上ッた『確か新聞紙に非常な事を書て有た樣

に思ッたが』と。又榻の上に椅り直して。必も確に新聞紙の記事を讀下した

『紐育よりリバープールに航し來りつつありし郵船プリンス號に。悲しき大事變に走れり此船は豫て快速の譽れ高く。去る十八日に紐育を發したれば一昨夜までに入港の筈なりしに其事の無かりしより窃に怪む人も有りしが。一昨朝。愛蘭近海まて來り。深き朝霧に鎖されて針路を失し。最も危險なる暗礁に乘り上げたり。船員の盡力にて直り暗礁より離れはしたれど。船底は大破損を受け。殆ど離るゝと同時に沈沒したり

乘組の客は二百名にて。船員は八十名なり。船長は直に艀を卸し先づ婦人と小兒だけは之乘移らせたるも。船の沈沒が急なりし爲め。其の艀すらも僅に一艘を除く外は皆浪底に埋まれ。親船と同樣の最後を遂げたり。

助かりし一艘は海上を漂ふうち通り合せし商船に救はれて午後にキングスタウンに着き其所より此悲報を發するを得たるなり。報に接して其筋よりは直ちに救難の爲めローヤルを派遣したるも既に沈溺の後なりしかば。波上に破船の一部分を認めし外。何事をも爲す無かりしと云ふ

次に『船客の名』と題して人名表の樣な者を掲げてある。子爵は熱心に其一々を讀だが。悲しや

藏戸太郎、藏戸次郎の名が並んで居る。乘り後れもせなんだと見えるは無念である

最後を記した一項は、子爵に取りて又一入の打撃である

『吾人が最も悲とするは右の人名表中に在る藏戸太郎と次郎との兄弟なり。此兩名は名譽ある舊家藏戸子爵家の唯だ二人の今息にして前年牛津大學を卒業し直に世界遍遊の旅に上り。滿二年を經て歸國の途に向ひたる者なるが。助かりし某婦人の目擊したる所に由れば兄弟甲板の上に立ち。互に首に手を捲合ひ一身同體の如くになりて沈み行たり。其狀悲くも亦勇しかりしと云ふ

此兄弟は前途有望として。多くの人に其歸國を待受けられたるに。終に歸らぬ人と爲りしと。惜むべき限りなり。取分けて藏戸家は人も知る如く。此二人の外に相續者無きとなれば一家の悲嘆如何ばかりぞ。吾人は思ひ遣るさへ悼はしさに堪へざるなり云々』

讀終ッて子爵は。頽れる樣に全身を震はせた。餘りの事に聲も出ぬ。涙も出ぬ。新聞紙を握り詰め。齒を嚙しめ。爾して光る眠に大地を睨んで居たが。頓て立上ッて一歩。一歩。陷しめる樣にして家に歸ッた。先づ誰よりも薬井田夫人に此事を知らせねば成らぬ。夫人は太郎次郎を子の如く育て上げた人である。今も母が子を愛する如く二人を愛し。二人の身を氣遣ふて居る。此凶

報を知らせたならば。何れほどか驚くだらう。けれど知せて夫人の智慧を借らねば何の樣にして好いか日頃は思案に富て居る子爵の胸にも何の考へも沈んで來ぬ。子爵は直に夫人の室の方に行かうとしたが。夫人の方が子爵の居る所へ來合せた。之は新聞に何か出て居ぬかと問ふ爲て有らう

夫人は子爵の顏を一目見て殆ど凶報を聞盡したと同じほど驚いた『惡い知らせが。新聞に出て居るのてす』子爵は無言で新聞紙を差附けた。夫人の眼も直に彼の大活字に注いだ『ア、夢中が惡いので此樣な事ては無いかと思ひました。私しは見るのが恐しい。聞せて下さい。聞せて下さい』子爵は一語をも發し得ぬ。發すれば泣聲と爲り。言葉とは爲らぬのだ。夫人『二人の身が』子爵『溺死しました』夫人は最と靜な氣質で。日頃嬉しさも悲しさも餘り顏に現はし又は發出す樣な事は無いけれど。此時ばかりは。打倒れ。身を搖ッて慟哭した。子爵も『ア、。藏戸一家は。遂に死絕て。亡る事に成て了ッた』と叫んて泣いた。眞に悲慘の極てある

三　廿歳に足らぬ娘二人

今は早や三月を經た。眞にブリンス號の沈沒は近來の慘事てあつた。之が爲め悲嘆に沈んだ家

が英國中に何れほど有らう。當座の中こそは孰れも若しや。何うか云ふ幸運て我家の人だけは通り合す船にでも救はれて助つては居ぬだらうか。今に嬉しい知せが何所からか來はせぬかと。心待に待もしたが。氣の毒にも皆空頼みてあつた。昔から愛蘭の西の方て溺死した人の死骸は。早い潮の流れの爲め。直に果も無き北洋の方へ推流さるゝので何所の濱邊へも漂着せぬと極て居る通り。死骸の分つたのさへ少かつた

殊に最早や三月を經ては。誰の胸にも其樣な空頼みは絶て了ひ。泣く人は泣盡し。斷念める人は斷念め盡して。其れ〳〵後の處分をも濟ませたが。唯だ泣盡すにも盡されず。斷念めるにも斷念められぬのは藏戸子爵一家てある。二人の相續人を一時に失ひ。子爵が幾年月の艱難て積上げた財産も。千有餘年名譽の中に傳ッた家名も。之切り絶えて了ふのだ。後の處分を仕やうにも其の仕樣が無い

子爵も葉井田夫人も。一時に挫けて了ッた。夫人は一旦氣絶したまゝ病と爲り。二ヶ月ほど床を離れず。子爵の方は病氣にこそ成らぬけれど。殆ど喪心した人の如く。唯だ一室に閉籠り。誰にも顔を合さぬ事に成た。其うちに子爵の健康も次第に衰へ。家令扶等が心配して其のお居間へ運び入るる食物さへ手が附かずに下る事が多のて何うなる事かと空く額を集るのみて有ッたが。

或日の事。最と嚴重な面持て此家へ尋ねて來て是非とも主人子爵にお目に掛らねば成らぬと頑張た人がある。之は先祖代々此家の爲に第一の忠臣と立らるゝ法律家瓜首眞造と呼ばるゝ堅人て。土地財産の登記から株券公債其他法律に關係のある當家の書類一切を保管する人てある

此人は先づ家令の白井と云ふ者に逢ひ。子爵が何人にも面會せぬと云ふを聞て『其れならば面會して下さる時まて幾日でも茲に持て居ますから。其旨だけを子爵へ申上てお置き下さい』と云ひ。猶も白井の躊躇する狀を見て。殆ど叱附くるほどの口調て『一家の不幸は不幸として善後處分を考へるが貴方や私しの務では有りませんか。子爵の御容體もお宜しく無いと聞きますの今の中に相談す可き事を相談して置かずば此上萬一の事ても有らば何しますか』白井は成る程と感じ。返す言葉も無く立て。子爵の居間に行き有の儘を言上したが。子爵は力無げに暫し考へて『外の人と違ひ。瓜首眞造ならば逢はぬ譯にも行くまい。幾日ても玄關に持て居るなら。延しとて同じ事だから今逢はう』と云はれた

直に瓜首は子爵の居間に通され『子爵閣下。此度のお家の不幸は。誰とて悲まぬ者は無く。其悲みは言葉に盡されませぬから。此眞造は一切お悔みは申し上げません。唯だ今日參りましたは。高い當家の家名と夥しい當家の財産に付き。何とか善後の策を講ぜねば成らぬと存じますの

て』子爵は少しも氣が引立たぬ『イヤ瓜首さん。家名が大事。財産が大事と思へばこそ末の末まで考へて樣々の計畫も立てましたが。肝腎の相續人が二人まで亡なつては。最う何と思案の仕樣も有りません。思案したとて私しに一寸先も考へる事が出來ぬから。何か貴方の考へ次第。イヤ私しても葉井田夫人でも最う貴方より上の智慧は出ぬのです。私しの死だ後は。財産一切を慈善事業に寄附するとも。學事の費用に其筋へ献納するとも。又は貴方が。何か職業に關係の有る公共の事業に用ふるとも。宜しい樣に計つて下さい。今まで氣をも引立て心をも浮立せる種であつた此家名と財産とは。今は却つて荷物です。之さへ無くば後取が死だとて斯うまで力は落しません』眞に絶望の底に達した狀である。併し瓜首は毅然として『イヤ私しも全く太郎殿次郎殿の死去と共に當家の血を引く人間は最早や此世に絶た者と思ました。六七代も前までは枝も榮え葉も茂り澤山の親類緣者の有りました藏戸家が。何う云ふ譯か二百年以來段々に死絶ましたので。實に悲しい次第だと嘆きましたが。徒らに嘆くのは私しの職掌て有りませんから。思ひ直して熱心に古い書類を調べました。何處からか當家の血筋を引く人を見出し。何でも藏戸家と云ふ立派な家名の。後々まで續く樣にせねば私しの役目が濟まぬと。殆ど寢食をも忘れる程にして。漸く血筋の猶だ殘つて居る事を見出しました』子爵の眼に。初て人の眼らしい光りが見えた『エ。猶だ

何所かに遠い血筋ても有りますか』瓜首『ハイ。其れも餘り遠い血筋ては無いのです。初の中は古い所ばかりを調べましたから何の筋血も何の親戚も皆死絶え。到底目的は達せられぬと思ひましたが。ズツと近い所に。左樣今より僅に數代前に當家から分かれた弟筋に。今生殘て居る人が有ります。而も二人』子爵『エ。二人』瓜首『ハイ。二人とも廿歳には未だ足らぬ娘です』子爵『エ。娘ては姉妹ですか』瓜首『イイエ。從姉妹同士には當りませんが土地が離れて居ますゆゑ。互ひに其樣な從姉妹が有るとも知らずに暮して居るのてせう』子爵『アヽ女の子では此樣な時の相談對手には成らず』瓜首『イヽエ。子爵。相談對手には成らずとも。其中の一人を當家の相談人に成さらねばなりません』子爵は辛うじて合點が行た樣に『成るほど。其うちの何方かを。爾です。當然相續人と定めて。此家へ迎へる事にせねば。シタが何方にしませう』瓜首『何方にとて。未だ詳しい事情もお聞き成さらずに。決する事の出來る筈は有りません。篤と双方を取調べ。心榮から氣質から能く優劣を見比べた上で無くては』子爵『爾です。成るほど爾です』

四　梅子と松子

死絶る事とのみ思て居た家に。遠いながらも血筋を引た娘が二人殘つて居るとは。先づ目出度

い知せてある。藏戸子爵は聊か言葉に力が附て『ては此家が先づ斷絶せずに濟む事には成ります子。シタが其二人の少女は名を何と云ひます』瓜首は子爵の心が少しても引立たを喜んで『ハイ一人は春川梅子と云ひ一人は草村松子と云ひます』子爵『ハテな春川に草村。梅子に松子。少しも聞た事が無い』瓜首『其筈です四代前に當家から勘當せられた弟子の玄孫ですもの』子爵『其れては私しには何に當りますか』瓜首『從妹に當ります。遠い從妹に。左樣さ三代目の從妹です』子爵『フム三代目にもせよ從妹ならば立派に藏戸家の血が其の二少女の脈管に流れて居るのだ。其れならば何故今まで音信不通て有たてせう』瓜首『其れは其の勘當された方が强情で。終に當家へ詫もせずに死だ爲です。此人の孫に女が二人ありまして。姉の方は春川春堂と云ふ畫工に緣附き一女を殘して死だのです。其の殘した一女が即ち今申す梅子です。父春堂と共に今も此國の南の海岸に在るノスヒルドと云ふ所に住て居ます。妹の方は倫敦の町人草村仙藏と云ふに。嫁し之も一女を儲けました。此の一女が松子です。併し父仙藏は間も無く死に。松子は母と共に倫敦のパークレーンと云ふ屋敷町に住て居ます。何ても餘ほどの美人だと云ふ事です』子爵『其れては。梅子の方は父と共に田舍に住み。松子の方は母と共に都に住て居るのですね』瓜首『其通りです』

子爵は少し考へて『成るほど血筋の上から云ふと梅子も松子も。私しに對し同じ關係だから。

同等に此家の相續人と爲る權利が有る。シタが其松子の母と云ふのが。私しと二代半の從兄妹に當るから。血筋の上からは此方の權利が一番近いのですね』瓜首『ハイ爾ては有りますが此方は。が最う五十ですから相續人の候補者とせるに不適當です。若し血筋のみを云へば此方よりも更近い方も有ります』子爵『エ。其れは誰れ』瓜首『貴方の姉君葉井田夫人です』子爵『成るほど爾う。瓜首『けれど葉井田夫人も今云ふ草村夫人と同じく。最ふ相續人の候補に定めらる可き年齡て無い事は無論です』子爵『シタが昔から此家に。女を當主とした例が何度ありますか』瓜首『ハイ。女家名をも爵位をも相續し此家の女王と爲た方は三人あります。家憲の定めに依りますと。男子絶た場合に女子が繼ぐ。併し其女子は夫を迎へ。夫に藏戸と云ふ姓を名乘らせねば成らぬと有ます』子爵『其れては松子か梅子の中を相續人にして夫を持たせれば好い』瓜首『爾うです。其事至急にお勸め申す爲に私しは今日參上したのです』

松子梅子。先づ二人の中をと相談の一段落は附いた。子爵『けれど何方にすれば好いでせう』までの子爵ならば。斯樣な愚病な問を發しはせぬ。自分でテキパキと極て了ふのだが。是だ度の事變の爲め衰へたのだ。瓜首『其れは貴方が優劣を見て選定めねば成りません』子爵『イヤ未だには迚も出來ぬ。二人とも最う年頃の女でせう』瓜首『ハイ梅子が十八歲。松子が十九歲の樣に聞

て居ます。梅子は姉の子。松子は妹の子なんです』。子爵は頗る當惑の體で『イヤ女が十八九と爲れば餘ほど賢い。少し掛引ても有る女なら私しは直に煙に卷れ。此方が好いと云ふ樣な事に成ります。けれど掛引の旨い樣な女は此家の相續人としては成らぬ。何うしても此の品定めは葉井田夫人に仕て貰ふ外は無い。夫人を之へ呼びませう』斯る重大な相談に婦人を加へると云ふ事は日頃瓜首の好まぬ所である。けれど今は子爵の決斷心が痛く萎靡して居るを見。詮方無く同意した

頓て葉井田夫人は迎へられて來た。爾して子爵より事の仔細を篤と聞きて『私しは先日から思ふて居ます。何うしても子爵が婚姻し新に相續人の生れるを待つ外は無いと』成るほど之は。家の爲を思ふ眞心から出た思案である。子爵の返辭如何と瓜首は子爵の顏に目を注いだ。子爵は殆ど戰慄の躰で『飛だ事を云ふ。今更ら私しが妻を迎へたとて。子など出來ますものか。年も取り此通り衰へて居ますもの。妻を持てば子の出來ぬうち自分が此世を去て了ひます』全く言葉の通である迚も子爵の健康が婚姻に堪やうとは見えぬ。併し葉井田夫人は我が云ふ可き義務だけを云終つたに滿足して『成るほど貴方が爾う仰有れば。瓜首さんの云ふ其の二女の中から選ぶ外は有りますまい。草村松子と云ひましたか。大層好さ相な名前ですねえ。私しは此の名が好きですよ』子爵は遽てゝ『イヽエ。私しは春川梅子と云ふ名が好きです』若し實物を見た上で。矢張り此通

りに。意見が割れ。決する事が出來なんだなら何うしやう。定めし面倒な事だらうと瓜首は早や胸の中で心配した

五　あの畫狂人ですか

若し人の神經が。遠く離れた他の人の心に通ずる者なら。梅子松子と云ふ二人の娘は。今何の樣な氣持がして居るだらう此樣に噂せられて何の感じも無く。何事も知らずに居るだらうか。確に二人の頭の上には。運の神が舞ふて居るのである。英國にさえ多くは無い大の金持。大の舊家。大の名譽ある家柄を相續すると云ふ得難い仕合が。何方の頭へ留らうかと今正に迷ふて居るのである。何と無く頭が痒ばゆうは無からうか。爾して其運は多く何方へ向て居るだらう。梅子にか松子にか。今は未だ神より外に知る者は無い

葉井田夫人は直に言直した『イヤ子爵。何方の名が好だの嫌ひだのと。吾々の好嫌に任せて選定めては大變ですよ。好嫌と云ふ事は一切忘れ。只だ一意に何方が相續人として當家の永久の爲になるかと云ふ事ばかり考へて決せねば』流石に辨別の深い夫人の言葉である。子爵『爾うとも』。瓜首『爾ですとも』

子爵は更に補ふて『其れに又。顔や綺麗を見て、判斷しては成らぬ。唯だ其の心柴を見ねば』夫人『爾です』瓜首『爾です』益す話が熟するのみである。茲に至て瓜首は又も自分の意見を持出して『ては斯するが好らうと思ひます。先づ子爵が何か用事に假托けて兩女の住で居る土地へ旅行し。其家を尋ねて懇意を結び。爾してお歸り成さるのです。歸れば更に葉井田夫人から兩女へ招待狀を出し。期限を定めずに逗留させると云ふ事にして此家へ招くのです。招いて逗留させて置くうちには梅子が好いか松子が好いか誰の目にも分りませう』子爵『成るほど爾だ。遠いとは云へ血續だから私しが尋ねて行くのに不思議は有りません。餘り互ひに疎遠になり。氣が濟まぬ樣に思ふから序ながら立寄ッたと云へば其れて好い』夫人『ては貴方が懇意を詰んて歸て來れば。其れから私しの役目が初るのですね』瓜首『爾です。ですが相續人を選定する爲と云ふ樣な素振は。何人に對しても曖にも見せては成りません』子爵『爾。爾。其事は愈よ何方と選定の決して了ふまては。吾吾三人の間に堅い秘密として伏て置かう』

全く相談は極ッて了ッた。斯なると今まて唯だ落膽の爲め。日に〳〵衰へるのみで有ッた子爵も少し心が引立ッて。間も無く旅の出來ると云ふ程になり。又旅が仕て見たいと云ふ氣にも成ッた。猶ほ再應瓜首と葉井田夫人に打合せた上。從者一人を引連れて。先づ梅子の父が住て居ると

云ふノスヒルドへ向けて立た。頃は太郎次郎の水死してより三月半を經た十月の初である。

ノスヒルドは英國南海岸の小都會て。變通が便利の爲め。追々開け立派な町會所も有り工場も地方政廳も有る。只だ此頃の子爵に取ては海の際と云ふ事が一つ氣掛て。海の色を心に思ふ丈てすら直に二人の子の不幸を思ひ出す。神經を攪擾される樣な氣がする。若し實際に浪の打つ狀。舟の動く狀を見。又海の咆える音ても聞けば身を支へて居る事が出來やうかと自分ながら危まれるけれど。之を先にして次に松子の住むと云ふ倫敦へ立寄れば其所て幾等か氣も紛れ心も休まるだらうと。故と厭な土地を先きにしたのだ。併し。頓て其の土地へ着て見ると海際は海際だけれど。隨分從横ともに廣い市區て。海を見ずにも居る事が出來る。思たよりは安心と成る丈け浪の聞えぬ山手旅館と云ふへ宿を取り。畜工春川春堂の住居はと聞合せて見ると。アヽ那の畜狂人ですかと誰も合點する程て。容易に分ッた。山手旅館から小い谷一つ通り過ぎ。森を通ッて其先の小高い丘の半腹に在る一つ家が其れだと云ふ事

着た翌日の昼過。子爵は從者を連れずに其住居を尋ねて行た。最う路の傍に秋草の花も咲て居て。面白い景色てあるが。景色には目が附かぬ。間も無く丘の半腹に到ると鬱陶しい程に立籠た老樹の間に古い古い屋敷が有る。昔は隨分立派ても有たゞらう仲々廣い構に見ゆるが。何分にも

主人が餘ほど構はぬ人と見え。其れとも構ふ事が出來ぬ境遇に居る者か。草や落葉や。重り合ッて人の行く手を鎖して居る。風流と云へば風流かも知れぬが。餘り氣持好く思はれぬ。併し却て此樣な家に。浮世の汚れに染まぬ清い少女が住て居るのかも知れぬと思ひ。暫し門の外に立たまゝ瞑目して心に祈ッた。何うか藏戸家の女主人として耻しからぬ淑女に逢ふ樣に。何うか此の大切な選定めに我が判斷を誤らぬ樣にと。我が來た務めの彌が上にも重い事を胸に刻み。爾して入往いて玄關に音なうた。

『誰れ』と答へて戸を開いたは。何十年の間此家に奉公して居るだらうと怪まれる老婆である。子爵は物靜に『主人はお内か』老婆『何時だッて。内に居ぬ事は有りませんワ。お前樣。古い繪でも賣に來さしッたか』此のおくつけき老婆の手で梅子は育て立げられたどらうかと思ふと可哀想にもあるが又失望でも有る。決して藏戸子爵家を相續する姫君を育て上げる資格の有る婆やでは無い。子爵は單に名刺を出し『お目に掛り度いから。之れを取次て下さい』とて渡した名刺の表に在る名前は何の樣な片田舍にも知らぬ人が有うとは思はれぬ程だのに。況して遠くとも緣に繫がる家の主人が知らば逢はぬ筈は猶更無い。老婆は受取て。眉を顰めて其表を見たが。肩書の子爵と云ふに驚いた。と云て丁寧に成れる言葉附では無いが。丁寧の積だらう聊か言葉の稜を減し

て『先ア應接の室へ上ッて。待て居さッしやい』とて。毀れ掛けた椅子の唯だ二脚ある廣い〳〵室へ通し。爾して其身は『アヽ。珍しい繪でも持て來た人で無くば。取次でも駄目だらうよ』と呟きつゝ退いた。實に子爵の身に取ては此樣な無雜作な待遇は初めてである

六　二度と來ぬ運の神

子爵は先づ。通された應接室と云ふ室の中を見廻したが。驚く可き事が二ある。一つは其室が唯だ廣いのみて。少しも客を待遇す道具立の備ッて居ぬ事である。毀れた椅子が二脚ありてそすれ殆ど荒ら屋の一間とも云ふ可きて。主人の有る家とは思はれぬ。二つには壁一面に繪畫の懸て居る事である。何所を見ても一寸の隙間も無い。爾して其繪は伊國。佛國。西國などの昔の有名な畫工の作を寫した者て。多分主人春堂の筆なんだらう孰れも原の畫と見分け難い程に能く出來て居る。子爵は感嘆した『成るほど眞に畫狂人の家だ。畫狂人と云はれる丈け全くの天才だ此樣な人の娘なら。決して賤い心は持たぬてあらう。下品ては無いに違ひ無い』と呟いた

其は扨置き子爵を應接の室に入れた彼の老女は。名札を持ッたまゝ退いたが。何うも『子爵』の肩書が合點が行かぬ。此樣な家へ子爵とも有る人の來る筈が無い。何うした譯て有らうと。考へ

に屈托して足も進まず幾度と無く其名札を讀直して居たが『アア分ッた。昔し亡なられた奥様の遠い親類だよ。藏戸家と云ふ子爵が有ると折々云はれた事が有つた。爾うだ何うか此子爵の爲に。當家の墓所向も少し豐に成て呉れゝば好い』合點するが否や足を早め主人春堂の室の入口に行た襖の外から音なうたとて決して返辭せぬが此主人の常だから。無遠慮に其の襖を引開けて中に入り『大變なお客様が見えましたよ』と聲に話すほど聲高く云つて名札を目の前に突附けた。主人は繪絹に向ひ。筆を持て。夢中に海の上の空の色を眺めて居たが。チラと名札を見た丈て又空に目を注ぎ『先ア。先ア。其様な事を云ふて呉れな。那の雲の色が。ソレ昔から誰も畫き得ぬ所だ。那の色。那の色』と口走るは。眞に天才の人が。天來の氣呵に觸て大傑作を孕まうとする場合だらう。何を云たとて移る者で無い。老婆は無慈悲に『其様な事は云て居られません。大切なお客ですよ』春室は聞分け得たや否や『ては梅子を出して呉れ。梅子を』老婆『世間を知らぬ嬢様。に何て此様なお應接が出來ます者か』とは云へ。幾等爭ふても無益だと知て居るから詮方無く又其名刺を持た儘て背後の室の窓に行た。若し手入が行屆いで居るならば裏庭とでも云ふやうな荒地の籔に向ひ『嬢様や。嬢様は居ないかね』と呼び立てた。聲に應じて『婆や。なに』と問返す淸い若々しい聲が樹の蔭から聞えて。次に。摘集めた草花を片手に高く持て現はれた姿は。背の

草叢を雲と見れば確に天津乙女である。涼しい眼。花の蕾の様な唇などが薄桃色に照渡る頰の色と共に。人間の汚れを知らぬ淸い婀娜い顏を作つて居る。之を若し子爵に見せたら何うであらう。仲々愛らしいとか美しいとか云ふ様な有觸れた言語の屆く譯ては無い。忽ちに太郎次郎の不幸をさへ忘れて了ふかも知れぬ。老婆は例の無雜作な調子て『何時まて貴女は小兒てす。着物の汚れるも知らずに。草花などを集て居てさ。最う子爵や伯爵の前へも出ねば成らぬ年だのに。サア此名刺を御覽なさい』乙女は『御免よ婆や』と輕く云て名刺を受取り『之は何方。何うしたの』と老婆の顏を見上た。老婆『貴女は子爵藏戸正因と云ふ名を知りませんか』乙女は思出したか聊か顏を紅めた『アヽ阿母様がお在世の頃に。能く遠い親類に此様な方が有るとは仰有ッたが』老婆『其れてすよ。其れてすよ。其方が今尋ねて來さしッて應接の間に居られますよ』乙女は『あれ何うしたら好からう』と當惑氣に四邊を見て。更に『阿父様は』老婆『云ふたけれど眼目てすよ。毎日の通りて』乙女『私しがお目に掛らねば可けないの』と云ひつゝ座に上ッて來た。老婆『爾てす。貴女がお目に掛らねば』乙女は名刺を又見直し『でも私しから。モ一度申して見やう』と云ひ。胡蝶の翻る様に輕く急いて父春堂の室に行ッた。が。結果は同じ事だ。春堂は未だ空の色に夢中で『那の雲。那の雲。ハテ繪の具は。繪の具は』と相變ずの囈言である。梅子『でも外の時と違ひま

すからよう。阿父様。遠い親類とか云此方が故々お出だと云ますから』巻堂『和女に頼だ。頼だ』天地が覆ッても繪絹の傍を離れ相も無い

梅子は詮方なく又老婆の許に行き『私しがお目に掛らうか』老婆は物知顔に『嬢様、運の神は。誰の所へも一度は來ますが二度は來ませぬよ。來た時に取逃せば。歸ッて來ては呉れませぬぞ』梅子『其様な事を云たとて。私しには分らぬもの』老婆『能く何事にも氣をお附け成さいと申しますの事さ』梅子は少しの修飾をも經ぬ天眞の儘だから。別に氣を附ける事とても知らぬが。其代り又生心の附いた都の令嬢達とは違ひ。羞かんで徒らに逡巡したり。人の爵位を敬ひ過ぎて見すぼらしう戸迷ふたりする事は無い眞に露出しの小兒と云ても可い。別に衣服を着替やうても無し。髪撫て上げやうても無し。老婆の言葉を聞流して『笑はれたとて構はぬヲ』との一語を口の中に殘して。先刻から子爵の怪んで待て居る應接の室へとは行ッた

七　雪の中に咲く一輪

子爵は聊か待兼ねて居た最う主人が來さうな者だ。齣狂人と云はれる程だから定めし。浮世の事には少しも拘はぬ。垢染みた。髪も髭も蓬々と生茂ッた。云はば此の荒れ果てた屋敷の様な。

手も附けられぬ相手ては有るまいかと。怪みも危みもして居るうちに。静に一方の戸が開いた。爾して誰だか入ッて來た。其の姿は。ア、其姿は夢ては無いかと迄に子爵は暫し茫乎した

之が梅子と云ふのだらう。名は美しいけれど形が斯まて愛らしからうとは思はなんだ。愛らしくて。品が有て。而も總體が何と無う清らかに見える所は。雲の中に咲く一輪の梅の花とも云つ可しだ。殊に其の顔に。藏戸家の血筋に特別な一種の容子が備ッて居る。他の人には爾う見えぬかも知らぬけれど子爵には確に分る。と云ふ様な氣がする。自分の顔にも其特別な所が有る。太郎にも次郎にも其れが有ッた。取分て梅子は太郎に似て家る様に思れる。偶然では無く。或は天が太郎の後に此梅子を直らせる爲に此様に生れさせて置たゞらうか

梅子の外に猶ほ松子と云ふ候補者の有る事は。暫し子爵の心から消えて了ッた。若し瓜首の言葉を鹹とすれば松子は倫敦で美人の譽れが高いと云ふから。未だ。未だ。梅子を見たばかりて爾う心を傾けては成らぬのに。其様な思慮も何にも無く子爵の心は唯だ傾いた。梅子の方へ溢れて了ふかと思はれる程に傾いた。爾うして茫然と梅子の顔に見取れる間に。梅子は三分の恐れ二分の羞しさ爾して五分の親みを以て子爵の前に近いた。子爵は他人の様に思はぬ。我子の様な氣がして。改めて名乗るのも何だか。不似合だ。ならば『オヽ娘か』と云て直に膝へ抱上もして見たい

程だ。是だけ心が子の愛に餓ゑて居るのだ。けれど眞逆に爾う馴々しうは出來ぬ。其樣な事をすれば。子供の樣な此美人は。呆れて泣出すかも知れぬ。漸くに子爵は氣を取直した『突然に尋ねて來ましたが。私しは子爵藏戸正因です。貴女の母御とは遠い血續でありました』と出來る丈け優しい聲で云ふた『ハイ阿母さんから聞た事を今でも慾に覺えて居ます』と。小供らしう答へる聲は。鶯の初音よりも爽かに子爵の耳に響いた。子爵『少し用事が有て此土地へ來ましたが。二三週間は逗留せねば成るまいと思ひ山手旅館へ宿を取て居ます。之を幸ひに貴女の父上とお近附に成て置き度いと思ひまして』と言掛けて思出した樣に『イヤ貴女が春川梅子さんでせう』問ふ言葉に。何と無う。娘に對する父の樣な口調があッて。梅子は恐れと羞かしさが一分づゝ減て。親しさが七分に增した『ハイ私しが梅子と云ふのです』子爵『母上に一度もお目に掛らなんだのは遺憾ですが。何うか父上には御近附に成り度いと思ひます』梅子は笑を浮めた。何故の笑か分らぬけれど子爵は胸に結ぼれも解けて了ふ樣に感じた。梅子『ホヽヽ今日は天子樣がお出成さッても お目には掛りませんよ』子爵『エ。何と。若しや御病氣でも』梅子『ハイ病氣よりも甚いのです。自分の書く繪に夢中に成ッて。丁度熱に浮された樣な者です。誰が何を云ても移りません』云終て又笑た最う餘ほど子爵に打解た。是が爭ふ可らざる血筋の力では有るまいか。子爵『天才の人は皆

其樣な者です』梅子『でも。花や景色や。美しい物が澤山ありますのに。何て畫ばかりを美しいと思ひ。本統の美しい者を忘れるのでせう』其姿に似合しく。天然の美を愛する心の發達して居る事も是れて分かる。餘ほど悟りの能い靈智を備へた少女だと子爵は見て取ッた

けれど斯う一通の挨拶が終ッては。斯る年頃の。而も初對面の女に。何の樣な事を話せば好いかと。少し子爵は當惑したが。良あッて『大さう此屋敷は廣いですね。繪にでも畫き度い樣に出來て居ます』梅子は聊かだけれど顏を赤めた。流石に女だけ。此家の荒果た狀や。又取分けて客を待遇す道具立の揃て居ぬを。極り惡う思ふたと見える『阿母さんの在世の頃は。綺麗に手が行屆き。人も立派だと云て呉れましたけれど。餘り阿父樣が搆はぬ者ですから。其れに一切の品を皆畫に替て了ひまして。今では畫より外の品は何にも有りません。壁でも廊下でも。殘らず繪畫がッて居るのです』子爵『イヤ繪畫は仲々貴重なものです』梅子『爾でせうか。私しは爾う思に塞がッて居るのです。其れに孰れも昔しの寫しですもの。父の自分で作ッたのは大切でも有りませうが其れは少いのです』子爵『傑作は一代に一枚か二枚しか出來ぬとした者です』とて言葉を合せた。梅子の間には父のも幾枚かは有りますが。お目に掛けませうか『早や幾分か友達の樣な口調も見え子爵は益す心が解けて『ハイ見せて載きませう』

八　貴方はお泣きですか

子爵は畫を見るよりも。畫に就ての梅子の説明を聞て見たい。聞くうちには敎育の程度も。心柴の高低も自づから分るだらうと思ひ。誘はるゝまゝ次の室に到ッた。茲は殆ど繪畫の展覽會である

梅子は試さるゝとは知らぬ。次第に初對面の隔ても取れ。思ふ儘を話す事と爲ッて『父が何故に畫を大事にするとお思ひです』子爵『私しには分りませんが。何故です』梅子『父は畫ほど人の心を美しくする者は無いと云ひますよ。其れだから自分の死ぬ迄に此市へ春川繪畫館と云ふを立て。縱覽を許して自然の間に人の心へ美の敎育を施す事にすると云て居ます。是れが父の唯一つの理想とやらです。其れて此の樣に多くの繪を集め。自分の畫たのも此十年來は決して賣らぬ樣にして居ます』行ひ難き空想であるけれど。兎に角思想の高い一家である　子爵『十年も。賣らずに畫てのみ居れば餘ほど澤山に溜ッて居ませう』梅子『ハイ畫は年年に殖ますけれど其代り他の品物が年々に減て行ます』と云ひ又少し極り惡げに『私しは。折角貴方がお出下さッたのに。何うか此家てお泊り下さいと云ふ事の出來ぬのが殘念ですよ少しも阿父樣が搆ッて呉れないのですも

の』と少し紅らんだ。アヽ世間も知らぬ乙女の心に。斯る苦い思ひをさせるとは氣の毒の至りだと。子爵は淺からず同情を催ほして『イヤ留めてなど戴くより。美しい畫を見るが御馳走です。私しは毎日ても來ますから』梅子は安心した樣にニッと笑んて『貴方は畫を見るがお好きですか』子爵『嫌ひな人は有るまいと思ひます』梅子『其れては茲に在るのが父の畫てす』とて一方の架を指した

見ると孰れも花又は詩歌から意匠を取た者て一方ならぬ傑作てある。決して古今の名畫と肩を並べて遜色が無い。成るほど是だけ出來るから。娘の幸福も何も思はずに。畫のみに夢中となるも無理ならぬと思た。梅子は頓て其の一々を説明し初めたが。畫の出所と爲て居る詩歌などは。淀みも無く諳んじて居て。其句を誦して子爵に聞かせた。敎育は意外に屆いて居ると見える斯う思ふと子爵は深く滿足に感じたが。其れに連れて愈よ梅子の境涯の傷はしさが增して來る。最う茲て我が養女にして遣るとも云ふて見やうかと。其言葉が口まて衝て出る樣に感じたけれど。其れては家を出た時の約束が違ふから默て耐へた。耐へても憐れさは盡きぬから。何と無く氣の沈む心地がして居ると。梅子は爾とも知ちず。又一枚の畫に向ひ。之は私しの極好きなのてす。海の際に遊んて居る小供の顏が可愛いては有りませんか』海と聞き小供と聞て子爵は我れにもあら

ず涙を浮べた。日頃から爾る心弱い振舞は露ほども無いけれど。丁度心の沈み掛けた處へ。太郎次郎の事から。一家一身の不幸や。梅子の境遇など。樣々の事柄が集ッて。不意に心を動したのだ

『おや貴方はお泣きですか』と眞に梅子は怪んで目を太く張開いた。子爵『許して下さい梅子さんツイ私しは。海だの小供だのと聞き。此頃の不幸を思ひ出しまして』云ふても未だ合點が行かぬ『何か其樣な不幸がお有りでしたか』子爵『藏戸一家の不幸を貴方は未だ――』梅子『ハイ。新聞紙は來ますけれど美術の事ばかり書たので。少しも世間の事が分りません』子爵は涙ながらに太郎次郎の水死の顚末を語て聞かせた

梅子の驚いた事は云ふに及ばぬ。最後に子爵が『此樣な譯ゆゑ私しは旅行てもせねば氣が紛れず。少しても用事の有る度に家を出て。遠い近いの差別も無く親類や知人を尋ねて居ます。何所かに慰めて呉れる人も有らうかと思ふて』と云ふに至り。貴ひ泣せぬ計りの狀と爲て『私しが若し慰めて上げる事が出來れば何れほどか嬉しいてせう』と云ふた。少しても子爵の眞意を疑ふての言葉ては無い。此女にして若し我が心を慰める事が出來ずば誰が出來やう。何ても是を失ふては成らぬ樣に思ひ『ハイ貴女なら私しの心を慰める事が出來るのです。近日私しは家に歸り。他

の親類の者などをも招く積りてすから。其時は何うか貴女も逗留に來て下さい。家の中に貴方の樣な若い人の笑ひ聲が聞えて居れば。自然に愁ひも忘れやうと思ひます』云ひつゝも。此少女が若し子爵の姫君。藏戸家の當主と爲れば。何れほど似合しいだらうと怪んて。其姿を右視左視た。梅子は唯だ逗留に來いと請はるゝ物珍しさに。顏も晴れ渡る樣になり『美しいお屋敷てせうねえ。本統に招いて戴き度いと思ひますよ』思ふ事は悉く眼に口に。顏總體に。將た言葉に現はるゝ。透通ッた樣な氣質である。隱しも飾りも出來ぬ。眞に淸い心と云ふのが之だらうと子爵は感心した

此夜子爵が。宿に歸り。留守なる葉井田夫人へ書て送ッた手紙は見物てあッた『夫人よ。余は眞に。天が斯までの慰藉を余に賜ふ可しとは思はざりき。春川梅子は生れながらの子爵婦人なり。顏も姿も心柴も悉く藏戸家の系統を最も完全に傳へたる者にして。我子と雖も斯までならんとは望み難し。實に血の筋は爭はれぬ者なり。余は若し家を出る時の約束無かりしならば。最早や草村松子を尋る必要も無しと思ふ。イヤ實際。梅子の前に居る間は彼の約束を忘れ居たり。夫人よ。藏戸家の爲に歡喜せよ』などの文句があッた

九　競走の樣なもの

子爵は廿日ほど此土地に逗留した。其間は毎日梅子の許を尋ねもし、或は梅子を我家に招きもしたが、見る度に直打が增す樣に思はれる、顏と姿の美しさは勿論、心の性質が淸い淡しい兒供の樣で、少しも飾り氣僞り氣が無い。所謂る天眞爛熳とは是なんだらう、其上に奥ゆかしい詩的な所がある。云ふ事、爲す事が、總て婀娜ないうちに溢れるほどの愛を帶びて居る。此上の女は想像する事も出來ぬと、子爵は思ふた。けれど若し是よりも猶た上の女が居たらば何うだらう

廿日の中には梅子の父にも逢たが、父は世の中に畫ほど貴い者は無いと思ふて居て何を話しても繪の事へ引附けて了ふので、少しも相談らしい話しは出來ぬ。併し梅子が子爵家へ逗留に行く事には同意した。勿論其れも子爵家に數多の古い畫の傳つて居る事を聞取ての上であつた

間も無く葉井田夫人から梅子へ招待の手紙が來た。梅子から其れを子爵へ示したので、子爵は餘所ながらに、貴族の家の客と爲る心得などをも說聞せた。若し此女に母が有れば何事にも似合しう氣を附けて遣るのだらうに。母の無いだけ、子爵は何だか不憫が增して、分れ去るにも忍びぬ樣な氣がした。爾して愈よ分れる時と爲り。子爵は一封の置土產を梅子に渡し。母が娘に云ふ

ほどの細かな信切を以て『梅子さん。私しの去た後て此封を開いて下さい。中に這入て居るのは私しの家へ逗留に來る支度の料です。ナニ支度も何も要らぬ樣な者ては有りますけれど。母上が此世に居られるなら、定めし飾り立てゝ遣り度いと思ふのでせう。是ならば阿母さんが滿足するだらうと思ふ樣に。自分で能く考へて着物などもお作り成さい。支度の第一が着物ですから』と嚙て含める程に云ふた。梅子は合點し乘る容子て『其れほど立派にせねば可けぬのですか。お嫁に行くのでも無いのに』と云て笑だ。子爵『ハイ外の親類なども來ますから立派にせねば、亡い上まて彼れ是れと噂されます』此一語は梅子の心を決した『阿母さんの笑はれる樣な事は何うても仕は致しませんよ』子爵『爾です。爾無くては成りません。其れに。多分は同じ年頃のお友も有りませうから』お友達とは何より嬉しい。梅子は顏を輝かせて『私しはお友達が欲いと思ますけれど一人も有りませんもの』子爵『貴女は草村松子と云ふ名を聞た事が有りますか』梅子考へつゝ『草村と云ふ親類の有る事は是も阿母さんに聞ましたが。其上の事は少しも知りません』互ひに音づれなどする程の餘裕が無かッた爲なんだらう。子爵『此の松子と云ふのは貴女の徒姉妹に當りますが。之も來ます』梅子は愈よ嬉しげてある『徒姉妹ですか。其樣な方が有るなら早く逢度いと思ひます』子爵『逢た上て貴女の方が若しも見劣りがしては可ませんから。充分何彼に

をお附け成さい』梅子『其れては競爭の樣な者てすねえ』とて又笑ッた。何たる罪の無い氣質だらう

愈よ子爵の去た後て。置土産の封を切た千五百圓の銀行劵が入て居る。一方ならず驚きはしたけれど。子爵から支度に使へと云はれたから殘らず支度に掛けねば濟まぬと思ひ。直に町へ行き女服裁縫師の某夫人を尋ねて譯を話したが。其の夫人の差圖を聞て見ると千五百圓が爾ほど多過ぎもせなんだ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

扨も子爵は梅子に心を殘しつゝ此土地を去り直に倫敦へ行たが。勿論朝廷と淺からぬ關係のある家筋だから。昔から倫敦には立派な屋敷がある。藏戸邸と云へば總ての貴顯紳士が羨やむほどの好い位置を占めて居る。一頃は家の微弱の爲め。此屋敷を鎖ぢ。唯だ一年に一度。朝廷へ御機嫌伺ひに出る時のみ下部などを連て來て開かせる樣に仕て有たが。此子爵の代と爲て以來。少しても家名に係はる樣な事は悉く改めねば成らぬとて。一年中。一通りの召使ひ人員を備へ置き。何どき子爵が都に出やうとも。宿屋などには入るに及ばず。直に自分の家へ歸るのと同樣の心持て此屋敷へ入る事の出來る樣に成て居る。之は當り前の事では有るけれど。子爵の名は之のみの

爲にも重きを加へ。藏戸子爵に逢ふと云ふ事は誰も名譽と心得る程て。若し此邸へ招れたとても云へば羨まぬ人は無く。當人は十日も廿日も人に風聽するほどの次第てある

子爵は此屋敷に入て。先づ第一に。草村松子親子が何と樣に暮して居るかを聞き合はせた

十　蓋し見ものだ

草村松子。其母は草村夫人。利子の方と稱せらるゝのだ

夫の生存中は金の中に轉るほど贅澤に暮し。萬事の掛引に巧な丈け交際場裡にも餘ほど幅を利かせて居たとの事てあるが。今は寡婦の身と爲り。夫の遺した株劵から上る多くも無い所得を命の綱とし。娘松子を育てつゝ辛々に昔の體面だけを支て居る。何ても此夫人に取ては體面を支へると云ふ事が何よりも大切て。一瓶二圓の葡萄酒を用ひても。廿圓のを用ひて居る樣な顏をして居ねば成らぬ。迚も外の婦人には眞似の出來ぬ所だけれど。其代り此夫人は一圓の札を十圓に見せ掛ける術を知て居る。他の人が千圓て異り色の服を拵へれば此夫人は百圓未滿て。其れに能く似た服を作り一歩も流行に後れぬを見榮にして居る。其代り何うかすると舞踏などの時。人に裳を踏れて。イヤ踏れると云ふ程は踏れぬのに。ビリ、と裂ける事が有る。其の裂けた切れ目が着

物の年齢を白狀し相に見えると直に自分の達者な口で『何うも私しは着物を大事にする事を知りませんので』と。幾等着物を疎末にしても差支の無い身躰か何ぞの樣に仄めかせる。併し自分の口よりは矢張り着物の切れ目の口が雄辯だと見え。此節では大抵の紳士貴婦人が夫人の裳を踏破るのを恐れる爲め。餘り夫人の傍へ來ぬ。從ッて招待狀を送る事なども薄らぎ。次第々々に何だか交際社會へ緣が遠く成り掛けて居る。併し此の緣の遠くなるのが此夫人には何よりも辛い。先が疎めば疎む丈け。益す此方から求めもする。益す見榮を飾らうともする。事情を知る人は氣の毒にも思ひ。定めし內所が辛からう。早く交際場から身を退けば好からうにと云ふけれど。身を退くのは身代限りよりも辛いと思て居る。交際さへして居れば自分の娘へ立派な婿が出來るだらうと思ふて居る。茲が兒の心を親知らずと云ふ者で。仲々娘松子は母の言なり次第に何の樣な所天をでも持つと云ふ樣な質では無い。母夫人とは似ても附かぬほど優れた考へを持て居る。兎も角も確な了見の有る娘である。けれど母夫人は驚かぬ。若し娘に所天が出來ずとも自分の方へ夫が出來るかも知れぬと思て居る。成るほど是ては交際場を退かれぬ

其代り此夫人が自分の家の內で。物事を大事にするは又驚く可しだ『着物を大事にする事を知りません』などゝは全くの反對で。着物の裳へ跳ねた泥は。歸て來るが否や自分の口で吸ふて取

る。絹物の浸斑を脫て乾かせるには人間の體の溫みに限ると確信して三四時間も只と着物を抱て居る事もある。爾して。墓所の麁の片までも一々に數を撿め。人の頭數に割當て帳面へ記けて置く。男だつたら會計撿査院の長官に適任だらうに惜い者だ。大英國廣しと雖も。是ほど家事經濟の上手な人は餘計は無い。是なればこそ。僅の所得で外見を張て行かれるのだ。今に必ず一度の食事で二度分の腹を肥す奇術を發明するだらう

* * * * * * * * * * * *

子爵は斯うまで詳しくは聞き得なんだけれど。兎に角此夫人が娘松子と共に別に批難も無く。清く暮して居る事を聞た。清く暮すが何よりも貴い事だから。親類として其娘を。又は母を。或は母子諸共を。濱戶家へ招いても差支へ無いと思ひ。大に喜んで。先づ一通の手紙を夫人に送つた。其れは極めて簡單な文句で。唯だ此度用事が有つて倫敦へ來たに由り。序ながらに近日私しからお尋ね申すと云ふ丈である。用事より外に何の意味をも含て居ぬ。所が直に。折返して返辭が來た。其の表封には黑い輪廓が附て居る。云ふ迄も無く黑緣の狀袋は喪と云ふ事に用ふるので。子爵の家の太郎次郎の不幸に同情を表し。親類として悲みますと云ふ意味が其と無く籠て居るのだ。爾して其の署名を見ると『草村夫人利子』の下に『舊姓葉井田』と括弧入て記して有る。抑

も『葉井田』と云ふのは藏戸家の分れ名である。藏戸家に生れて藏戸の姓を名乘らぬ事となる人が通例用ふる所である。だから『舊姓葉井田』と云ふのは。此の草村家へ嫁入て來ぬ前は。藏戸家の分れて有りましたと云ふに同じだ。是て愈よ黑い輪廓の意味も引立つ。舊姓が葉井田てあれば藏戸家の今の不幸を。我家の不幸として悲しむに不思議は無い。不思議は無いが實は必要も無い事てある。何しろ四代も前に藏戸家から分れて其後が音信不通て。法律家が綿密に取調べる迄は誰も忘れて居た程である。其れを此夫人は明かに覺えて居て喪にまて服して居る。殊勝な次第だ。子爵は之を見て笑んだ『アヽ春川家の主人は己に逢ふのを面倒て成らぬ樣に避けて居たが。草村家の女主人は爾て無いと見える』。爾て無いドコロては無い。子爵を迎へるが爲に何れほど工夫を廻らせて居るかも知れぬ。此の對面は蓋し見ものだ

十一　序でも故々てす

人は自分の直打だけに視られやうと思ふには何の苦勞も無いが。直打より上に視られやうとするは仲々骨が折れる。知らぬ事も知た振をせねば成らぬ。無い者も有る樣に見せねば成らぬ。可笑く無いのに笑ひ。悲く無いのに泣くなども亦必要てあらう

草村夫人利子の方などが即ち其なんだ。此夫人が初めて藏戸子爵の手紙を受取た時の心の騷ぎ方は繪にも書けぬ程であッた。繰返して讀むと凡そ廿回にも及んだ末。漸く手紙の意味が分り。何う返辭すれば宜いと云ふ思案が附いた。爾して返辭を出した後て。直に娘松子を呼び。自分の身體へ充分勿體を附ける樣な身振と口調て『和女は未だ。阿母さんの親類の事を能く知るまい。自分の口から云ふのは自慢の樣に當るから今まて吹聽はせぬけれど。私の血筋は大變な門閥家から出て居ますよ。コレ御覽な』と云て子爵の手紙を差示した。松子は飛附く樣に受取て讀むかと思ひの外。手にも取らぬ。門閥家など云ふ高大な言葉が少しも有難くは聞えぬと見える。却て大聽の仰山なのを賤む樣に母の顏をジッと見た。此冷淡な容子て見ると。日頃何事に付けても母、餘り意見が合はぬと見える。多分は根本から氣質が違ッて居るのだらう。夫人は腹の底に嬉しやら心配やら充滿て居る際だから腹を立てる裕りが無い。唯だ迫き立てて『サア讀て御覽と云のに』とて。自分の手て更に又娘の目の前へ擴げ直した。松子は詮方無しに讀て了ッて『之がうしたのてす』夫人『何うしたとて。名譽の高い藏戸子爵が故々阿母さんを尋ねて下さると有るは無いか』松子『故々ては有りません。倫敦へ來た序にと書て有ります』夫人『アレ分らんねえ。ても故々ては無いか。大事の親類ならばこそ。故々立寄て下さるのだよ。今まて阿母さんが此

な親類の有る事を餘り口に出して云はなんだのは感心だらう』云はなんだ譯では無く。全く先方から忘れられて居たので。云ふたとて何の甲斐も無かッたのだ。又實際に。百年以上も交通がて居て。人に云ふ程の親類では無いのだ。松子は何と返辭して好いやら分らぬから再び母の顏を見詰めた

母御は少し失望して『和女は何だッて此樣な時の相談對手に成らぬだらう。ソレ今から三ヶ月ほど前の新聞紙に。藏戸家の不幸が出て居たでは無いか』松子『ハイ出て居ましたが。那の時は別に親類の不幸の樣に悲みも成さらぬ樣でした』夫人『獨り心の中で悲んで居ましたのさ。先あ那の新聞を持て來てお呉れ。篤と讀直して見ねば』心の中で悲んだけれど。今は其事柄を忘れたと見える。松子は逆ひもせずに退いたが。間も無く綴込んだタイタムを持て來て『茲に在ります。太郎次郎と云ふ二人の息子がプリンス號の沈沒て。亡なられたと』夫人『爾して何か相續人の事は書て無いの。エ。誰が其の息子の後へ直るとか云ふ樣な事はドレ其新聞をお寄越しな』

受取て。熱心に其所此所と讀直し『先ア大變な不幸では無いか。一時に二人の息子を失ふとは。けれど相續人の事は書て無い。定めし血筋の上から順當に定ッて居る人も有らうけれど』と云ひ掛けて怪しげに少し考へ『イヤ相續人が定ッて居るなら何故子爵が此家へ尋ねてお出でだらう』

と呟き。暫しが間。默然として首を傾けたが。思ひ當ッた樣は『ア、分ッた。相續人を他から入れるが厭だから。子爵が後妻を娶るお積りなのだ』と云ひ少し其顏を赤らめる樣に見えたは。確に自身が後妻の候補者に立たのだと思ッたのであらう。自分の綺麗が遠近に鳴響いて居るとは。此婦人の乘ての持論て有るのだから。噂を聞及んで下檢分の爲に來るて無くば。其外に用事の有らう筈が無い

全く夫人は。一時だけれど。胸を躍らせた爾して壁に倚ッて居る鏡を横目に睨んだ。けれど此夫人は。早や年が五十である。一時は何の樣な誤解をして胸を轟かせるとも何事に就けても總躰の位置を一時に見て取るが巧な人だから。眞逆にと直に自分で打消して。或は娘松子の爲か知らんとも思直した。爾としても未だ能くは合點が行かぬけれど。何にしても損の行かぬ客と云ふ丈は確である

『ねえ松子。餘ほど氣を附けてお迎へ申さねば成らぬ事だよ』と考へ〳〵云ふた。松子は唯だ『爾ですか』と答へた。夫人は頓て思案が定ッた樣に『直にゼイ夫人を呼に遣てお呉れ』ゼイ夫人とは古い着物を新しく見せ掛けるに妙を得た人である約めて云へば古着屋で。何の樣な出來合をても著へて居る。自分の店に無い場合にも咄嗟の間に周旋する。松子は呆れた樣に『阿母さん

眞逆に藏戸子爵とやらを迎へる爲に。着物まで拵へて掛るのでは有りますまいヲ』夫人『イヽエ。和女も私しも輕い喪服を着けて居ねば成りません。通例の喪服は有るけれど其れでは餘り重々しく。見え過ますから聊か色の輕いのに仕ませうよ。何しろ一方ならぬ御不幸で定し猶だ悲みに沈んでお出だらうから。喪服を着けて同情を表すれば。和女などの思も寄らぬほどお喜び成さる。何にも云はずに。私しの言ふ通りに從ッてお居て』反對を容さぬほど嚴重に言渡した

十二　愛の中の理、理の中の愛

眞の母子でありながら草村夫人と松子との氣質は何うして斯う全く違ふてあろう。夫人が掛引の巧なと同樣に。松子は眞面目である。夫人は直に目上の人の機嫌を取るが。松子は寧ろ目下に向ッて優しい。夫人は腹よりも口先に信切が有るけれど。松子は口先で無く腹の中に同情を持て居る母が細工や僞りで潤拔る塲合を娘は眞心と正直とで推通す。男で云へば母が策士で娘が勇士とも云ふ樣な者だらう。何事が有ても母と娘との意見が違ふ。けれど娘は娘だけに。小い事柄な遂に我慢して母の意に從つて了ふ。其の代り大な事柄になると。母が何と云はふとも固く執てかぬ塲合がある。其れだから母ながらも時に依ると娘を恐れ最う少し從順で有て呉れしば好い

にと思ふ事もあるのだ

藏戸子爵の事に就ても母の方は。滿腔の同情を表した樣で。實は損得の勘定を先に立てゝ居る。娘の方は別に何とも云はぬけれど。腹の中で子爵を。眞に氣の毒な人だと思ひ。同情を包んで居る。大變な違ひと云ふ可しだ。子爵の方は斯うとも知らぬ。只だ夫人から返辭の手紙を得た翌日に。何の樣な母子に逢ふことかと怪み。取分けて娘松子が何の樣な女だらうと氣遣ひつゝ。馬車て草村家を指して行き。其門に到つて降りた。見ると家の容子の仲々小綺麗で。箱庭の樣に出來て居る

子爵は春川梅子の家の容子を思ひ出した那の荒果た廣い屋敷と。此の研き立てた小作な家と。何方が藏戸家の相續人を育てるに適當して居るだらう。何うも此方には僞りとか虛飾とか云ふ樣な狀が浮出て居るかとも疑はれる

飾ッた作りは。俗人の目を驚かせるには好いけれど。子爵の樣な。此屋敷よりも百倍も立派家に住慣れて居る人から見ると何だか片腹痛い心地がする。併し子爵は嚴重な且つ公平な人で。直に我と我心を叱り。イヤ／＼。此身は藏戸家の相續人を見立ると云ふ重大な責任を持てるのだ。家の作りなどを見て。早くも心の底へ偏頗輕重と云ふ傾いた考へを起しては成らぬ。

村夫人が寡婦の身でありながら。此樣に家の外見にまで注意が屆き。何も彼も研き立てた樣にして有るのは、彼の繪畫のみに夢中となり。家の事さへ打捨て置く春川春堂に比べて。立優て居るとも云ふ可きである。何うか此家で春川梅子にも優る程の相續人を見出したい。實際彼女に優る女が有らうとは思はれぬけれど。若し有たなら。其れに上越す幸ひは無い

此樣に思ひ直し。本統に虛心坦懷と爲ッて玄關に進み案内を請ふた。間も無く客室へ通されて入ッて見ると。世帶の心配に聊か窶れて居るかと疑はれる顏へ强て有福げに笑を浮めた五十恰好の夫人が恭々しく立て居て。露の垂れる樣な優しい聲で『オヽ藏戸子爵。能うこそお出で下さいました』と叫んだ。其の打解けた待遇は嬉しいけれど。何だか『誠』と云ふ心が薄い樣に子爵は聲の調子で感じたけれど。是れは僅の間である。引續いて二言。三言。場合相當の挨拶が双方の口から出て終ると。直に夫人は其身の背後に居た娘の手を取て連出し。『これが私しの娘です。松子と申ます』とて引合せ爾して其身は松子が何の樣な感動を與へるか知らんと熱心に子爵の顏を見詰めて居る。これは。今まで誰とても。初て松子に逢ふ場合には。其の美しさに打のめさるる樣な容子を洩すので。夫人は子爵の顏に其容子を見たいのである。一分間と經ぬうちに全く母子は滿足した。子爵とても數には洩れぬ。確に美くしさに打のめされた

松子が美人と云ふ事は疾て聞て居た。けれど今まで子爵の多く見た美人とは美しさの質が違ふ若し之を春川梅子に比べて見ると。梅子のは透とほる程の美しさて。松子の方は奥の知れぬ樣深い美しさである而も一つ年上だけに此方の美が發達して居る。梅子は清い美て婀なくて。少も僞りと云ふ事の出來ぬ質だが。松子は高い美て落着て居て。重い大なる責任にも耐る質である若し梅子の涼しい眼が慈悲を以て天下の罪惡を感化する力あらば。此方の締た唇は國家の秘を托されても決心を以て守り果せる力が有らう。初て梅子に逢た時は只だ親しさを覺えて我兒の樣に感ぜられたるが松子に向ふと。尊ひの念が加はつて拜み度い樣な氣がする。早や子爵は疑惑ふた。何方が藏戸家の後嗣に適するだらうと。今が今まで梅子の外に適任の無い樣に思て居るのは。大變な違ひてある。愛の心が梅子に傾けば理の心は松子に傾く。人心の愛と理と。何方が强いか。千古の大問題てあるが上に。殊に此場合には愛の中にも理が有ッて。理の中にも愛がある。終に何う決する事やら

十三　殆と涙の人

暫しがほど子爵は。草村松子の顏に見惚れ。挨拶をさへ忘れて居るかと迄に見えたが終に辭儀

した。其の辭儀たるや、心の底から出たので。何と無く恭しげに見えた。之ほどの辭儀は春川梅子に向ッては加へなんだ。此一事でも梅子と松子に對する子爵の心持の違ひが分る。梅子には尊敬よりも愛らしさを餘計に感じたのだ。松子には愛らしさよりも尊敬を餘計に感じて居る。

子爵の辭儀を受けて松子も辭儀した。併し無言の辭儀て有ッた。尤も傍に母なる草村夫人が居るから。實は言葉を發するにも及ばぬ。云ふ可き事は總て夫人が代言して呉れる。果せる哉だ。夫人は子爵の眼が松子の顏より其衣服に移る頃だと見て。茲が母子の喪服を仄めかせる時期だと思ひ『イヤ子爵。お目に掛れば何より先にお悔みを申上げねば成らぬ所でした。先ア何と云ふ御不幸てせうねえ。私しも松子も那の悲しい新聞を見て泣き暮しましたよ』嘘ばかり云て居る。けれど子爵の心は陽氣を得た霜の樣に解けた。殊に母子の輕い喪服に目が着いて。行屆げる注意に感じ。有難いほどに思ふた。是れが若し日頃の子爵ならば初對面の人が斯まで心を用ふるのを却て虚々しく感じたかも知れぬ。けれど今の子爵は殆ど涙の人である。少しでも。死だ二個の息子に同情を表して呉れる人が有ると唯だ有難い

斯かる間松子は。自分の母の偽り多き挨拶振が氣に喰はぬのか。少し身を斜にして椅子に腰掛け。母と子爵との方を見ずに。無言て窓から庭の面を見詰めて居た。子爵は此狀を見て非常に氣

高い女だと感じた。世辭の無い者には必ず實意が有ると乖て子爵は思ふて居る。何うか自分の方へ松子の注意を向けさせ度いと。二言三言其積りて發したけれど松子は依然として動かぬ。何だか子爵は耐へ得ぬ樣に成り。鐵に引かるゝ磁石とも云ふ可き樣に。フラ〳〵と立て松子の傍に行た。我にもあらてとは此事だらう。爾して少し震ふ聲て『貴女は。初て來た私しに。一言。能く來たと云ては呉れぬのですか』眞情を以て人を動すとは此言葉の樣なのだらう。松子は顏に紅を潮した。爾して子爵を見上げた目には聊か露の光が見えた『何う致しまして。本統に私しは能くお出て下さッたと思ッて居ます』子爵は此言葉が肝に銘ずる樣に思ふた。爾して『イヤ私しは。我家に最う。誰も慰めて呉る者が無い爲に。此年に成て。知人や。日頃尋ねぬ緣者などを尋ね。同情の言葉を聞て歩て居るのです』云ひつゝ全く涙を流した。松子は深く自分の餘所々々しかッたを耻ぢもし悔もする容子で『イヤ何とも言葉には盡さぬほどお傷しう思ひます。けれど兄弟お二人が抱合て立派に死だと有りますから。其れだけもお心强いては有りませんか』死樣を立派として褒めるのは確に貴族の思想である。子爵『オヽ。能く云ふて下さッた。若しも二人が。死際に見苦く泣叫などしたなら。私しは斯して此方へ出る氣力も出なんだてせう』松子『立派にして死だ方が。耻しい生活を送るより優ッて居ると思ひますよ』

母御は傍て聞て。耻しい生活とは暗に。僞りの多い我身の事を指すのかと氣が廻ッた。遽だしく言葉を挿んて『アレ先あ。耻しい生活などゝ。和女は其樣な事を知らずに。イヤ其樣な言葉さへも聞かずに育ッたのに』松子は最と輕く『爾ですか』と答へたが。輕いだけに却て千斤の重さが有た。母御は子爵に向ひ『此子は色々な本など讀むものですから。時々飛ても無い事を言出しますよ』とは他日の豫防をも兼ての言葉だらう。けれど子爵は。此夫人に飛ても無いと思はれる丈け。松子に直打が有るのだと思ッた

爾して故と話を轉ずる爲め『松子さんのお顏は藏戸家一般の形とは少し違ひますが——』却て見優る所が有る樣に褒めやうとした所ろ。夫人は直に『本統に藏戸家の顏と云ふのは私してす。藏戸家の顏は代々色が——白いのですねえ』松子の顏は透とほる樣に白い質では無い。松子『私しの顏は父に似たのです。父は色が黑くて背の高い方でした』母に似ないで仕合せとの嘲りの意も含んで居るのかと母御は思ひ。矯める樣に目叩きした。子爵『私しは松子さんが。春川梅子と並んだなら。嘸ぞ美しい活畫の二幅對が出來るだらうと思ひますよ』とて之よりノスヒルドを訪ふ次第から梅子父子の事を語り。最後に『貴女も何うか藏戸家へ逗留にお出て下されませんか』と請ふた。松子は梅子が喜んだほど喜ぶ容子は無い。何か都の土地に戀しい事柄でも有るのか。唯

だ『ハイ』とのみ答へた。母御の方は聞くが否や飛立つ樣に『藏戸家へお招き下されば。私し共母子の生涯の名譽です。何時でも參る事に致しますよ』と子爵に拔指させぬ樣に釘を打ッた

是より二時間ほども雜話して日の暮る頃に及び子爵は又來ると約束して辭し去た。此夜子爵が留守なる葉井田夫人に書送ッた手紙には『余は草村松子ほど美しく氣高く。而も萬事に行渡れる少女を見しと無し。言葉にも振舞にも塵ほどの僞り無きは此少女なり。其の前に出れば女皇の前に出たる如き心地あり。全く松子は貴族の家の女主人として生れ出たる者に似たり』云々の文句が有ッた。葉井田夫人は讀終ッて『子爵は氣てもの違ッたのか知らん。何の女を見ても此上の無い樣に云ふて來るとは』とて。殆ど笑ひを催した

十四　唯一つ合點の行かぬ

是より子爵は大方毎日の樣に草村家を訪問したが。其の噂が交際場に聞えると。傾き掛けて居た草村夫人の信用が俄に回復して。殆ど昔の盛で有ッた頃の樣に方々から招待狀が集る事に成ッた。何うして斯う急に噂が廣ッたかと思へば其は無理も無い。子爵の立去た後で。一々夫人が。子爵の來た事を貴婦人雜誌へ投書して居た。何しろ今まで久しい間。交際社會からの招狀に餓

え。招かれさへすれば必ず行く樣に仕て居たのが此頃ては招狀の高下を選分け。直打の低い方は斷ると云ふ贅澤な味を嘗める事が出來て來た。但し其の斷り手紙には『藏戸子爵と先約ある爲め』と云ふ文句を必ず書入れたと無論てある

斯て十日も經た頃には。子爵と松子との間に餘ほど馴染が深くなッた。松子は日頃父の愛に渴し。唯だ氣質の合はぬ母親と衝突ばかりして居たのが。眞に氣位の高い。信切な。淸潔な子爵に逢た者だから。知らず〳〵子爵を父の樣に慕ふ心も出來。藏戸莊へ逗留に行くと云ふ事を樂い樣に感じて來た。併し松子の氣風に。唯だ一つ子爵の合點の行かぬ所がある。其れは何だ。外ても無い。春川梅子に比べて何所にか控目に見える所が有るのだ。梅子の方は眞に便り無い身の上て有る爲ても有らうが。何も彼も子爵に縋り。少しも隱し立などして居る樣な所が無かッた。梅子の顏を見ると綺麗に其の腹の中までが透通ッて見える樣に感じた。松子の方は爾て無い。何だか子爵に見え透かぬ所が有る。之は未だ松子の打明ける事が足りないのだ。或る程度までは充分に打明けるけれど。其の程度から先は塀を築いて入込ませぬと云ふ風がある。一つは松子が獨立の氣象に富み。爾うまて人に縋るとか打明けるとかする事が天性出來ぬ爲ても有らう。又一つは傍から母が掣肘する爲ても有らうけれど。何か心の底に曰く言ひ難い所の者が有るのては有るまい

か。心の底の底へ大事にして納ッて置く者が有ッて。其れを誰にも見せては成らぬと知らず識らず勉めて居る爲ては有るまいか

子爵は爾とまても深く見て取る事は出來ぬけれど。何だか其隔てが氣に成ッて。折々に若松子が梅子の樣に打解ける天性て有て呉れゝば好からうにと思ッた事も有る。其代り又松子には。一つ梅子に無い長所が有る。其れは天然に音聲が美しくて且つ音樂に巧な一事てある。梅子とても話する聲など聞くと宛て鶯の初音の樣で有ッたから多分は謠ふ聲も見事て。或は樂器を奏てる事にも妙を得て居るかも知れぬ。併しノスヒルドて廿日ほど逗留して居る間に。梅子の謠ふをも音樂を奏するをも聞なんだ。多分は其の藝を修めて居ぬので有らう。縱し修めて居た所で。松子ほどは修めて居ず。人に向ッて。修めて居ると名乘るほども修めて居ぬのては無からうか。松子の方は爾て無い。尤も此れも自分からは云はなんだが。母御の自慢話が本て。到頭子爵の前て謠ひ奏る事に成ッた。其の聲の美。技の妙は。舞臺て其れ者のを聞た事は有るけれど。素人に此れほどのが又有らうとは思はれぬ。子爵は其れが爲に泣されもした。喜ばされもした。果は松子の音樂を聞かぬと。自分の身體の一部分を奪ひ去られた樣な氣がして。物足らぬ心地に堪へぬ程にも成ッた。全く松子の此聲此技は。黑人にも近ひと云ひ度いが實は黑人ても是ほどに行かぬが。幾

等もある。

兎に角。松子は。最早や子爵に取ッて。無くて成らぬ身とは成ッた。松子が無くば子爵は自分の身が居ると思ひ得ぬのだ。併し斯まで成ッたのに。松子の心の底に。見え透かずに潜て居る隔ての様な者は何て有らう。之れは子爵も察せねば成らぬ。松子は梅子より年が一つ上てある爾してノスヒルドの様な静な土地とは違ひ華美な都に住み。華美な人々と交り。若い娘の心を動す様な場合のみに接して居る。幾等心の確な女だとても。最早や年頃ても有り。何か心に思ひ定めた事が有るのでは有るまいか。有るとしても怪むには足らぬ。又其の思ひ定めた者が。身分に相當し。且は充分信任するにも足る様な質てあらば。何も心配するには及ばぬ。却つて其れが爲に其身まで能く定まるかも知れず。後々の幸福も其の方面から其るかも知れぬ。けれど子爵は斯と迄は察し如ぬ。唯だ怪むのみてある

此の聊かの氣掛りの有るが爲に。丁度松子と梅子とが子爵の心の中て同じ重さを支へて居る。幾度子爵は兩女の事を思ひ比べて見るかも知れぬ。何方が我が家の後取に適當だらう。梅子の事を思ひ出すと梅子ほど愛らしい。美くしい。爾して心柔の好い。而も憐む可き者は無い様に思はれ。更に松子の方を思ふて見ると是れも天然に藏戸家の相續人として生れて居る様に思はれ。最

う梅子の事は忘れても好いと云ふ程の氣もする。何方に仕やう。何方を餘計大事に仕やう。到底決する事が出來ぬ

ナニ是は今決するには及ばぬ事。兩女を藏戸莊へ迎へて逗留させ。葉井田夫人に見せ。瓜首にも見せなどすれば。其間に自から優劣が分ッて來やう。少しも遽て惑ふ事は無いと。斯う安心はする者の。若しも松子の方が落第するかと思へば氣の毒の念に堪へず。又若し梅子が落第するかと思ふて考へて見ると。泣き度い様な氣に成て來る。實に困ッた難題が出來たものだ

十五　驢馬の比喩

昔々話に『空腹な驢馬』と云ふ譬喩が有。今。藏戸子爵が丁度其様な者ては有まいか。

腹の空て倒れ相になッた驢馬が。何所かに。食ふ艸は。生て居まいかと思ひ。尋ね尋ね歩んて行くと。忽ち路の兩側に。何とも譬へ様の無いほど旨相な草が澤山。澤山。茂ッて居た。ヤレ嬉しや。之て命が助ッたと。奴さんは早や口に涎を一ぱい溜らせたが。扨て何方側の草を食はうと比べて見ると。右も非常に好い。左も非常に好い。何方にしやうと心が兩方に迷ひ。只だ思案に呉れるうちに腹は段々に空く。其れても到底双方の優劣が分らぬ。エ、何だッて何方かの草がモ

ッと辭て居て呉れぬだらうと、恨で泣き暮したと云ふ事だ

梅子か松子か、何方でも少し劣て居て呉れさへすれば、何も子爵は斯う惑はぬのに、兩方とも美しいが上にも美しく、心柴も縱へ善い所が互に違て居るにしても惡い所は少しも無い、無疵の玉と玉との樣な者だ、到底選定めるとが出來ぬから、仕方が無い屋敷へ招いて逗留させ、多くの人に逢せるうちには、終に優劣が分つて來るだらうと心に賴み、倫敦を引上げた、其れは初て松子に逢てから十五日目であつた、最も引上げる時に、矢張り置土產だと云て、一包の何やらを松子の母に與へ『何うか私しの無遠慮を咎めぬ樣に仕て下さい』と呉々も詫る樣に云て去た、其後て松子の母が包みを開くと、何も腹の立つ事て無い、衣服地として二千圓の金が入て居た、梅子へは千五百圓て有たけれど松子の方は母をも勘定に入れて殖したどらう、母夫人は咎めるドコロか頬の框から先づ頽れて『本統に貴族らしい貴族とは藏戸子爵ですよ』と叫んだ

＊　＊　＊　＊　＊　＊

其れは爾として置て、松子の腹の中に少し見え透かぬ所の有る樣に思はれるのは、何であらう、子爵に聞せて少し疵になる樣な事柄ては有るまいか、イヤ爾て無い、松子の氣風が、決して恥づ可き事柄を蓄へて居る樣な質ては無い、却て自分では、自慢しても好い樣に思ひ、俯仰天地に恥

ずとか云ふ程の氣て居るのだけれど、事情が有て隱して居る、茲に其事を記して置かうか

實は松子が十六の夏て有た、母御は土用の暑さに、避暑の地へも行かずに、倫敦に居るのは、貴婦人の資格にも障る樣に思ひ、誰れか我が別莊へ逗留に來いとでも招いて呉れる人は無からうかと、梅雨の頃から例年の通りに八方へ運動したが此の年は其甲斐が有ッて、佛國の或資澤家から招かれた、丁度其際に、好い時には好い事の來る者て、又他から同じ樣な招きが有た、其れを斷ッては後々に障ると思ひ、自分だけ佛國の方へ行き、松子を一方の招きに應ぜさせる事にした

斯う話が極つて松子の方は、母より一日先に家を出て、指して行た所を何處かと云へば、倫敦から汽車で半日て行かれる或山邊の別莊て、主人は弓澤と云ふ宗教家で有ッた、其の家て松子は、朝は牧場に出て露の涼しい草を踏だり、昼は林に入りて、綠も香ふ樹間の風に吹かれたり、殆ど天國に入た思ひて遊び暮したが、折好くか折惡くか其の所へ主人の遠い緣に繫がるとやらて弓澤民雄と云ふ學生上りの若者が、之も夏のうち逗留するとて遣て來た、此者は親に讓られる身代も無く、何うして〻自分て立身出世をせねば成らぬ身の上と云ふ事て、秋になれば倫敦へ辯護士を開業するに定ッて居た、年は其時が廿二て松子とは六歲違ふけれど、何しろ双方とも話し相手の無い田舍だから、若い同士とて直に懇意と爲り、遊び友達と爲り、爾して夏が終ッて分れる時に

は、何にも譯は無いけれど、末は夫婦と云ふ約束が出來て居た

勿論譯は無い。譯は無いけれど、兩人とも世間も知らず、向ふ見ずの年頃だから、眞に深く思ひ合ふて、此人の外に人は無いと云ふ程の心になッた。其れから倫敦へ歸ると、間も無く弓澤民雄は辯護事務所を開いたと云ふ事で、直に松子の許を尋ねて來て、母夫人に向い、松子を妻に呉れと言込んだ。其時の母夫人の立腹は見ものであッた。乘てから松子には爵位の有る所天を持たせ、自分の地位と名譽とを引上やうと云ふ考で、其のみを樂にして居る母だから、松子が地位も財産も無い書生と夫婦約束をしたと知ては、命より大切の寶を盗れた樣に感じ、達者な口先で、有らん限の惡口を民雄の顏へ吹掛て追拂ッた。爾して其後で直に松子を呼び、此上の叱り樣は無い程に叱り附けた。けれど松子は年よりも長けた量見で、何しても民雄を思切ると云はぬ。是れが母と松子との衝突の初で、其後は今に至るも母子の間に、何だか物の介ッた樣な感じが殘ッて居る。何でも廿歳を過ぐれば、女は自分で所天を選ぶ權利が出來るのだから、其時を待て弓澤民雄の妻になると、堅い決心が今でも松子の腹に在り、爾して民雄の方も、松子に見込れた男だけ有て、今時の若者に比べると餘ほど其氣象の優れた質で、何うしても松子を妻にせねばとの大決心に勵され、兎も角自分の位地を作る樣に一生懸命に勉强して居る。其の甲斐が有て、今では若

手辯護士中に名も高くなり、此者こそは將來、獨立主義を推通した平民界の偉人とも立られる事になるだらうと、知る先輩から望を屬され、此頃では餘ほど前途が晴やかに成て來た。けれど草村夫人に取ては矢張り蜒蚰の樣な思ひてある。若し脛潰して摘み捨るとの出來る者ならと時時夫人は呟くのだ

松子の心の底の蟠盤は是てある

十六　イヤ爾は行きません

松子は胸の此蟠盤を藏戸子爵に打明やうかと思ふた事もある。全く子爵が自分を子の樣に傷ッて呉れ殆ど父の慈悲を持て居る程に見える時も有るので、折々は母の氣質と子爵の氣質とを思ひ比べ、母には何事を云ふたとて無益だけれど、子爵ならば其の廣い柔しい胸の中で、能く此身の心を察して呉れ、母の心の柔く樣に說諭までも仕て呉れやうかと、此れほどにも思ふたけれど、或とき子爵が『若し太郎と次郎とが生て居れば、丁度貴女と梅子とを二人の妻に貰ひ受けますのに』と云ふたので松子の氣は挫けた。此樣にまで心配して居らるゝ方へ、又も自分の心配を打明けて荷を負はせるは氣の毒である。今云はずとも亦何時か云ふ時が來るだらうと、思ひ直して口

を禁んだのが。言そびれた本であッた。或は其時に思ひ切て云ふて置た方が自分の爲にも子爵の爲にも好ッたかも知れぬ。

けれど今更ら仕方が無い。爾うして子爵は間も無く藏戸莊へ歸ッて了ッた。斯う子爵に分れて見ると。何れほど子爵が自分の心を慰めて居て呉れたかと云ふ事が能く分る。何だか父にても分れた樣な氣がして。藏戸家へ逗留に行く日が待遠い樣に思はれる。併し愈よ行くにしては弓澤民雄に事の次第を打明けて篤と承知させて置かねば成らぬ。手紙では心も盡さず。又民雄から返辭の來た時に。今まで例の有た通り母に其の返書を沒收される恐れも有る。何うか直々に逢ふ事は出來まいかと。只管ら心を碎いて居たが。天の助けかやッと其の塲合が有ッた

塲合とは外て無い。民雄が或る重い罪人を辯護して。迚も見込の無いと先輩から云はれるのを單に自分一人の力で美事に無罪にした。其の辯護の旨かッた事は近頃の法庭に類が無いとて新聞紙にも傳へられ。同業にも噂せられた。是が民雄の本統の立身の基が立たと云ふ者て。是からは色々な法律事務が民雄の手に轉ッて來るに違ひ無い爾うすれば一時に所得も增し。名譽ある先輩と肩を並べる事も出來て來る。既に其の辯護の終ッた翌日から。夜會などの招待もズッと殖えた。今までは偶に招かれても草村夫人の招かれる樣な方面とは段が違ひ。未だ流行社會と云ふに足ら

ぎ『では最う梅子と、思定めてお歸り成さッたてせうか』と問ふた。子爵は『イヤ爾は行きませんん』とて更に松子の事を說初めたが。其れを聞くと松子こそ優しい中に、男も及ばぬほどの寛大な氣風が有て、天然に大なる王國か爾なくとも大なる領地を支配する樣に生れて居るとの事である。『其れなら松子にお極め成さッたのですか』と葉井田夫人が再び問へば『イヤ爾は行きません』と同返事である。夫人『では何方にするのです』子爵『何方が好いか。私しには何うしても分りません。其れですから此の選分は第一に貴女、第二に瓜首へ一任します』夫人は重い責任を負された者哉と。顏に心配氣な色を浮べたけれど。爾る愛らしい二人の少女が此身に運命を任せるかと思へば嬉しく懷しい心地もする『何しろ兩女が其樣に優れて居るのは。未だ當家の運が盡きぬのです。何か少しの間違ひも無い樣に選り定め度いものです』と云ひ。良久しく無言と爲ッて考へた末。猶も心配げに問ふた『梅子と云ふのは母親が無いのですね』子爵『爾です。其れに父親とても殆ど無いのと同樣です』夫人『松子の方は其の阿母さんが一緒に來るのですね』子爵『爾です』夫人の目には憐れみの露が光ッた『其れでは梅子が叶ひは仕ません。母も無く世間も知らずに育ッた身で。唯一人茲へ來るとは。其れに年も一つ下だと云ふでは有りませんか』子爵も流石に悄然として『其代り梅子の方は少し試驗の點數を斟酌して遣れば好い』とは。苦しい言樣である

十七　流石に法律家

併し葉井田夫人は思ふた。幾等梅子と松子と優劣が無いと云ても。其れは男の目で見るからの事。兎角男は顏形に目が呉れて双方の美しさが同じてあれば。其れ丈けて最う判斷に迷ふて了ふ。自分が見れば決して其樣な事は無い。容貌などには迷はされぬから。初て逢た時の感じ丈けても直に優劣が分るだらう。縱しや其れては分らずとも幾日か經つ中には必ず分る。唯だ自分の心に前以て依怙贔屓を附けて居ねば好い。公平て有りさへすれば好い

とは云へ。何しろ此藏戸家の百年の大利害が分れる所だから大事の上にも大事を取り。篤と瓜首法務士の意見をも聞かねば成らぬと。此翌日彼れを呼迎へた。爾して子爵から。松子梅子の少しも優劣の無い景狀を聞かせると彼れは日頃の眞面目にも似ず嘲笑ふ樣な調子て『其れは子爵。物事の鑑定と云ふ事に慣れて居ぬ貴方のお目ては。判斷の出來にくいのも最もてすが。私しの如きは何を見ても先づ鑑定を下すのが職業の秘訣てすから其點に於ては御心配を掛けぬ積です。若し御必要ならば兩女の來た時に即決をても下しますが。ナニ此事件は即決に及びません。緩々と見較べる爲に兩女を逗留させるのてすから。緩々と判斷を下しませう』と云ひ。更に大切らしく

注意を持出し『ですが子爵も葉井田夫人も。愛憎の念を捨て御覽下さらねば可けませんよ。何方が可愛いとか憎らしいとか云ふ念が微塵でも有れば必らず間違ひます。私し共は愛憎を絶滅して唯だ利害と云ふ念のみから視るのです。其れだから縱しや一方が目ッ眇て有ッても鼻ッ缺て有ッても公平を失なひません』流石に法律家の心掛だと子爵は大に安心し。葉井田夫人も頼もしく思ふた。瓜首自身は愈よ得意の技倆を現す時が來たと云ふ樣に。心中得々として見えたが暫くして又念を推して『ですが子爵。松子へも梅子へも。決して眞の秘密は打明けて無いのですね』子爵『眞の秘密とは』瓜首『優劣を比た上で一方を相續人にすると云ふ』子爵『其れは少しも知せて有りません。尤も女同士だから何に付けても云はず語らず競爭はするかも知れぬ。互に見劣りのせぬ樣に。ハイ其樣な意味は暗に仄かせも仕たのですが。相續人にと云ふ事は双方とも全く思ひも寄らぬのです』瓜首『其れなら安心です。何でも二人の中から相續人を選ぶと云ふ事は當人へも他の人へも決して知せては成りません』葉井田夫人は初て言葉を入れ『でも草村夫人は若しや―』子爵『左樣さ。草村夫人は。何事にも能く目の利く方だから。或は暗に嗚知て居るかも知れぬけれど是とて決して私しが漏した譯ては有りませんから――』瓜首『其れでは知て居るのでは無い。疑て居るぐらゐに止まるのでせう』

先づ一段の話は極り。是で瓜首は引取たが。其後て子爵は又も葉井田夫人に。松子梅子を迎へるに付ては用意一切を打任せた。勿論斯樣な事は今までとても總て此夫人の任だから。今更驚きはせぬけれど決し兼ねる所もある『用意と云へば第一に兩人の居室ですが。何の樣な所が好いでせう』子爵は考へつゝ『梅子は天然の美を愛し。花の咲いた狀や鳥の囀る聲などが好だから。成る可く晴々と明くて花園に向て居る方が好いでせう。松子は少し是と違ひ。大な景色や古い謂れの有る樣な所が氣に向くだらうと思はれます。向ふの河から山の城跡を見渡せる所にして遣りませうか』素より廣い屋敷だから。何の樣な室ても有る。葉井田夫人『其れから兩女の着た夜は、晩餐の席へ何の樣な人を呼びませう』子爵『内だけても淋し過るし。と云て餘り初對面の人の多いのも疲れた兩女へ氣の毒だから。瓜首の外に一人ほども招くとしませう』落も無く信切に取計ひ。更に此翌日よりは。客間の飾りから玄關及び庭園の手入れにまても取掛らせたが。何事も障り無く運んで愈よ兩女の來着する日とはなッた

十八　長い樣な短い樣な

愈よ松子梅子が到着する日とは爲ッた。松子は無論母夫人と一緒に來るのだ。梅子は迚も父春

堂が連れて來る筈は無く、爾ればとて獨り旅もさせられぬから、子爵の注意て老女一人を、數日前に迎へに出した。此老女に連られて來るのだらう

此日ほど藏戸莊が美しく飾り立られた事は、あまり無い。縱しや飾らずとも天然に壯大な、英國中て屈指の、風景にも歷史にも富だ莊園てあるが上に、門前に横はる廣い遊園は、秋とは云へど、花卉も無いほどに掃除が屆き、芝生も有れば林も有り、其の周圍は調馬場と爲て居るなど、凡そ戸外遊戯の仕組が一として備はらぬは無い。若し初て此土地に入る人が、停車場を出て此の遊園まて來れば仙境に入る想ひがするだらう。家の中は更に之よりも手が行屆て居る。數日來葉井田婦人が其の靜な綿密な注意を以て、引受けて仕た事だから少しも落度が無いと云て可い

兩女の着するは午後四時の筈てある。今は二時を打たばかりて猶だ餘ほど間は有るけれど、葉井田夫人は今日こそ當家の未來が定る日て、而も其の責任が重く自分の肩に壓ッて居ると思へば、心配に胸も騷ぎ。幾度と無く客間其他を見廻ッて居る。萬に一つも手落が有ッては成らぬのだ。斯る所へ。是も同じ思ひだと見る主人子爵が廻ッて來た『夫人よ。今日は先あ。日が長い樣な短い樣な。爾して嬉しい樣な心配な樣な何とも云ひ樣の無い妙な日てす』夫人は少し笑だけれど心配げな色は失せぬ『ハイ私しも其樣に思ひますが――』子爵『最う何處にも失念は無いてせうね』

夫人『ハイ爾う思ひましたから。只今安心して。迎への者を停車場まて送りました』子爵『梅子と子の室は何うてす』夫人『大抵好い積てすけれど。一應貴方のお目て御覽下さい』打連立て二階に上ッた

爾して先づ梅子の室を撿めたが。遠く看降す花園には。今を盛りと菊が咲き。猶ほ廣い庭の此方彼方に秋の花が色を競ひ。錦を掛けた樣に見える。其の上に室の中の飾り附けも梅子の氣質に合つた樣に出來て居る。次に松子の室を見ると。之れはまた遠い古跡から雄大な景を控へ。領地の殆んど半面が見えて。是れは室内の備へ品も悉く一種の意味を以て居る。子爵は嘆賞して『イヤ貴女のお見立てには敬服の外は有りません。兩女を連れて來て思ひ〳〵に注文させても。斯うまて行屆きはせぬてせう。是れて貴女が。見ぬ前から二人を何れほど愛して居るかも分ります』夫人『未だ見ぬ先から愛すると云ふ事も有りませんが。太郎次郎を愛した心が其まゝ移ッたのてせうけれど。先日も瓜首さんが少しも愛憎の念を持ては可けぬと呉々云はれましたから私しは何事をも思はない樣に仕て居ます。ても思ふまいと思へば猶更ら思はれまして。てすが子爵。貴方は全く何方にも。少しの優劣が無いとお思ひてすか。誰の考へよりも貴方のお心が極りさへすれば』子爵『イヤ私しも此樣な決斷の無い男では無いと思ひますのに。是ばかりは決し兼ます。日を

堂が連れて來る筈は無く、爾ればとて獨り旅もさせられぬから、子爵の注意て老女一人を、數日前に迎へに出した。此老女に連られて來るのだらう

此日ほど藏戸莊が美しく飾り立られた事は、あまり無い。縱しや飾らずとも天然に壯大な、英國中て屈指の、風景にも歷史にも富だ莊園てあるが上に、門前に横はる廣い遊園は、秋とは云へど落葉も無いほどに掃除が屆き、芝生も有れば林も有り、其の周圍は調馬場と爲て居るなど、凡そ戸外遊戯の仕組が一として備はらぬは無い。若し初て此土地に入る人が、停車場を出て此の遊園まて來れば仙境に入る想ひがするだらう。家の中は更に之よりも手が行屆て居る。數日來葉井田婦人が其の靜な綿密な注意を以て、引受けて仕た事だから少しも落度が無いと云て可い

兩女の着するは午後四時の筈てある。今は二時を打たばかりて猶だ餘ほど間は有るけれど、葉井田夫人は今日こそ當家の未來が定る日て、而も其の責任が重く自分の肩に懸ッて居ると思へば、心配に胸も騷ぎ、幾度と無く客間其他を見廻ッて居る、萬に一つも手落が有ッては成らぬのだ。斯る所へ、是も同じ思ひだと見る主人子爵が廻ッて來た『夫人よ、今日は先あ、日が長い樣な短い樣な、爾して嬉しい樣な心配な樣な何とも云ひ樣の無い妙な日てす』夫人は少し笑だけれど心配げな色は失せぬ『ハイ私しも其樣に思ひますが――』子爵『最ら何處にも失念は無いてせうね』

夫人『ハイ爾う思ひましたから、只今安心して、迎への者を停車場まて送りました』子爵『梅子と子の室は何うてす』夫人『大抵好い積てすけれど、一應貴方のお目て御覽下さい』打連立て二階に上ッた

爾して先づ梅子の室を檢めたが、遠く看降す花園には、今を盛りと菊が咲き、猶ほ廣い庭の此方彼方に秋の花が色を競ひ、錦を掛けた樣に見える。其の上に室の中の飾り附けも梅子の氣質に合つた樣に出來て居る。次に松子の室を見ると、之れはまた遠い古跡から雄大な景を控へ、領地の殆んど半面が見えて。是れは室内の備へ品も悉く一種の意味を以て居る。子爵は嘆賞して『イヤ貴女のお見立てには敬服の外は有りません。兩女を連れて來て思ひ〳〵に注文させても。斯うまて行屆きはせぬてせう。是れて貴女が。見ぬ前から二人を何れほど愛して居るかも分ります』夫人『未だ見ぬ先から愛すると云ふ事も有りませんが。太郎次郎を愛した心が其まゝ移ッたのてせうけれど。先日も瓜首さんが少しも愛憎の念を持ては可けぬと吳々云はれましたから私しは何事をも思はない樣に仕て居ます。ても思ふまいと思へば猶更ら思はれまして。てすが子爵。貴方は全く何方にも。少しの優劣が無いとお思ひてすか。誰の考へよりも貴方のお心が極りさへすれば』子爵『イヤ私しも此樣な決斷の無い男ては無いと思ひますのに。是ばかりは決し兼ます。日を

經れば經るに從ひ、益す兩女の直打が公平に分て來て。益す優劣が附きません。何方が私しの後を嗣くかと、自分で怪んでのみ居るのです』

眞に何方が後嗣に定るだらう。夫人も怪い樣に思ひつゝ。更に後の事をまで取越して『是で見ると仲々心配は絶えません。次には又た婿夫を選ぶと云ふ苦勞が出て來ます』子爵は驚いて『成るほど爾です。エヽ最う。寧そ兩方が許婚の夫を持て居て呉れゝば好い。爾すれば兩人の中の一人を定ると共に、婿夫までも定まるのに』夫人『イヤ。其樣な事は又後の話に致しませう。最う汽車の着く刻限ですから』『爾です』と子爵も答へ。頓て時計を出して見て『アヽ全く間が有りませんと』とて二人とも。下の座敷に降ッたが。幾ばくも經ぬうちに。四時の鐘は鳴り。引續いて門外に馬車の來る音が聞えた。夫人は又も今更の樣に胸を躍らせつつ玄關の所まで出迎へたが。早や馬車は横附に成て居る。爾して第一に其中から歩み出たのは。最と華美やかに着飾た草村夫人である。問ふ迄も無く容子で其人が分る

十九　將よりも馬を射よ

草村夫人に引續いて。馬車の中からドヤドヤと一群の女隊が降りた。此中には松子も梅子も居る

出迎へる葉井田夫人に取ては容易ならぬ大役である。其身の前に立つ草村夫人の華美な服粧を見る丈て早や驚いた。其身とても昔は多少交際場に立交ッた事も有る。其頃は五十にもなる老婦人が斯う華美には着飾なんだ。尤も草村夫人は仲々五十には見えぬ。殆ど四十にも見えぬ程である。其れにしても夫を失ッた人と有ッては猶更ら衣服の色合などをも控目にするが常で有ったのに。今では斯うも風儀が變ッたか知らん。爾すれば此身の爲す事が。若し草村夫人の目に可笑しく見え。笑はれはせぬだらうか。斯う思ふと何だか草村夫人が恐ろしい樣な氣もする

併し草村夫人は。恐れられぬ暇を與へぬ。直に打解けた口を開いて『貴女が葉井田夫人ですね。私しは草村夫人です』とて未だ此方が能くは出しもせぬ手を取て握ッた。爾して直に背後を顧て『オヽ松子。早くお出て』と呼立るは。何うしても梅子より我娘を先に立てねば成らぬと決心して居る樣にも見える。兎に角も其の仕艸が目紛ろしい程である

此狀で見ると此夫人は早や大凡の秘密を嗅知り。自分の娘を大變な競爭場へ立せた者と思て居るらしい。呼ぶ聲に應じて直に葉井田夫人の前へ品格の備ッた眞に女王の樣な令孃が現はて『私しは松子です』と名乘た。成るほど子爵が。又と無い女の樣に褒めたのも無理て無い。

親とは大違ひだ。と感心する目の先へ。直に又馳上ッて來た女は。松子より成るほど一つ歳下かと思はれるが。身躰の發達して居る狀は對して違ひが無い。松子に品が有れば此方には天然の優美がある。而も此方は顏に眞心が輝いて。腹の底まで透通る樣である。一目見た丈て可愛く思はずに居られぬのは此樣な質である。其れに仕草も言草も子供らしい所が見えて。飾り氣が無い。

『貴女が葉井田夫人でせう。子爵に伺ッて私しが思て居た通りです。ハイ私しは梅子』人懷しげに云ふ言葉で。久しく母の愛に餓て居る事も分る。夫人は今と云ふ今。子爵の言葉に思ひ當ッた何うして此二人に優劣を附ける事が出來る者か

我子最愛の草村夫人さへも梅子の美しさには感心せずには居られぬ。確に茲に松子に取て侮り難い敵が居るワへと見て取り。少し鼻先を挫いて置く積りか『貴女は侍婢をお連れ成さらぬ事ねえ』我が娘とは少し身分が違ふと云ふ樣に仄めかせたけれど梅子は言葉の底に潜んで居る巧な意味を察するほどは世慣れて居ぬ。唯だ『ハイ』と答へたが。葉井田夫人の方が何だか氣の毒な樣に感じ『ナニ侍婢は無くとも不自由の無い樣に子爵のお心附が屆いて居ます』と云ふた。草村夫人『オヽ爾でせうとも。私し共の松子は巴里から來た侍婢が附て居ます。其れでも子爵の御注意は梅子さんと同じほど難有くお受けします』云ふ事が何だか硬き立てある樣に聞える。殊に巴里

から來た侍婢と云へば非常な贅澤を示す者ては有るが。其實此家へ來るに付き。急に雇ひ入れたので贅澤のホヤ〳〵とも云ふ可きだ

『サア何うか此方へ先づ』と葉井田夫人は道を開き。爾して『一先づ其れ〳〵のお居室へ御案内致しませう』と言足した。草村夫人『ハイ隨分汽車て疲れも致しましたから。居間てお茶でも頂きまして其又上て緩緩お話なども致しませう』全く斯る待遇を受け慣れて居ると云ふ風で別に氣兼の容子を見せぬ。けれど其實。仲々落着きも出來ぬだらう。眼は此家の立派な有樣と。葉井田夫人と。松子と梅子とへ。油斷なく配て居るが。其中でも最も氣になるは。若しも梅子の手を葉井田夫人に引させるは不利益だと云ふ一事らしい。直に自ら梅子の傍に寄り『貴女とレイトンの停車場から一緒に成りなしたねえ。汽車の中でお近附に成りまして何の樣に好つたてせう』と云ひつゝ自分で其手を取り。葉井田夫人をば。松子と並ぶ外は無い樣に仕向けて了うた。梅子は唯だ之を信切の樣に感じ『貴女の樣な阿母樣を持つ松子さんがお羨しいと思ひます』信切は信切でも狼の樣な信切だとは知らぬ

斯くて大廊下を進み。二階の上り口まで來ると。藏戸家が何れほど貴い家かと云ふ事が分る。大理石の階段が殆ど國道の樣な廣さて。顏の寫るかと思はれるほど輝いて居る。之に對して巴里

の侍婢を一人や半屑連れて來たとて。何て贅澤に見える者か。草村夫人は幾等自分の背丈を引延し引延ししても、自分の身が小くなつて了ふ樣な感じがして。其れと共に。最う何うあつても此の立派な家から立去つては成らぬと云ふ樣な決心も湧て來る。

茲まて來て葉井田夫人は立留まり。梅子の後に隨て居る老女に向ひ『和女が二人の嬢樣をお居間へ御案内してお呉れ。私しが草村夫人の御案内をするから』とて夫人と梅子とを引分け。爾して自分も松子を離れた。夫人は思ふた『アヽ此競爭に勝を占るには。葉井田夫人を取込まねば可けぬ。何も彼も此夫人の心で決するのだ』大將を捕ふるには先づ馬を射よとの軍略である。爾う容易に射られるか何うだらう

二十　天にも登る心地

此樣な立派な家へ初て來て。少しも氣後れのせぬ人は少い。獨り松子のみが。宛も幼い時から斯る立流さの中に住慣れて居るかの樣に見えて。總ての擧動が落着て居た。梅子の方は。其れ程に行かなんだ。別に恐れたり。惡びれたりする容子は無かつたけれど。何と無く感嘆の言葉を發し度い樣に見えた

全躰云へば松子の母こそは。物慣れた夫人だから一番落着て居る筈だのに。其が出來ぬと云ふ者は。慾が手傳て居るからである。四方八方へ氣が忙しく騷ぐ爲である

頓て此母は。葉井田夫人に連れられ。自分の居室と定ッて居る二階の室に入た。見れば立派だの贅澤だのと云ふ塀を通り越して全く仙境の趣が有る。倚り掛る長椅子など。其の柔かなと雲にても乘て居るかと怪まれる。眞に天にも登る心地と云ふものだ。益す此夫人の心には此家を立去ては成らぬとの決心が固くなッた。何も葉井田夫人が此家に居るならば此身とても此家に居られぬ筈は無い。葉井田夫人は子爵の腹異りの姉君であるにもせよ。一旦他家へ緣附たのだ。緣附て夫に死なれた爲め此家へ引取られたて有らう。此身とても矢張り夫に死分れたのだ。自分の家が有ればこそ此家へ引取られずに居る者の。若し自分の家が無くば。縱し葉井田夫人ほど今の子爵に血筋が近く無いにしても。隨分此家へ轉がり込む口實が無いて無い。葉井田夫人は宛も此家の女主人か奥方の樣な權威を振て居るては無いか。若し此身ならば。夫人よりも更に能く此家を治め。更に能く子爵の爲になる樣に。萬事を切廻して行く腕がある。何も自分の慾ばかりて此家に踏留らうと云ふては無い。此家の爲を思ふて云ふのだ。自分の先祖の出た家の爲を圖るのに誰が無理だと云ふ者かなどゝ。柄の無い所へ柄をすげて考へ初たが。丁度此の所へ。茶と菓子とが

來た。夫人は雲の樣なフワ〳〵した長椅子に身を沈ませたまゝ茶を受取ッて一口飲んだ。全く其の心持は。安堵とも滿足とも。言葉には盡さぬ。譬へば波風荒い大海を細い艪一挺で漕ぎ渡て居た小舟が。波の靜な港へ入た樣な心持だらう。而も五十年ほど大海で難儀した末だから其の心持が又一入だ。見る物として安心の種と爲らぬは無い。壁の額から姿鏡から。床の敷物から。總ての道具。總ての備附まで。自分の思ふたよりも行屆いて居る。何故早く此港へ着く事が出來なんだらうと。殆ど怪く思ふに連れ。心が坦然と落着て眠い樣に成て來た

葉井田夫人は夫人の滿足した狀を見て。先づ此の方だけは自分の役目が濟だと安心し。次に梅子の室に行て見た。梅子は疲れた容子も無く早や窓に出て。外の花園を眺めて居る。爾して葉井田夫人を見るよりも『何うも美しい所ですねえ。子爵は私しが花ばかり愛する事を御存じゆゑ。其れで此室を與へて下さつたのでせう。本統に御信切です』と云ひ。更に『何と云てお禮を申せば好いのでせう』聊か當惑げに問ふ狀には。心底からの有難さが浮き出て居る。夫人は思ふた『此娘は第一の感じが思てある。天性の孝心が能く分る。此れてこそ子爵の養女に成られるのだ子、爵に取ては誠の子と異らぬ程に成るだらう』と。全く此時の心持から云へば此家の相續人は梅子の外に無い。次に夫人は松子の室に行た。之も梅子と略ぼ同じ樣な狀で。窓から遙かに河に向

ひ。河の彼方の山の上なる城跡などを眺めて居る。爾して夫人の顏を見るが否や叫んだ『何うも立派な莊園ですねえ。嘸ぞ子爵は之をお愛し成さるでせう。此樣なお家柄ですもの。子爵が藏戸家と云ふ名と譽とをお重じ成るさは其筈です』何よりも先づ家柄を說き。名譽の重きを感ずるとは。全く其の天性に。高貴な氣質の備ッて居るとが分る。眞に藏戸家の名譽を其の纖手に任されても。安全に守り行くとの出來るは此の女だらう。斯う無くては此舊家の後は嗣がれぬと。夫人は又感心に堪へぬ氣がした

廿一　鑑定の材料

葉井田夫人は松子の室を出て後に。獨り廊下へ立たまゝ考へた。眞に松子と梅子と何方が優ッて居るだらうと

何う思ひ比べても優劣は無い。双方とも無傷の玉だ。併し梅子の顏には何だか特別に親しまれる所が有る。其れは何故だらう。夫人は又も考へたが。之は分ッた。確に梅子は此家の息子であッた太郎に似て居るのだ。勿論男女の區別は有るが。太郎の顏の雄々しい所が梅子ては愛らしい所と爲て居る。此れ丈が區別てあッて。同じ血筋から出た事は爭はれぬと。夫

斯う思ひ掛て直に又自分を制した『イヤ〳〵顔や形で判断しては成らぬ。其れに愛憎の心を少しても起しては大變だと。兼て瓜首からも誡められて居る。此樣な事を思ふうちに。若し愛憎とか依怙贔屓とか云ふ樣な念が出ては大變だから。最う何にも思はぬ事にして一切の判断を子爵と瓜首とに任せて置かう』と流石正直な天性だけに確と我が心を取留めた。併し何時までも此儘で。天然の愛の心が何方かの一方へ傾いて溢れ初めると云ふ樣な事が。無くて濟むだらうか。何だか覺束ない樣な氣が。夫人自らの心の底にさへ徘徊して居る

斯くて二階を下り。客室へ入ッて見ると早や晩餐に招いた客が揃ッて居る。其れは瓜首の外に二人だ。多少都の交際にも慣れた虎池大佐と云ふ老士官と。丸龜男爵と云ふ近所の貴族で。二人とも當家と極親密にして居る間柄である。併し肝腎の子爵が見えぬ。之は實の所。今日を大事の日と思ひて餘り心が騷ぐので。先刻裏庭へ出て。今もまだ林の中の靜な所で獨り考へ込て居らつしやるのだ。心の落着た頃に。外から歸た樣な振で。現はれて出る積りて居るとが葉井田夫人には能く分つて居る

先づ夫人は三人へ挨拶した。すると瓜首は。少聲で夫人に向ひ『何の樣なてすか』と問ふた。夫人『子爵の仰有つた通です。迚も私しには優劣が分りませんから。貴方と云ふ專門家の鑑定にお

任申すより外は』瓜首は鼻の先で笑つた。愈よ自分の技倆の現し所だと滿足したのだ。兎角する中に二階から。お召替も濟て草村夫人が降りて來た。無論立派に着飾つて居る。之を葉井田夫人が一同へ引合せると。次に瓜首の前に立たは春川梅子て有る。瓜首は直に思ふた。果せる哉。此の己には唯だ一目に鑑定が出來る。是れと云ふのも卅年來鑑定を職業として居るお蔭である。最う何にも迷ふ所は無い。これだ。これだ。此梅子には。子爵家の相續人として少も不似合な所が無い。之に優る適當の候補者が何所の世界に在る者かと殆ど感心に堪へぬ面持て梅子の顔を眺めて居ると直に其間を遮ッて。又瓜首の前へ連出された女がある『之れが瓜首さん草村松子さんです』と葉井田夫人が引合せた。瓜首は唯だ『へエ』と驚く樣な聲を發した儘て。二の語が出ぬ。此時の彼れの景狀は憐む可きてある。彼れは手巾を取出して禿た頭から額の汗を拭いて。宛も汗を拭取た下から智慧を湧出させる工夫の樣てある『イヤ上には上がある者だ』と。口には出さぬが唯だ呆れて更に梅子の顔と見比べて見ると。彼れ。此れの上に立んと難く。此れも。彼れの上に立んと難しと云ふ程てある。最早や葉井田夫人が何方に重きを措て居るか其れを見て取る外は無いと思て更に夫人の顔を見ると。夫人は靜に双方を見て居るのみて輕重の區別は見えぬ。彼れは早や百計盡きたと云ふ見えて。挨拶の濟むが否や獨り窓の所へ退き。首を右左に傾けて振ッた。

自分の頭を德利の樣に思て居るのか。智慧を振出す積らしい

漸くに智慧は出た。今に必ず主人子爵が現れるだらうから。其目附に注意すれば。多少參考の材料を得る事が出來るだらう。何うしても。困難な鑑定は先づ充分の材料を集めて係らねば可けぬと云ふのが彼れの日頃の主義である其の中に子爵は入つて來た。第一に草村夫人に挨拶し。次に大佐と男爵とに挨拶し。其の次に梅子松子の居る方へ向ふと。梅子が懷しさに堪へぬ狀で。手を擴げて馳寄た。アヽ確に父と娘との樣な親密な心が既に子爵と梅子との間には出來て居るのだと瓜首は思ふた。直に子爵は梅子を抱き其の前額に接吻したが。其時の子爵の目には憐みの涙が輝いた。是れで最う鑑定する必要は無い。子爵の心が全く梅子に固て居るのだから此方が縱しや反對に鑑定したとて無益だと。漸く責任の濟だ樣に瓜首が安心する暇も無く。直に又松子の方が子爵に抱かれた。此時の子爵の顏は。曾て瓜首が見た事も無いほど。嬉しげに晴れ渡ッた。眞に松子を自分の子と思はねば斯うまて喜ぶ筈は無い。アヽ鑑定の責任は依然として其身に在るので。此樣な難題が又と有らうかと。彼れは再び德利の樣に首を振り。再び智慧の樣な者を振出した『爾うだ客間では分らぬ。食堂へ行て緩々と話する中には。何所かで分る』更に參考の材料を食堂で集る氣になつた。其うちに食堂は開いた

廿二　何の樣な優劣が

梅子。松子。草村夫人。葉井田夫人。瓜首法務士。虎池大佐。丸龜男爵の七人。主人藏戸子爵と共に食堂には入た。別に異ッた事も無く。唯だ通例の晩餐では有ッたけれど食物も。飲物も。一切の器具と共に善盡し美盡して居た事は無論である

客の中で最も忙しかッたのは。草村夫人である。此夫人は美しい器物を見て窃に價を積て見る事が好きて。其上に美しい飲食物をば。自分の財布を痛めずに味ふ事が一層好きてある。目にも口にも暇が無い。爾して其目は。器物を見分ると同時に。客の中で誰が一番此家に對して勢力が有るかをも見分け。口は飲食と同時に客一同へ其れ其れお世辭を加減して行かねば成らぬ。先づ八人藝の有樣て有たが。流石は事に慣れた身とて。是だけの褒を悉く首尾能く勤めて。最後に。何うも瓜首と云ふ奴が最も主人子爵に勢力が有るらしいと見て取た

尤も。是は無理も無い。瓜首の擧動が。一種違て居る。彼れは何ても此晩餐で。梅子松子の優劣を鑑定する參考の材料を得ねば成らぬと決心して居るのだから。飲食の事は忘れる迄に耳と目とに力を集めて居るけれど悲しい哉其の材料が得られぬ。梅子の方は客一同の話に。一々自然の

同情が其顔に現れる樣に見えるけれど。何分初對面の人が多いゆゑ。自分からは話をせぬ。唯が一度。並て居る葉井田夫人に何事をか問はれて小聲で返事したのみてある。松子の方は客の話に少しも顔の樣子を變ぬけれど是も唯一度。並んて居る子爵に何事をか答へた丈けだ。けれど。兩女の陰然たる潛勢力は爭はれぬ。此卓子を圍て居る一同の談話が、總て此兩女を喜ばせ度いとか。面白がらせ度いとか云ふ心から出て居るのだ。虎池大佐の。昔し印度に在勤中の軍隊の滑稽話は多分梅子を笑はせ度い心が半分は交ッて居るだらう。丸龜男爵の文學上の批評に渉ッた快辯は松子の好みに投じ度いとの意が過半を占て居るらしい。双方の話を横合かち一々引受け梅子にも松子にも代ッて面白がりもし笑もしたのは草村夫人である。縱し其の面白がる所にも笑ふ所にも。空々しい容子を見せなんだは流石に熟練である

其中に晩餐は。淡さりと終ッた。直に葉井田夫人の注意て。女連だけ先づ談話室へ退いた。後に殘ッた男客三人は一齊に主人子爵の容子を見た。子爵は靜に『春川梅子嬢と草村松子嬢との間に何の樣な優劣が有りませうかと問ふた』大佐は首を傾げた。瓜首は德利の樣に頭を振ッた。男爵は考へつゝ『何方ても一人を見れば。類の無いほど優ッて居ます』子爵『成るほど面白いお返辭だ。てすが今の樣に二人を並べて見ると』男爵『一年見たとて優劣は附ません』瓜首は呻いたア、

到底參考の材料は無い

何うせ優劣が無いのだから。少しても誰かの意見が傾いた方を選べば好いと。彼れは當惑の餘りに。此樣にさへ思ふて居ると。頓て大佐が『梅子嬢の方は。名乘ずとも當家の血筋と云ふ事が分ります。亡なられた太郎君の顔に餘ほど能く似て居ます』瓜首は思ふた『アヽ梅子に仕やう』子爵は直に『私しも爾思ひますが。其代り松子の方は氣質が。確に當家の血筋を受けて居るのです』男爵は贊成らしく『成るほど。一方は容貌が血筋を現はし。一方は氣質が血筋を現して居るのですね。愈よ優劣は有りません』瓜首は又呻いた『是では到底判斷の仕樣が無い』

大佐は語を繼て『何うてす子爵。是から婦人一同と美術室へ行かうては有りませんか。那の室には確か太郎君と次郎君との肖像が額に成て掛つて居たと思ひますが』子爵は死だ二人の息子の名を聞き。少し悄然としたけれど。直に打解けて『ハイ二人の肖像が懸ッて居ます。久しく私しは行て見ませんけれど』大佐『ては愈よ行きませう。行て梅子嬢の顔と太郎君の顔とを見較べやうては有りませんか』瓜首は食堂て得られなんだ材料が。若し美術室へ行けば得られやうかと思ひ贊成の意を表して『成るほど。行きませう。行きませう』子爵は之に應じて立上り。先づ婦人達の居る談話室へ一同を從へて入り行いた

廿三　寶の山とは茲

子爵を初め一同が婦人達の居る談話室へ行て見ると、茲には老たると若きと二組に分れて各々話に實が入て居る

老たる方は草村夫人葉井田夫人である。若き方は梅子と松子とである。草村夫人は宛も敵國に入た老探偵が敵軍の手配を窺ふ樣に、遠く又近く、緊めつ又緩めつ。葉井田夫人を問廻し。大方は地利要害を呑込て了ッたらしい。其證據には、子爵外三人の男客を見るが否や、無論第一に子爵へ笑顔を振掛けて置て。次に直ぐ椅子を取ッて瓜首に與へ。『サア何うか私しの傍へ』と招いた。確に瓜首の勢力を認めて居るのだ。選に洩れた大佐と男爵とは一樣に怪んで一樣に呟いた

『瓜首が乃公よりも欵るとは珍らしい事も有るものだ』と

梅子と松子の方は。之と違て。互に何の巧も無い。唯だ若い同士の。無上に心が合ふと見え。百年も經た友達てゝも有るかの樣に轉り合て笑つて居る。其れを何の事柄かと問けば。梅子が自分の父の。繪の事にのみ夢中になつて時々に仕出來す間違の事を話し。松子が又其れに對して。物の本で讀だ似寄た逸話を持出して競べ合をして居るのである。眞に一つ胞の姉妹とても斯うま

て睦まじくは行かぬ子爵は此狀を見て嬉しさに堪へぬ如く笑んだ

大佐と男爵とは。第二位に落された悔しさても有まいが。老た組を尻目に見捨てゝ此の若い組の所へ來た。爾して大佐は梅子に。男爵は松子に向ひ。一齊に『サア美術室へ行きませう』と促した。出し抜の催促だけれど。松子は直に立た。梅子の方は。美術を好む事は松子よりも優て居る程だらうけれど。未だ事慣れぬだけ。問ふ樣な目で彼方の葉井田夫人の顏を眺めた。夫人は梅子松子に充分の同情を以て。先程から油斷無く此方の容子にも目を注いで居たのだから。猶豫も有らせずに立て來て『美術室へ何の爲にお出です』と問ふた。男爵『實は子。大佐のお說で。此兩個の令孃のうち。一方が美術室に懸て居る或る肖像に似て居ると云はれますから、見較べやうと云ふ動議が食堂で成立て來たのです。夫人は早や合點した『アゝ誰が誰に似て居るか當てゝ見ませうか』大佐は遽てゝ制めた『イヤお分りなら仰有らずに居て下さい。一同で評定するのが面いては有りませんか』松子の母草村夫人は。何の場合たりとも松子を梅子に劣らせては成らぬ決心して居るから。之れは自分が附て行かねば成らぬと思ひ。早や瓜首の腕に縋り『サア瓜首士。私し共をお連れ下さい』と立て來た。瓜首は決して博士て無い。博士て無い事は無論草村人が知て居る。けれど間違へた風で博士と云たとて決して立腹せぬ事も知て居るのだ。茲等が丿

を捕虜にする術だと見え果して瓜首は自分の身を二三寸ほど引延した。何だか爪立て歩んで居るらしい

無論子爵も茲へ來た。スルと直に草村夫人が『サア松子。伯父さんに手を取てお戴き成さい』とて松子を子爵に結び附けた。全體ならば子爵の事を伯爵とも侯爵とも云ひ度い所だらうが。眞逆に爾は云へぬから伯父樣とは能くも云ふた。此一言て離る可からざる血續を外の人へは承知させ。子爵へは念を推すのだ。斯う云ふと何だか松子のみが姪(其れも三代隔てた)て有て。梅子は姪で無いかの樣にも聞える。併し捨る神に助ける神とやら。梅子の手は直に葉井田夫人が取た。大佐と男爵とは又お茶引た、顔見合せて苦笑しつゝ隨て行た

頓て達した美術室の立派な事は。云ふ迄も無い。草村夫人は。眞に寶の山とは茲だと思たどう。最う何うしても空しく此家から立去る事は出來ぬと。決心の上に決心を積重ねたらしい。斯くて一同。掛列ねた畫を見廻ッて居ると。先に立て居た草村夫人は。一個の肖像畫を認め。暫く眺めた末『ア、分りましたよ。此額の肖像に梅子さんが似て居ると云ふのてせう』夫人の後に居た子爵は。落ついた聲て『ア、貴女まて爾う仰有るからは全く梅子の顔が似て居るに極りました私しは初て梅子を見た時から爾思ましたが。唯今も食堂で虎池大佐が主張され。確に梅子が太郎

に似て居ると云ひますので』夫人は初て此肖像を太郎と知り。我が言葉の早まッたを悔んだ。之が愈よ似て居るとすれば。太郎を愛した子爵の心が自然に梅子に移る恐れがある。既に子爵は松子の手を放し。葉井田夫人から梅子を受取り。其顔と肖像とを見較べ初めた。夫人は殆ど悔しい程に思ふけれど仕方が無い。更に見直す振をして『ナニ能く見れば爾ほどでも有りません。切には似て居るかと思ひましたが』と云ひ消しに掛ッた。此のとき母の背後から眺めて居た松子が『イイエ阿母さん。見れば見るほど能く似て居るては有りませんか。口許などは其まゝですよ』と反對したは其の心の清さも分る。何うして此樣な母に此樣な子が出來たどらう。母夫人は自分の陣から敵の出た樣に慌き。益す狼狽して『太郎さんには似て居ても。次郎樣には似て居ますまい。次郎樣の肖像は何所に在ります。何所に在ります』とて見廻した。若しや次郎の方には。自分の。娘松子が似て居るか知らんと思ふのだらうが。御苦勞な次第てはある

廿四　結局は投票

似て居ると云はれて。當人の梅子は却て當惑げ。イヤ寧ろ極り惡げてある。けれど現在子爵に提へられ。自分の顔と肖像の太郎の顔とを見比べられて居るのだから逃る譯にも行かぬ

子爵は倩々と見比べて『アヽ能く似て居る』と呟いて涙を滴した。梅子は子爵の顔を見上げて。傷しさに堪へぬ思がしたと見え『若し代られる者なら。私しが海へ沈んで上げ度かッたと思ひます』と小い聲て語ッた。常には是ほど眞面目な尤もらしい事を云はぬ口だのに。斯くまて云ふは全く誠心が溢れたのだ。子爵は抱緊やうとする樣に引寄せ『オヽ能く云ふて呉れた』とて再び涙を催したが。客の前て泣くのは不吉だと氣が附たか。淋しげに笑顔と爲て『イヤ梅子。和女が居て呉れるからは。乃公は最う死だ息子の事を思はぬ』之も全く誠心である。眞に子爵が。何れほど梅子を愛して居るかは之て分る。今が今まて何か參考の材料はと。其れのみに氣を附けて居た瓜首俄博士は。此狀を見て。重荷を卸した樣に感じた『アヽ。是て分ッた。當家の相續人は。何うしても梅子てある』と呟き。密に葉井田夫人の顔を見ると夫人も同じ心で俄博士の顔を見た。以心傳心とは是れてある。双方ともに安心の心が通じ合た

斯る間。『次郎樣』の額はとて見廻して居た草村夫人は。何うも我娘松子に似た肖像の見附からぬに。業を煮し又子爵の傍に歸り無理に。梅子を子爵から離れる樣に仕向けつヽ子爵に云ふた『私しの娘松子とても出來る事なら。太郎樣次郎樣に代り海の底に消えるのを。梅子さんに劣らぬほど望みますよ。ねえ松子』とて七分は子爵の顔を見つヽ三分は松子の方へ振向たが。生憎松子は

居ぬ。早や梅子と手を引合て他の額面を眺めて居る。爾して其背後には不運續きの大佐と男爵とが無論隨て居る

併し子爵は夫人の此言葉にも痛く喜んて『草村夫人よ。私しは親類の有難い事を今夜浸々と思ひ知りました。双方ともに斯まて私しに同情を表して呉れますとは』夫人『此家から出たのですもの。若し此家の爲を思はずば。我家を思はぬも同じ事です』早や此家へ。我家と云ふ言葉を結び附けに掛つて居る。唯だ其言ひ方が旨い爲に誰の耳にも障らぬけれど所謂冥々の中に根を卸す策は是てある。子爵は心の底から『有難う御座います』と答へつヽ。梅子松子は何所に居ると懷しむ樣に見廻したが。兩女は次郎の繪姿の前に立ッて居る

此れが次郎の肖像だとは大佐と男爵とから敎へられたのだ。太郎の肖像と同じ畫工の筆て。兩人が國を出る時に。之れが遺身に成ふとは知ずに畫かせて置たのだが。双方ともに傑作だ。松子『梅子さん何方が能く出來て居るのでせう。畫の鑑定は貴女のお言葉に從ふのが――』梅子は暫し見て聊か顔を傍向け『何だか此方の眼は私しの顔へ。附て動くかと思はれます。何所から見ても私しは見詰られて居る樣な氣が致します』松子は何げも無く『能く出來た繪姿は八方を睨むとか云ふては有りませんか』と云ひつヽ梅子の顔を見ると。眞に活た人に逢て耻しく感ずる樣に聊か

紅を潮して居る爾して頓て其紅が青く變ッた。之は恐しさを感ずるのか知らん『ア、梅子さん。貴女は死だ方に似て居る樣に云はれたから。神經に障ッたのでせう』全く爾らしい。梅子は『爾かも知れません』と云て頷垂れた。其狀は全く子供の樣に可愛く見える。松子は何故か自分の民雄の事を思ひ出した。爾して梅子さんにも民雄さんの樣な人が有るだらうかと怪んだ

けれど其れは少しの間で。直に子爵初め他の人が茲へ來たから。其の怪しみは紛れて了ふた。

斯くて又一同は暫く次郎の肖像の噂に話を集めたが。獨り何だか滿足し得ぬのは草村夫人である。夫人は何うしても此美術室で。自分の娘が梅子に輸を取たと感じた。丁度競馬に負けた持主の不機嫌と同じ行き方なんだ。此上に又も梅子の手を子爵に取られては大變だと思ひ。『さあ梅子さん。松子と許り仲好くせずと。私しとも親みませう』と云ひ宛も可愛さに堪へぬ如く其手を取たは實に旨い果して謀事は圖に當り。松子の手を子爵が取た。愈よ運の盡と思た大佐と男爵は。切て葉井田夫人が二人の中の何方へ來るだらうと怪んで居ると。二人の外の瓜首へ行て了ッた。男爵は小聲で大佐に向ひ『明日の天氣は何うてせう』暗に瓜首の幸運を冷すのだらう。葉井田夫人は靜だけれど何から何まで氣が附て居る。腹の中で可笑さを耐へつゝ。横合から『秋の天氣ですから分りますまい』と最と眞面目に冷かし返した

間も無く此室から出るに當り。草村夫人は。先づ松子を子爵の手に縋らせたのが安心だけれど。未だ不滿の心が消えぬから。何うしても松子の長所をズッと目立せねば成らぬと思ひ。子爵と葉井田夫人との双方へ掛けて『是からお座敷へ行き、音樂を初ませう。何だか皆樣が打萎れた樣ですから』子爵も夫人も返辭せぬ。此方の夫人は更に『音樂の事は。松子が聊か心得て居ますから』松子と聞て一同は贊成した。斯て客室に歸ると間も無く。夫人自ら松子の最も得意とする中で又最も子爵の意に適ふだらうと思ふ曲を選び。餘り進みはせぬ松子を琴臺に上せたが。眞に迦陵頻迦の聲とは松子の技藝である。子爵は既に倫敦で聽て知ては居るけれど。聽く度に前より優る樣に思はれる。客一同も是ほどゝは思はなんだ容子で。悉く感に堪へ。一曲が終れば又一曲と所望して終に三曲まで重ねさせた

若しも子爵の心が美術室で梅子に傾いて居たとすれば此室では確かに松子に傾いた松子が琴臺から卸りて來るのを子爵自ら立迎へ。其の額に接吻して我傍に坐らせたのでも分ッて居る。唯だ氣の毒なのは瓜首俄博士だ。彼れは折角美術室で得た參考の好材料を此室で掻消された樣な氣がして。今は頭を德利の樣に振る勇氣も無い。振たとて出る智慧も盡きたゞらう。其うちに夜も深けて一同退散する事と爲ッた。瓜首は廊下て葉井田夫人を控へ『貴女のお考へは何方です』夫人

『少しも分りません。全く子爵が双方を一様に寵愛して居る樣ですもの。何うか約束通り貴方の御鑑定に』瓜首『イヤ法律の鑑定とは全く違ふ事が分りました。折角の材料が一刻々々無効に成て行きますもの。結局は何うも投票で定める外は有りますまい。貴女と子爵と私しと三人で』とて責任を元の通りの分擔に逆戻りさせた。

之れが最初の一夜の狀である。次の日からは何うなるだらう

廿五　兩女の心中には

梅子松子は此夜何の樣に眠たゞらう。一日の疲れも休まつたと見え、翌朝は二人とも新に咲た朝顏の花の樣に。鮮かに活々して起出た

玆に一人其樣に熟くは眠り得なんだ人がある。其れは草村夫人だ。夫人は今まで寢た事も無い程の柔かな贅澤な床の上に。疲れた身を横へたのだから直に眠らねば成らぬのに眠られぬ。噂に優て此家の立派な事から。底の知れぬほど富有な狀などを思つて見ると。慾と羨ましさとが胸一ぱいに滿ちて。眠りの這入て來る隙間が無い。此の莫大な身代。廣漠な領地。計算の出來ぬ富が誰の手に渡るだらう。世間から色々と問集め聞定た事柄を照し合せて見ると。何も自分の乘て推

量した通り。梅子と松子と兩方が養女に見立られて居るらしい。養女と云ても通例の養女とは違ふ。本統の相續人なんだ。子爵と云ふ位を嗣で此家の主人と成るのだ。藏戸家總體を我物とするのだ。何うも廣い此英國に。梅子の春川家と自分の草村家より外に。此の藏戸家の親類は無い樣だ。若し有れば自分達と同じ樣に招かれて來て居る筈だのに。來ては居らぬ。のみならず食堂でも談話室でも客室でゝも。少しも他の親類の噂は出なんだ。無いからこそ出なんだのだ。愈よ以て我が推量は當つて居る。之からして松子と梅子とが競爭的の試驗を受けるのだ。早く爾と知たなら競馬師が馬に仕込て置く樣に充分松子へ競爭の心掛を言聞せ。篤と稽古させて置けば好ッたのに。イヤ爾て無い松子は仲々賢い娘だから。教へては無くとも元來の教育も有り必ず立派に及第するだらう。唯心配なのは。自分と違ひ慾の深く無い所が落度だけれど。其代り又梅子の方とても別に競爭の稽古をして來たのでは無いだらう。併し其れにしては侮り難い敵である。何所か松子より劣た所は無からうかと鵜の目鷹の目で見は見たけれど。憎らしいほど能く出來て居る。何だつて田舍へ那の樣な好い女の子が出來ただらう。何も那れほど美しいのには及ばぬのに。併し今夜の音樂では幸ひに松子が勝つた。此後も引續いて松子が勝つだらうか。勝てば好いが。イヤ勝だらう。若し勝たぬなら梅子めを。高い所から突落してゞも。イヤ眞逆に其樣な事も出來ぬ。

ナニも梅子の勝つと極らぬ先に。早まつて其様な事を仕ては却て松子の害になるなど其れから其れと考へ廻し。何だか松子が勝ち相だと思ては早や張裂ける程に胸を躍らせ。又梅子に勝たれ相だと思つては手の掌へ爪の痕の食入るほど拳を握り。幾か短い一夜の間に幾度か天に上り幾度か地獄へ落る思ひをして悶き明した

其は扨置き。早く起出た梅子の方は。直に下ツて庭に出て。咲盛る秋草の花壇の中を彼方此方と歩み。花を久しき友達の様に思ひ。仆れたるは起し。壓れて隠れたるは開きて出しなど。庭師には無い信切を以て餘念も無く傷はツて居たが。頓て人の氣合がする様に思ひ。身を延して振返ると。彼方なる紅葉林の中に。見え隠れする姿は松子てある。片手に美しく綴ぢた小い本を開き持ち。讀みては歩み。歩みては又讀み。爽かな朝の景色を愛てつゝ靜に逍遙して居る。梅子は其れと見るが否や懐しう走ッて行き『此なにゝくから最う本を』愛らしい目を開いて問ふた。松子は笑みて『ハイ貴女が未だお寢みでせうと思ひ。お友達の代りに斯して歌集を持て來たのです』梅子『歌集の歌より。花や景色に本統の天然の歌が現れて居ると。私しの父なら直に云ひますよ』と云ひ。昨夜互に笑ひ興じた事柄を思ひ出して打ち笑へば松子も笑ひ『オホヽヽ』『オホヽヽ』と小川に走る水の音の様な清い聲が双方の口より一緒に出た。此が花より景色より。又と得難い天

然の歌と云ふ者だらう

兩女は何所とも指さず徒だ歩みつゝ。松子『貴女と私しとを。子爵が那の様に愛して下さッて。私しは有難いと思ひますよ』梅子『私しなどは。子爵が愛して下さらねば。生涯此様な立派な庭を歩む事は出來なんだかも知れません』唯だ是れ丈けの言葉でも自から區別がある。松子は考へた上て物を云ひ。梅子は氣の向く儘に物を云ふ。一は天然に綿密で。一は天然に打解けて居る。若し。梅子が深く愛せらるゝ様に生れて居るなら。松子は深く敬はれる様に生れて居る。梅子が容貌に於て藏戸家の美しさを現して居る如く松子は氣質に於て藏戸家の秀た所を傳へて居ると子爵が云ふたのは能く當つて居る

良あつて梅子『でも殘念ては有りませんか貴女も私しも男に生れて居ないのが。若し男なら子爵が何れほどかお喜びてせう』云ふ事が何うしても婀娜ない。松子は考へて『イヽエ。男であつたら是ほど愛して下さらぬかも知れません。息子に與へる筈の場所を貴女と私しとが塞ぐ様に思はれませう。女なればこそ其様な疑ひも有りませんから』女の身を以て藏戸家の相續人に成る事が出來やうとは兩女とも思ひも寄らぬ所であるけれど兩女の心中には。何だか口に出して云ふ事の出來ぬ殆ど名の附け様も無い一種の思ひが浮んて居ると見え。互に半ば耻しげに顔と顔とを見

合して。爾して又ニッと笑んだ

廿六　兩方を一樣に○

斯る所へ子爵が來た。顏見合せて居た梅子松子は。直に子爵の左右の手に縋ッた。眞に兩女とも子爵を父の樣に思ひ。此上も無く昵んで居る

子爵は兩女の中の好い狀を何よりも喜んだ。爾して後ほど朝餐の終ッた後で。屋敷の中の室々から古い謂れの有る場所などを隈無く見せて遣ると約束した

斯て朝餐の濟だ時。子爵は卓子を離れつゝ草村。葉井田の兩夫人に向ひ。是から梅子松子を連れて邸內を見廻るのだと告た。其れは。若しも草村夫人が一緒に行くのを望むかと思ッた爲である。所が夫人は之を望まぬ『私しは迚も若い娘達と共に走り廻る事は出來ませんから。葉井田夫人とお話しを仕て待て居ませう』と答へた。之は一二。共に走り廻る事が出來ぬ譯では無い。必要とあれば鯱鉾立も仕兼ねけれど。家に殘て葉井田夫人の機嫌を取り度いのだ。何でも。昨夜瓜首を捕虜にした樣に。此夫人をも捕虜にして置かねば不爲だと見拔いて居る。のみならず此夫人と談話する中には益す深く事の秘密が分て來るだらうと信じて居る。仲々一擧手一投足にも卒が

無い

達て子爵は勸めもせず。直に梅子松子を連れて玆を出て。先づ家の內の構造から見せ初たが。兩女の最も深く感じたのは。太郎次郎の用ひて居た室々に。孰れも机から本から筆墨の類まで。此兄弟が居た時の通りに置並べて有る狀である。勿論日々掃除はするけれど。其後て又元の通りに置直すと見える。或室の卓子には次郎が脫捨たと云ふ手袋が猶だ其まゝ乘て居る。或室の壁には太郎の立掛た杖が依然として其位置を保ッて居る。是等の狀を見て梅子の方は悲さを催したか無言で涙を浮べ。松子の方は之も悲しげては有るけれど二言三言。品物などに批評を加へた。情に深いのと智に富だとの相違は確にある

其れから庭內の古跡などを見廻るに及んでも兩女の相違は多少現はれた。勿論幾千年連綿と續て來た舊家の事ゆゑ。到る所古跡ならぬは莫しとも云ふ可き程て。石にも草木にも皆其れ〴〵の歷史がある。梅子の方は美の方に心が傾き。動もすれば。畵の事に言葉が及ぶ。松子の方は風雅と云ふ趣味も有て何うかすると文學の事をまで引合に出す。併し兩女とも少しも勉て居る容子は無く唯だ感ずる儘を口に出すのだ。子爵は常に兩女の言葉を天秤に掛けて居る。子としては梅子が欲しい。後取としては松子の方が好いか知らんと。此樣にも思ふた。詰る所兩方を一樣に欲

いので。梅子を留置て松子を歸すのかと思へば腹の中が殘念さに煮歸る樣な心地がし。梅子の方を歸すのかと思へば直に涙が湧て出る。試驗すればする丈け六かしくなッて。少しも事情が進歩せぬ。是れは何うしても葉井田夫人と瓜首に任せ。二人の決斷に未練無く從ふ外は無いと。兼て思ひ定めて居る事を又重ねて思ひ定めた

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

日を經るに從ッて兩女とも益す此家に慣れ。宛も自分の家の樣に思ひ〳〵に好た室。好た場所に行て遊びなどする程に成たが。松子の方は多く林や河などの壯大な景色を見廻り。梅子は花の、有る所か爾無くば美術室へ入るが多い。多分は美術室にある繪に對して父の事をても思ふて居るのか。未だ此家に飽た樣には見えぬけれど松子と違ひ唯一人り逗留に來て居る事ゆゑ自然自分の家を思出すのかと。憐みの深い葉井田夫人が聊か可哀相に思ひ。或時。其後から美術室へ行て見ると。太郎次郎の肖像の枠に。艸花を挿してある。爾して梅子は次郎の肖像の前に坐し。餘念も無く眺て居る『オヤ梅子さん。此の花は貴女が挿しましたの』と夫人は問ふた。梅子は極て眞面目に『ハイ。此のお顏が物をても言度さうに見えますから。私しは活て居る方の樣な氣がして。何んだかお淋しからうと思ひまして』夫人は優しい心根に深く感じ『若し此子が活て居て貴女の

其の信切な言葉を聞けば。直にお嫁に貰ッて呉れと云ひませう』梅子は少し顏を紅め『信切と云ふのでは無てせう——』夫人『では何です』梅子『子爵が此方々を那れほどお愛し成さッて。今ても太郎とか次郎とか仰有れば直に涙をお流し成さる程ですもの。私しとても此方々の事を思はずには居られませんワ。私しは斯するのが子爵へのお勤だと思ひます』夫人は可愛さに堪へぬ樣に抱しめて接吻を與へた

暫して幾時の後子爵に逢て此事を語た。子爵は嬉しげに『オ、梅子の心は其れほども美しいのか』と云て泣た。若し此時に投票したなら。勿論梅子が當選したのだらう

廿七　梅子に極ッた

太郎次郎の肖像に花を供へた梅子の心榮には。全く子爵も涙を催し。葉井田夫人の退いた後で。獨り感心に堪へぬ如く呟いた『ア、兎に角も梅子は情が深い。那れを養女にすれば孝行を盡して呉れるに極て居る。此方も追々取る年ては有るし。孝行な子を得るが第一だ。幾等物事が能く出來ても孝行と云ふ心が少くては。子の樣な心地がせず親の樣な氣持がせぬ。最う何も思ひ惑ふ事は無い。梅子——梅子。爾うだ松子が有ればこそ何方に仕やうなどと迷ふけれど。若し松子が無

かッたなら。何うして世に梅子ほどの好く出來た娘が有たいらうと。此方も葉井田夫人も瓜首も天に謝するほど喜んで居る所だらう。其れだのに猶だ迷ふとは勿體ない。孝行が何よりも取得。之て梅子と極て了ふ』

子爵の心は殆ど極た。極ッたに就ては何う言渡して好いだらう。熱した頭を爽かな秋の風に吹かせつゝ能く其邊の思案を仕やうと。斯う思ッて子爵は室を出で。靜に庭から屋後の林に入り。又歩んで丘の邊まて行くと。眺望の最も好き樹蔭に。本を手に持たまゝ松子が休んて居る。子爵は例もに變らぬ優しい聲て『何うして茲に。お獨りて』松子は極めて自然の調子て『此下の村に大さう哀れな病氣の子が有る樣に。先ほど廐の人達が話て居ましたから。毛絲の玩具を拵へて。持て往て遣た歸りてす。餘り景色が好くて方々が見えますから。ツイ樹の根に腰を卸しました』子爵は感心せぬ譯に行かぬ『爾てすか。哀れな子供に。アノ毛絲の玩具を。貴女が自分の手てお作り成ッて。何うも其のお情け深いには敬服てす』と。只た今。梅子の情の深いのを褒めた口て褒めた。松子『ナニ情と云ふのても有りませんよ。倫敦に居ますと。貧民を見廻るなど云ふ事を仕たことが有りませんから。何の樣な者かと半分は慰みにてす。慰みと云ては濟ませんけれど』謙遜して自分の慈善を飾らぬ所が實に見上げた心がけだ。此の心掛の有る者が。何て梅子ほど孝行の出

來ぬと云ふ筈が有らう。子爵の眼には又何だか涙が浮み相に成た。此明い所て。涙を見せるも厭だから。直に氣を替へ。話を移して『貴女は。此藏戸家の莊園を何とお思てす。茲から目の屆く丈の所は。大底世襲財產てすが。あの向の山の所まて』松子は惚々とした樣に眺め渡し『私しに之ほどの領地が有れば。領地の貧い人達の爲に。學校と病院とを建てますよ』此言葉は深く〳〵子爵の胸に徹へた。兼て領地の住民の爲に。慈善の學校や慈善の病院など建てるが好いと思た事は有る。實は太郎次郎が歸て來て嫁ても取れば。其紀念を兼て建て樣と。此樣に思て延して居るうち。二人とも歸らぬ人に成て了ッたのだ。此身の心に斯まて能く合た心を持て居るとは。年に合せて實に能く出來た心榮と云ふ可きのみか。天然に此身の後を嗣ぐ可き樣に生れ附て居るのては有るまいか。『貴女は全く大な領地を持つ身分に生て居ますよ。其樣な善いお心掛て居れば善い酬が來ずには居ません』

其の善い酬は何所から來るだらう。無論子爵は自分の手から與へ度い。とは云へ爾は云かぬ。唯た今梅子に與へる事に決心し。遣るに附ては何う遣れば好らうと。其の遣り方を考へる爲に出て來たのだ。併し斯う有ては又其の思案を後へ戻し。決定を延期する外は無い。成るほど梅子の心が優しい事は優しい。又愛らしい事も愛らしい。けれど松子の心とても優しくは有るまいか。

愛らしくは無いだらうか。其れに又、愛らしいの優しいのと云ふ丈て。此藏戸家の後が嗣げるだらうか。愛憎と云ふ樣な私情を捨てゝ掛らねば可けぬと呉々瓜首に云はれたのは茲の事ては有るまいか。松子の方に優しい愛らしい外に、領地を管理すると云ふ男にも珍しい才幹を持て生れて居るのでは有るまいか

何うしても決心を延す外は無い。何も爾う急がねば成らぬと云ふ事ても無いから、モッと氣永く。期限を切らずに。愈よと云ふ優劣の分る時まて延さうと。又も心の變ッたのは。成るほど止むを得ぬ次第の樣にも見えるが。實は梅子の運が熟さぬと云ふ者だらうか。其れとも松子の星が強いのだらうか

併し爾う長くは。延すに延されぬ事情が。問も無く起ッた。其れは此の子爵の健康が少しづゝ衰へ初めた事てある。何方とも定めぬ中に若し子爵が死だなら大變てある

廿八　輿論の判斷

子爵の健康が損じて見れば。早く後取を定めぬ譯に行かぬ。梅子か松子か何方かに極めて了はねば

と云て全く優劣が無のだから極る事は到底出來ぬ最う斯なれば。更に全くの他人に見て貰ふは無い。其れも一人や二人に見せた丈ては矢張り依估贔屓に誤られる恐れが有るから『何うて。此家て大宴會を開き。多くの貴顯紳士を招いて。梅子と松子と。何方が多くの人に感心せられるか。其れを實地に試して見ては』と言出したのは葉井田夫人てある。實に窮策ては有るけれど。外に策が無いのだから仕方が無い。『成るほど可否を輿論に問ふのてすか。宜しいてせう』と贊成したが瓜首てある子爵は『イヤ輿論の判斷と云ふ事も餘り當には成らぬけれど兩人の意見が爾う定ッた上は早速に爾う仕やう』と云ひ。話が極つた

けれど大宴會と云ふ事は容易て無い。準備だけも一方ならぬ。葉井田夫人は自分の口から出た事て有るけれど。若しも多勢の客に萬一の不滿を與へる事が有れば何う仕やう。其れに其身が久しく世間の宴會にも出ぬ爲に此頃の風にも疎く。若し後て笑はれる樣な事ても有ては。家名にも障る譯と今更の樣に稍や飽倦んだが。其れと見て取て痛く喜んだは草村夫人てある。今まて何彼に付けて葉井田婦人の機嫌を取る樣には勉めながらも。實は夫人が此一家の事を何から何まて切廻して居るのを羨ましく思ひ何うか其の權力の三分の一なりとも自分の手へ奪ひ度いと望んて居た。最う女が五十と云ふ年になると自分の身に權力の無いのを何よりも淋しく感ずる者だ。客分

として此家に居て。今まで夢にも見ぬ贅澤を盡して居るは。好い事は好いけれど。自分で思ふ儘に。萬事を切盛して。下女下男へも直直に差圖する事が出來れば何れほどか氣が樂だらう。爾うなれば又。此身が此家に無くて成らぬ一人と爲り。根を卸して居附くとも出來るのだと。樣々の方面から勘定して。初の程は唯だ信切に夫人を手傳て居たが。何時の間にやら夫人に手傳せるのかと見える樣な狀には成つた

是れは夫人の氣質が全く此夫人と違ッて居る爲である。彼夫人は權力など〳〵云ふ考へは少しも無く。唯だ此家の爲を思ふ許りで。少しても當世の事を除計に知て居る人の心に從ひ度いと思ふのだから。問は無くて好い事まで念の爲に此夫人に問ふ樣に仕て居るのだが。後に思ふと。是れが此夫人に。益す大家を支配する大權力の味を知らせ。死でも此家を立去ては成らぬとの濕ッこい迄の慾心を起させる元で有た。ナニ今現在の慾心さへ隨分に濕ッこいけれど其上に輪を掛けさせたのだ

唯一つ彼夫人が此夫人と爭ふたのは。梅子松子の着る衣類の事であッた。勿論兩女のを特別に佛國巴里へ注文する事に成り。注文の明細書を此夫人が認めたが。其れを彼夫人へ見せずに封のまゝ出さうとしたから。彼夫人が中を見せて下さいと請ふた。「其樣な事を仕て居ると郵便〆切の

時刻に後れます」と極々自然らしく言開いたけれど「イヽエ。是だけは一應子爵にお目に掛けて置かねば可けませぬ」と。靜な一言で異存を云はせず。直に子爵の所へ持て行て示すと。子爵は眉を顰め「イヤ梅子さんは十七だのに此樣な更けた好みでは見劣ります。矢張り松子さんと同樣に。色の淡いのにして。モッと婀娜ない飾りなどを加へねば」夫人は言紛らせた「アレ先達てから氣を附けて見ますのに。梅子さんには何の樣に地味な柄に移りませう。其れを私しは流行雜誌なども澤山參考しましたのに」子爵は唯だ穩かに「好みは人に依て色々です」と云ひ。直に筆を取て消す所を消し直す所を直し「サア此まゝて出せば猶だ郵便の時間に間に合ひます」とて時計を眺めた。危い所で梅子は年に似合はぬ婆じみた姿で大宴會へ出る事になる所であつた

大宴會の事は詳しく記すに及ばぬ。全く招待狀を受取た丈の人は殘らず來て。宴會としては非常の成功であッたけれど。梅子松子の優劣に對する輿論の判斷を請ふ爲としては失敗であッた。總ての人が梅子松子の美しさ愛らしさ優しさ清さの一樣に感服した。極々不公平な人が有て甲の方が優ると云へば直に其傍らに。イヤ乙が優ると辯駁する人が有ると云ふ狀で有ッた。

て最後の斷案は「何うして當家の主人は。世の中に二人とは無い美人を二人揃へる事が出來たらう」と云ふ謎の樣な疑問に歸して終ッた

けれど是れ丈けは事實であった。夫婦連て數日逗留の約束て來た客は、孰れも妻君の方に何か彼か故障が出來、細君に促されて止むを得ず豫定の日數だけ逗留せずに歸り去り、妻君の無い客は何か彼か口實が出來て豫定の日數より長く〳〵逗留した。のみならず晩餐の席に列なり度がる訪問客がズッと殖えた。是れは何の勢力だらう

廿九　明かに優劣が分ッた

多勢の眼でも、遂に梅子と松子との優劣を定めることが出來なんだので最う是と云ふ思案も無くなッた

其うちに主人子爵の健康は益す衰のるのみの樣に見える

或日瓜首は子爵と葉井田夫人との前で云ふた『子爵、那の兩個の令嬢は自分達が競爭的の試驗を受けて居るのだと心附て居られませうか』子爵は思案にも及ばず『其れは心附て居る筈が無い』葉井田夫人も語を合せ『梅子でも松子でも、此家の相續人に成られるなどゝ云ふ疑ひは露ほども持て居ません。若し其疑ひを持て居る人が有るならば、其れは草村夫人てせう。是とても明白には知りますまいが當人同志は夢にもてす』瓜首は餘ほどの智慧でも持出し相な容體と爲ッて『其

れだから優劣が分りません。兎も角も當人同志に取り、容易ならぬ事柄てすから、最う打明けて、兩女のうち何方でも一人を當家の相續人にする積だと言明けるが好いてせう。爾すれば双方とも大切な場合だと思ひ、自然と心が改まりますから。今まて見きなんだ優劣も見える事に成りませう』子爵『成るほど、尤もな說ては有るが、其れては全く競爭の號令を發する樣な者て、何だか可哀相にも思はれる』瓜首『其樣な區々の私情を云て居べき場合ては有りません。其れに遂には知さねば成らぬ事柄てすから、今の中に知せる方が却て當然てす』子爵『フム。如何にも、其れも爾うだ』と云ひつゝ葉井田夫人の顏を見た此の夫人は人の意見が孰れとも決せぬ場合には口も出すが。既に瓜首の意見が斯う定ッて居ると見た柄は口を出さぬ。成る可く人の意見を尊敬するのだ。子爵は斷案を下した『葉井田夫人に異存が無くば瓜首さんの御意見に從ひ。明朝食事の後に松子母子及び梅子と是へ呼び。極めて明白に言渡しませう』是れて愈よ。競爭の號令が公けに降る事に極ッた。梅子松子は此號令を何の樣に聞くだらう

所が此夜晩餐の後て。少し異ッた事が有ッた。其れは話の勢みから。梅子と松子との心の違ひを多少現す樣な問題が起ッたのだ。事の始めは領地の噂から出たのだが。松子が聊か言葉に力を籠て子爵に向ひ『私しは今日て三度。木蔭谷と云ふ所を通りましたが。其度に氣持が惡くなりま

した』子爵は少し怪んで『其は何う云ふ譯ですか』松子『那の谷は。小作人の住む長屋が並で居る。てせう』子爵『爾です』松子『私しは早く那の長屋をお毀し成さらねば可けぬと思ひます』傍に聞て居る草村夫人は。大變な事を云ふと打慌ぎ『アレ松子は何をお云ひだ。其樣な失禮な事を』全く松子の言ふ事が子爵の怒に觸れるだらうと信じた。松子は少しも構はずに『アノ樣な日當りの惡い所ですのに。傍に沼が有て。濕氣が絶えず。其れに那の長屋は家が餘ほど古くて。昔し風に室も小く。空氣の流通など云ふ事は少しも附いて居りません』梅子が何時に無く反對した『あれ。那處は大層景色の好い所では有りませんか。遠くから見ると蔦や葛が壁から屋根まで這上つて居る小屋の樣な長屋が沼に映り。畫にも無いほど美しく見える樣に私しは思ひますが』松子『美くしい事は美くしいけれども小作人の健康には代られません。彼許に居る兒供達は。私しの氣の所爲ては無く。全く田舍の小兒とは見えぬほど顏色が惡いのです。又親達の中にも傴麻質斯を病て居る者も有ります。那の樣な健康に障る家を毀さずに置き。人を住はせるとは罪な事です』母夫人は顏色を失ッて。握て居る寶の山が自分の手から拔去る樣に感じた『アレ此兒は又。小說でも讀て逆上せ詰めたのだよ。常は其樣な出過た話をした事も無いのに』子爵は聊か感じた容子て『ハテ。那の邊の子供の顏色にまで異りが有りませうか』松子『御覽なされば分ります。那の長屋は何

うしてもお毀し成さらねば』梅子は如何にも殘念相に『でも那れを毀せば此領地の名所へ傷が附くては有りませんか。子爵。お毀し成ッては可ませんよ』松子『幾等名所でも百姓の健康には替られません。領地を持つ人の第一の務は小作人の幸福と健康とです』子爵は何方とも裁判しかねて『サア何方の言葉に從ひませうか』と一同の顏を眺めた。松子『私しの云ふ通りに成さらねば』梅子『何うか私の申す通りに成ッて下さい』兩女ともに仲々熱心てある。草村夫人は何て松子と梅子とがアベコベの言葉を吐かぬだらうと悔しく思ひつゝ。窃に子爵の顏を見ると。少しも立腹の容子は無く。却て機嫌が好く見えて居る。ハテな。其れとも松子の言ふ事が氣に叶て居るのか知らん。松子の言葉には時々飛ても無いと思ふ事が有るけれど此身よりは學問があるのだから。何うかすると。此身が心配する言葉て。案外に他人から褒られる場合もある。今の言葉にも何處かに奧妙な眞理とやらが籠て居るのか知らんと思ひつゝ。最も巧に跛を附け『領地を支配成さる事に付ては松子の云ふ事も梅子さんの言ふ事も。子爵は兩女の生れぬ先から御存てすサ。サア〳〵議論は私しが預りませう』と云ひ。梅子松子の双方を引立てゝ玆を去た。斯う云て斯うすれば何方へ何う轉んでも間違ひは無い

其の後て瓜首は子爵と葉井田夫人とを促し。子爵の室に入り。重々しい顏。重々しい言葉て『子

爵。今の兩女の言葉で、明かに兩女の優劣が分りました。最早や少しもお迷ひ成さる事は有りません』と斷言した。知らず、何方へ何う分ッたと云うのだらう

卅　兩女の約束

果して爾う優劣が分ッたとすれば、子爵も葉井田夫人も重荷を卸した樣な氣がせねば成らぬ。子爵は半ば怪みつゝ『兎も角も、吾々三人の中で、一人でも意見の定ッた人が出來たのは有難い。ねえ葉井田夫人』葉井田夫人『爾ですとも』

瓜首は力を得て『一方は農夫の健康を第一に置き、農夫の爲には景色の美は捨ねば成らぬと云ひ、一方は農夫の健康よりも景色が大事だと云ふのでせう。成るほど畵工か詩人ならば其意見が尤もですけれど、先祖以來の大責任を引受ける藏戸家の相續人としては、農夫の健康を重ずると云ふ着實な意見が何よりも大切です。私しは實に草村松子嬢の考への確なのに敬服しました』葉井田夫人は無言で首を垂れた。子爵も一言の返辭が無い。唯だ考へるのみである。良あッて子爵『けれど春川梅子とても農夫の健康を顧みぬと云ふ譯では無い。木蔭谷の農夫等が其れほど健康を損じて居ると知らぬのだ。知れば松子と同樣の意見を唱ふるかも知れぬ』瓜首『左樣。知れば唱ふるかも分りませんが。知らぬ丈け劣るては有りませんか。景色を見ても農夫の健康と云ふ事へ先きに氣が附くのと、景色の美にのみ心を奪はれるのと、即ち其處に、領主たる責任に適すると適せぬとの別が明かでは有りませんか』成るほど爾うだ。併し子爵は未だ何だか贊成し得ぬ所がある『ですが梅子も仲々責任を重ずる氣質ですよ。全で壽の事より外に心の向かぬ云はゞ不具の樣な、父に仕へ、アノ年齡の行かぬ身體で兎も角一家を治めて居たのだから、責任に堪へると云ふ事は認めて遣らねば成りません』瓜首『父と雇人一人と合せて三人の家を治めると、五百戸以上の小作人の有る大領地を治むるとは餘ほど責任の質が違ひます。大領地は、何より先に民の疾苦に氣の附く人で無ければ』實に動かす可からざる確論と云ふ者だ

子爵は三たび目の異論を持出した『併し梅子は小作人に愛せられ尊ばれますよ。今でも彼等の中には梅子を天使と思ひ、梅子が通ると直に出て來て見る者が有のです』瓜首『松子さんとても其通り愛せられて居ます。民の疾苦を第一に思ふ人は年月を經るに從ひ益す民に景慕せられます』是れも動かす可からざる確論だ

又も子爵は考へ込んだ。最う異存の種が盡きたのか知らん。爾して終に云ふた『けれども。昨日貴方の說で。兩女へ實際の位地を言聞かせ。競爭と云ふ事を承知させた上で試驗すると云ふ事

に相談が極たでは有りませんか。私しはアノ相談を確守します。兩女に能く言含め。其れて本統に優劣の現はれる迄、決定を延ばします』最う異存を云はぬ樣に。屹ぱりと言切たので。瓜首も默して了ッた。此相談に初から首を垂れたのみて。終まて何にも云はずに了ッたのは葉井田夫人てある

翌朝。朝食が濟むが否や。子爵は『大切な用事が有るから』と切出し。葉井田。草村兩夫人及び梅子松子瓜首を書齋に招き。爾して松子梅子に言渡した。其言葉は鄭寧て有た。綿密て有た。太郎次郎の死た事から當家を相續する者が梅子松子の外に無い事。爾して兩女の中一人を相續者に見立る爲に此家へ招いた事。又此後の模樣て。何方に定まらうとも互に怨に思ひなどしては成らぬとの事を。本統に噛て哺める樣て有た。勿論其言葉は熟誠に出て丶目には涙も浮んて居たから二人とも。深く感動して聞たが。聞終て。先づ梅子が口を開いた『私しは相續人に成らずとも。是ほど當家の近い親類の樣に見て戴く丈て澤山てす。何だか荒夜物語にても在る樣な話てす事ねえ』松子も深く感じて頓には言葉も出なんだが終に『何うか私しは。何方へ成ても當家の親類と云ふ事に耻ぢぬ樣に致し度いと思ひます』何方が立派な返辭だらう。瓜首は流石に松子の方に確な所があると感じた

此相談が終ッて一同此室を立つ時に。草村夫人だけは。蹌踉いて殆ど歩き得なんだ。梅子松子は毎もの如く仲能げに一緒に退いたが。言合せた樣に又一緒に庭に出た。梅子は聊か呆れた樣に『先ア貴方と私しとは知ずに大變な競爭をして居たのてすねえ』松子『爾てす。知て見ると何だか極りが惡い樣では有りませんか』是れが世間の娘達なら。唯だ極りが惡い丈ては濟まぬ。必ず怨み合ひ憎み合ふ事にもなる。梅子『貴女が當家の主人に成ても。何うか今の通りに私しを可愛がッて下さいな。私しは長く親類て此家に出入りして居たいと思ひますから』早や松子が當選する者と思ひ詰めて居るらしい。松子『アレ貴女は當家の後取に成り度くは無いのてすか』梅子『成り度いてすども。けれども貴女が年も上だし。私しより學問も有て賢いてすもの。貴女に極て居るのてすわ』松子『極ッて居るなら何て今の樣な言渡しが有りますものか。貴女の方が私しよりも深く可愛がられて居るのてすよ』互ひに讓り合ふ樣な言葉の中にも。幾等かは自分が負けはせぬかとの心配が有るのか知らん。心配の有る丈け競爭の心が起ッては居るのだ。清淨無垢の娘兩人を此樣な地に立せるとは全く慘たらしい樣な氣もせられる

梅子『貴女がお當り成ッても私しは少しも惡い氣持などは起しません』松子『其れは私しもてす。茲て互に約束を極めて置きませう。何方と極ッても心持を惡くせぬと云ふ事に』梅子『ハイ。約束

には及びませぬけれど約束して置きませう。私しは決して貴女の幸ひを嫉みません』松子『私しも決して貴女の幸ひを嫉みません』

言葉を番へ終る折しも『[illegible]』。松子』と家の窓の所から呼立るは母なる草村夫人である、夫人は漸く心も落着いたのだから、早く松子を呼んで、何か是からの心得を言聞かせねば氣が濟まぬのだと見える

卅一　お遽てゞない

母なる草村夫人の呼ぶ聲に、松子は梅子に分れやうとして又念を推す樣に『此約束は能く分りませうねえ』と云ふた。或は自分が相續人に選ばれるだらうと思ッての爲か知らん、イヤ必ずしも爾ては無いが、者しも自分が選ばれるか知らんと位には思ふだらう。是は梅子も同じ事である双方共に爾う思ふと、無邪氣無慾の身て有ッても實に生涯の大事の場合だと急に重々しい心地の湧出る樣に感ぜられるらしい。双方ともに毎に無く極めて眞面目な顏とは成ッた梅子『ハイ守りますとも』此一語で二人は分れた

斯くて松子は母の許へ行きつゝも猶考へた若し此家の相續人と爲れば何なるだらう。國中屈指

の貴族と爲り。大金滿家と爲り。敬はれる羨やまれもするに連れ。重い〳〵責任と云ふ者が我が肩に掛つて來る。勿論人は責任を負はねば成らぬ。此身、女とは云へ若し領地を支配する事とも成らば。斯もして彼あもしてと。此家へ來て以來、思つた事が無いても無い。此家の領地が直に此身の物に成らうとは夢にも思はなんだけれど領地を見ては其樣な事を思ひ。唯だ空く怪んだことは度々てある。其の怪みが幾等か誠の事に近くなることは妙な者だ、若しも此事を友達に聞かせれば、イヤ民雄に聞かせれば——と到頭民雄の事が何より大切な思案と爲つた

今知らせれば。事に由ると喜ばぬかも知れぬ。けれど若し相續人に成た上て知らせれば、此身が貴族と仰がれる身に成つたと知て眞逆に喜ばぬ事は無からう。幾等平民主義獨立主義と云て。自分の腕一本て稼ぎ上るを此上の無い名譽と心得て居る人だとて。其身の妻が不意に貴族と爲り大金滿家と爲ッて。生れ得た天然の權利と天然の幸運て出世する者を何て腹立しく思ふ者か。必ず喜んて。祝にも來るだらう。イヤ未だ當選も何もした譯ては無い。愈よ何方にか極る迄は。知らせて遣らずに置くが好い

母御は再び現はれて。又も呼んだ『松子。松子。何を其樣にグズ〳〵して居る』此方がグズ〳〵して居るのては無い自分が操立て居るのだ。頓て松子が其傍に行くと『先ア私しの室へお出て』

とて直に二階へ連れて上ッた。爾して室に入るが否や、今まで燥立て居たけれど、更に輪を掛けたほど燥立ち、聲までも震はせて『サア其の入口の戸を締めてお呉れ。人が來ると可けぬから』と云ひ、松子が其言葉に從ふのを待ち兼ねて『アヽ私しは先程、子爵から言渡しを受けた時、何の樣に胸が騷だゝらう、其れても人の前だから何氣無く構へては居たが、何うだらう松子、大變な事に成たては無いか。此樣な時に遽てゝは可ないよ。お遽てて無い。お遽てゝ無い』松子は嘲笑ふ樣に『貴女よりほか誰も遽てゝは居ませんよ』母『先ア其樣な事は何うても好い、何と目出度い事に成たては無いか』松子『阿母さん其樣な事を云て下さるな、未だ何とも極らぬては有りませんか』母『イヽエ極ッて居ます。極て居る樣な者です。必ず和女に極るだらう。和女は知なんだゝらうけれど、私しは此家へ來た時に、直に其れと見拔て了ッた、和女と梅子とを見較べて何方かを相續人にする爲めて無くば何て故々招く者か。私しは爾うと知つたけれど誰にも云はずに居た云ひてそせぬが私しが內々て骨を折つて居た事を何れほどゝお思ひだ。瓜首や葉井田夫人の機嫌を取る許りも私しは壽命の縮まる程であつた。葉井田夫人の方は何うか分らぬが、瓜首は最う全然和女に同情を寄せ和女ほどの賢女は又たと無い樣に思ッて居る。アレ。先アお聞きよ。だから和女が愈よ相續人に定まれば、半分は私しのお影だよ。イヽエ半分も七分も八分も私しのお影だ

爾うともね。何も母子て手柄を爭そふには及ばぬけれど。本統に和女は此の阿母さんを有難いと思はねば濟ないよ。エ。爾は思はぬかえ』獨りで二人の事を喋舌て居る。松子は漸く母の言葉の切れるを待て『イヽエ阿母さん。私しては有りませんよ。屹と梅子さんに極りますよ。私しは昨夜の晩餐の時なども。遠慮無く木蔭谷の事などを云ひまして。多分子爵のお氣に障たゝらうと思ひますもの』母『イヽエ。所が。那れが大層好かッたのだよ。私しも一時は何うしやうかと思たけれど。今朝も瓜首が大層和女の言葉を褒めて居た。子爵も感心せられた相だ。流石に和女は學問が有る丈に。人と違た事を云ふが。其れが矢張り學問の有る人には感心せられる。是も同じく阿母さんが學問を仕込て遣たお蔭だよ。其は爾うと和女は少しも子爵の前で佛蘭西語を使はぬね。是からは話の中へ少しづゝ調合おしよ。爾すれば愈よ和女の優た事が分ッて來るから』松子『私しは其樣な事をして自分の爲ばかり考へるのは嫌ひですよ』母『自分の爲では無い阿母さんの爲なのよ。孝行の爲なら少し位は勉めても——』松子『イヽエ。私しは自分の惡い所は惡い儘に知らせ。其上て極るなら本望ですけれど。飾り立てる樣にして取極られるのは御免です。今夜私しは子爵の前て自分の今までの事を殘らず申して置うと思ひます。何は兎も角。民雄さんの事などは能く申し上げて置ねば。後て子爵が。其れは見込が違ッたと仰有る樣な事が有ッては』母御は椅子か

ら蹴上げられた様に立ち上り『エ。エ。何と云ふ。民雄の事を。民雄とは何者です。母の許さぬアノ書生の様な代言人だらう。母が許さねば和女の爲に何でも有りません。何でも無い人の事を子爵に言て何とします』母御は殆ど狂氣の狀である

卅二　譬へ様の無い大の盗賊

自分に許婚の夫が有る事を。子爵へ推隠して置て當選するのは。松子の氣質として何うしても出來ぬ事だらう。殊に外の場合とは違ひ自分が若し子爵家の當主と爲れば自分の夫は當主より猶上にも立つ可き人である。財産家産一切の權利は當主たる自分に在るとしても。自分の心は夫の心に從はねば成らぬ。爾すれば自分が此家の當主に成るには。民雄が此家を相續するのと太した違ひは無いのである、其れだのに何うして民雄の事を子爵に告げずに置かれやう。之を告げねば何だか子爵を欺く樣にも思はれる。松子の心は全く決して居る

併し松子の決心よりも母の決心の方が猶強い。何うして松子に其樣な事を。子爵へ打明けさせて成る者か。之を打明けては萬に一つも當選はせぬ。何が何でも是ばかりは推留めねばならぬ

眞に夫人は立腹した。何所の馬の骨とも知れぬ書生同樣の男が。斯うまで我が娘の心を奪ふて

居るとは。實に許し難い賊てある。之が爲に此の大事の相續權を取逃す迄に立到ては。賊も賊。譬へ様の無い。大の盗賊。之を追拂はいて成る者かと。全く血眼に成て民雄の事を罵つた。勿論口の達者な此夫人が必死の場合だから何れほど口穢かつたかは云ふに及ばぬ。若し他人が其言葉を聞たならば。全世界を悉く盗んで了ふ程の大賊が現れた樣にも聞えたらう。又人間にして何して爾まて深い惡心を持つとが出來るだらうと怪みもする所だらう。けれど松子には功が無かつた。夫人が罵れば罵る丈け。益す松子は固ッた。爾して漸くに夫人の言葉の途切れるを待ち最と靜に唯だ一言云ふた『其れ御覽なさい。阿母さんが其れほど惡く云ふ人ですもの。猶更隠して居ては濟まぬては有りませんか』實に。靜だけれど苦い言葉である。母御は怒鳴た『隠して居よと云ふのては有りません。其樣な者を。夫だの許婚だのと云ふ事は間違つて居るのだから。捨て了へと云ふのてす。夫でも無く許婚でも無い者を。何て子爵に申立て。何て耻を晒します』松子は又一言『ては。民雄さんを捨るより。此の藏戸家を捨てませう』夫人『エ。何と』松子『ハイ私しは此家の相續人には成られぬと子爵へお斷り致しませう』

母御は到底駄目だと見た『和女が其樣な事をすれば私しは死て了ひます』と云た。全く此相續を取逃すのは。夫人に取ては命を捨るより辛いだらう。夫人の言葉は霰の樣に口から手走た『和

女は。私しの死るのを何とも思はぬのだ。私しを殺すのだね。サア剃刀を持て來てお呉れ。和女の望み通り死て上げるから』何たる無理な言葉だらう。無理に從ふ松子ては無い。夫人は此手段も亦無効と見て。最う百計盡きた。今度は聲を發ッて泣出した

是れは計略で無い。空泣で無い。本統に悲く成たのだ。此夫人に取ては親に離れるよりも此身代に離れるのが辛いだらう。夫に死れた時とても是ほど眞實には泣なんだ。身も世も有られぬとは夫人の此の時の心持なんだらう。誠を絞る血の涙と云ふものである。嗚呼唯だ眞實の心のみ能く人を動かすとか。石の樣に固まッて居た松子も之には動いた『貴女は其れほど悲しいのですか阿母さん』母は力も無く。絶え入る樣な聲で『私しは先あ何の罰て。此樣な悲みを受ける事に成たのだらう』と云ふた。何の罰ても無い。自分の慾心が深過る報いなんだ。けれど流石に子としては爾も思ひ得ぬ。今まで餘り强情を張り過ぎたかと。何だか濟まぬ樣な氣も起り。母の心中が氣の毒に思はれて。松子は潔よく言切た『其れなら阿母さん貴女のお言葉に從ひますよ』

言切りはしたものゝ。直に後悔の念が起ッた。アヽ。言切らねば好ッたのにと。悔んでも最う歸らぬ。母御は涙の中から聲を出して『オヽ本統に私しの言葉に從ッてお呉れかえ』松子『ハイ。仕方が有りません。無言て居ませう』母御も、松子の胸に。何れほど濟まぬ心が蟠まッて居るか

を察した斯う從はれて見ると。氣の毒で無いても無い。今までの自分の怒り方が烈しかッた丈け猶更だ。一言。禮をと迄には行かずとも聊か松子を慰めねば。心が落着かぬ『オヽ何うか爾してお呉れ。爾したとて。何も子爵に濟まぬなどゝ云ふ譯ては無い。和女が當選すると極ッて居る者なら。其れは何も彼も打明けねば濟まぬだらう。けれど當るか當らぬか分らぬのだもの。其れに子爵とても充分和女と梅子さんの氣質を見拔た上と仰有るのだから。今打明けるには及びませぬ若し梅子さんが當選して御覽な。和女が打明けるのが無益の手數と云ふ者ては無いか。オヤ此女は早や自分て當選する者と取極めて居るか知らん。餘まり自惚が强過るぢや無いかと此樣にも疑はれるからねえ』成るほど理屈は何うても附く者だ。松子の胸に蟠まッた濟まぬ心も之が爲に幾等かは薄らいだ。爾うだ、當選とは極らぬのだから。未だ打明けねば成らぬと云ふ者ては無いと口の中て母の言葉を繰返した。幾等娘が賢くても母は母だから猶だ是だけの勢力はある

卅三　私しだとて心配は

松子は母の言葉に從ふたけれど。猶だ何だか濟まぬ樣な心が。心の底に殘て居た。成るほど自分が當家の相續人と極りもせぬのに。極るに極ッて居るかの樣に子爵へ自分の身の上を打明るの

は可笑しい。可笑しいけれど打明ぬは何だか善く無い樣てある何うすれば好からうと。母の室を出て後も猶た考へて居た

若し此狀て日數が長く續たなら。必ず松子は子爵へ打明けて置かねば成らぬと云ふ最初の心に歸る所だッたらう。けれど爾う日數が無かッた。最初の心に歸る迄に至らぬうちに其身と梅子との運命が極る事に成て居た

梅子の方は。何も自分の身の上に就て。隱すの打明るのと心配する樣な事は一も無い。生れて十七年の間。殆ど同じ月日を送て居たのだ。今日の梅子を見れば。昨日の梅子も分る。十七年の間毎日の梅子が今日の梅子の通りてある。素直て愛らしくて。思ふ心が悉く顏に現れて。爾して人を愛すると云ふ事は知て居て怨むの憎むのと云ふ事は知らぬ。强て今までの中て異つた所を求むれば。學校に行たと云ふ一事件が有る許りだ。其れも幼い中に母親から色々敎育を受けた丈け別に學課が六かしとは思はず。併し誰とても人に負けるのは厭だから隨分勉强はしたけれど別に苦勞の。波風のと云ふ樣な事は何も無かつた。毎も級では一番か二番に居て同級の生徒から。梅子さんは敎師が贔屓して下さるからと云はれたのが若しも人に恨まれると云ふ者なら。恨まれたのは後にも先にも其れのみなんだ。贔屓か何だか知らぬけれど卒業は一番であッた。敎

師にも校長にも惜まれた。最う二三年。中學以上の高等な學校て修業すればと云はれたけれど。其れは父が許さなんだ。學問は最う澤山だから。之からは繪の稽古をせねば可けぬとて膝許に引留められた。爾して一年の月日を送るうちに。不意に藏戸子爵が見えて。此家へ連て來られたのだ。驚たのは生涯に是のみてある

眞に梅子は、玉ならば何の曇りも無い玉と云ふ可きだらう。其の健々しくて。心が透通ッて何の心配も無さ相に見える樣には松子さへも羨ましい程に思ふた。自分が民雄と母との間に立ち。子爵へ打明けやうか打明けまいかと心配するに付け。益す梅子の曇の無い所が目に附いて。或時梅子に爾う云ふた『ほんに貴女は。羨ましい樣てすよ』と。けれど梅子には其の意味が分らぬ『何て其樣に仰有るの』松子『少しも心配と云ふ事をお知り成さらぬのてすもの』梅子は笑ッた『アレ私しだとて心配は有りますワ』松子も笑ッて『オホヽ何の樣な心配てす』梅子『阿父さんが。內に一人てすもの毎日婆や に叱られて計り居るだらうと思ひますと。時々歸り度く成りますよ』松子『其樣な事が貴女の心配だから。其れだから羨ましいと云ふのてす』梅子『ても貴女は阿母さんが傍に居て何から何まて仕て下さるでは有りませんか。私しなどは阿母さんが居て呉れゝば。何れほど心が樂だらうと思ひます。貴女の方が何れほど羨ましいか知れません』

譯も無い雜話では有るけれど。多少は兩女の氣風の違ひも分ッて居る。之を聞いて居た葉井田夫人は。何と無く。梅子が亡き母を慕ふ樣に聞えるのを不便に思ひ。此樣な身の上を此樣な競爭の場合に立せるのは痛痛しいと云ふ樣に感じた。幾時の後。梅子の獨り居る所へ行き『梅子さん。貴女は子爵から言ひ渡された事が氣には掛りませんか』と問ふた。梅子は極めて自然な言葉で。却て葉井田夫人の斯く問ふを怪む樣に目を開いて『氣に掛けたとて仕方が無いては有りませんか。子爵のお目で見て下さるのですもの。子爵のお目を私しが何うする事も出來ませんワ』夫人『でも貴女は。此の家の當主に成り度いとは思ひませんか』梅子『其れは成り度いと思ひます。何うか貴女が仕て下さい』と云ッて笑ッた、夫人『若し成られなんだら』梅子『成られぬのが當り前だと思ひます。何て私しは。子爵が松子さんにお極め成さらぬだらうと怪みますよ』夫人『其れは貴女と松子さんの優劣が分らぬからと子爵が仰有ッたては有りませんか』梅子『優劣は分ッて居ますよ。其れだから私しは。先きも松子さんが羨ましいと思ひました。私しに何の取り所が有りませう。何て松子さんと優劣が分らぬのてせう』問ふ其の心の底の清さが又と得難い取所であるのだ。夫人は何だか胸の塞がる樣な心地がして。返事をせずに居た。梅子は合點の行た樣に『子爵のお目で、私しの取所は唯だ一つです。私しの顏が亡なられた次郎樣の顏に似て居るとか云ふ事だけです。

其れだから迷ふて居らしやるのです。ても一つても取所が有ッて私しは仕合せだと思ひます。ねえ夫人、仕合せですねえ』

夫人は何て此の無邪氣な淨清な娘が我が子て無いだらうと殆ど天道が恨めしい樣に思ッた。爾して堪へ難く成ッたか抱き寄せて前額に接吻した。梅子には分らぬけれど夫人の眼には涙が一ぱい湛ッて居る。若しも梅子の顏へても落しては成らぬと思ふ樣に。頓て梅子を推退けて傍を向いて立去ッた。吁。勝負は何う附く事だらう

卅四　これが危險です

誰が考へたとて梅子と松子との優劣は分らぬ。分らぬのては無い優劣が無いのてある。一方が或點て優て居れば。他の方は他の點て優て居る。全く平均したと云ふ者て。何時まて經たとて勝負は附かぬ。子爵自らも爾う思ひ葉井田夫人も爾う思ひ瓜首法務者も爾う思ひ所が。先頃から勝れずに居た子爵の健康が追々に惡い方に向ひ。或る朝。新聞紙を讀て居て氣絕した

先頃まて新聞紙は毒過に着く事てあッたが此程から。運輸の便が更に開けたと云ふ事て朝の間

に着く樣に成つた。其れが子爵に一つの樂みを添へ。毎も朝は氣分の引立つ樣に見受られたのに何故の氣絶だらう。或は驚く樣な記事が又有たのかと。第一に不審したのは無論葉井田夫人であるけれど。爾ては無かッた。全く身體に病が出來。氣力の衰へた爲めてあッた。直に醫師を迎へ。其れ〳〵の手當をして間も無く元に復たけれど。醫師は容易ならぬ顏をした。爾うして氣遣ふて問ふ葉井田夫人に向ひ。別室て斯う答へた『イヤ。別に特殊の病氣に襲はれたと云ふては有りませんが。餘り心配を成され過て腦が常調を失したのてす。其れ丈なら唯靜養する丈て直りませうが。甚く心臟が衰へて居ます。是が危險てす。ナニ今何う斯うと云ふては有りませんが。一週間經たぬと。確たる事を申上げる譯に往きません』

何だか奥歯に物の介ッた樣な言ひ樣て有る『今一週間經たぬと』とは此の一週間の中にも何の樣な變が有らうも知れぬと云ふ事か知らん。成るほど此の七八ケ月の間子爵が心配なされた事は。何れ程とも醫へ樣が無い。此頃てこそ梅子松子の愛に紛れ。時時は笑を浮べられる事も有るけれど。笑の後は屹と涙てある。二人の行末をお考へ成さる丈ても並大抵の事ては有るまい。其樣な事が亢じて腦の調子にまて故障がお出來なさッたのだ

葉井田夫人は心細さに堪へぬ氣がして直に瓜首を呼びに遣た。呼ばずとも午後には來るに極て

居るけれど其れまて待て居られぬ。間も無く瓜首は來た。事の次第を篤と聞た。聞て大いに打驚き。同じく思案に餘る體て又例の癖を出し德利を振る樣に首を振た。瓜首ては無くて振首てあるなど丶笑談を云ふ場合て無い。殘念な樣に嘆息して『ア丶先日私しが松子さんにお極め成さいと申上げた時。其通りに極て了へば。今頃は子爵も心が休まつて。嬉しく養女披露の宴でも開く須てすのに。ねえ夫人。全く此御心配が元に成たのてすよ』葉井田夫人は考へつ丶『ハイ私し。だと思ひました』瓜首『御自分ては梅子も松子も可愛くて。其の愛に引かされ。到底お決し成さ事は出來ませんから。吾々て取極て其の御心配だけ弛まる事にして上げませう』夫人は餘り進まぬ容子だけれど『ハイ爾ても致しませうか』瓜首は力を得た樣に『貴女が爾う御同意ならば。最う何も評議には及びません。先日の一條て既に分ッた通り。兩嬢の優劣は最う極て居ますから。私しから能く申上げませう』と云ひ早や立ち掛けた。葉井田夫人は何とも返辭せず。唯だ無言て俯向たが。愈よ瓜首の立たんとするを見て『でも貴方』と云て首を上げ。瓜首の顏を見上げた。實に何とも云ひ樣の無い心配が其の眼に浮んて居る。瓜首は合點した樣に輕く呑込み『ナニ御心配に及びません、少しも子爵をお慰かせ申す樣に唐突には云ひませんよ。私しの事てすもの。何て子爵の御病氣に障る樣に申しますものか。如何にもてす。子爵に。己は其れほど危險に見られて

居るのかとお疑はせ申しては大變ですから、其所は最う柔かに――』と云つゝ。今度は愈よ立上ッた、彼れは或は葉井田夫人の心配を取違て居るのでは有るまいか。言葉と共に早や戸口の方に向た。葉井田夫人は遽てゝ彼れの外被の端を捕へ『少しお待ち下さい』と云ひハラ〳〵と涙を落した。瓜首は振向て『イヤ貴女が爾うお悲み成ッては益す子爵の御病氣に障りますよ』夫人『アレ爾ては有りません』と云て少し口籠たが。思ひ切て『貴方は子爵へ何と申上げるお積りです』瓜首『無論、相續の事を申上げるのです。此件は最う私しと葉井田夫人との間で相談を極めたから御心配成されますなト。イヽエ、斯う申せば重荷を卸した樣にお心が休まりますよ。實際お心を休めて好いのです松子嬢ほどの相續人が又と得られる者では有りません』夫人は身を震はせる樣に『でも梅子と松子との間に。其れほど優劣が有るのですか』言葉と共に又涙が雨の樣に落ちた。此夫人が此樣に人を遮る事は今までに無い事だ

卅五　愈よ決する時が來た

『でも松子と梅子との間に其れ程の優劣が有るのですか』葉井田夫人が問詰める樣に云ふは能く〳〵の想である

瓜首は少し呆れた樣な。又少し叱る樣な調子で『オヤ貴女は。未だ此問題を決し得ぬと云ふのですか。最初に私しが何と申して置きました。憎いの。可愛いのと云ふ私情に絆されるのが何よりも禁物だと。子爵及び貴女の贊成を得たでは有りませんか。私情は一時。お家の爲は永久です。若しも一時の可愛いとか可哀相だとか云ふ私情の爲に。此選び方を誤ッて他日萬一の事が有れば。其の責任は貴女に落ちます。貴女は一人で。濟まぬ思をせねば成りません。貴女は他日誰に責められても。又當家の後々に不爲な事が有ても。是は私しの私情で仕た事ですから致し方が有りませんと云て。其れて先祖代々へも。限り無き子孫の末々へも。言譯が立つと思ひますか』斯う嚴重に言はれては、何と言返す辭も無い。夫人は默然として又首を垂れた。是れが本統に落膽の躰なんだ。瓜首は此狀を見て。少し自分の言葉が强過ぎたと。氣の毒に思つたか。暫し立兼て躊躇したが。併し其れは。ホンの少しの間て有た。自分で又『私情に絆される場合て無い』と。自分の心を叱る樣に呟いて玆を立ッた。無論子爵の室を指して行くのだ

後に葉井田夫人は。深〳〵嘆息したが自分が梅子を愛するのが。眞に瓜首の云ふ樣な私情だらうか。梅子の身に。人に愛せられる丈の美しい天性が備ッて居ればこそ自然に人が。可愛いと云ふ情を起すのては有るまいか。今までは此の可愛いのを私情とは思はなんだがと。愚痴な樣に

心の中で繰返した末。何を思ひ出したか。突と立上ッた。爾して廊下へ出て瓜首の後を追ふた

子爵の室より少し手前の所で瓜首に追附いて『瓜首さん。私しも御一緒に行きませう』勿論瓜首が拒む可き權利は無い。一緒に。靜に。子爵の室に入ッた。子爵は枕許に小い卓子を引寄せ。其上に紙墨筆などを置き。何か考へて居たのは矢張り相續の事に違ひ無い。二人が頓て座を占めるを待ち『好い所へ來て下さッた。お二人を迎へに上げやうと思て居ました』と云ひ。更に少し考へて『何うも私しは今の中に遺言狀を作て置かねば成るまいと思ひます。遺言の事ばかりは。何の樣な病人に向ッても。サア今の中にお作り成さいと。他人から云ふ譯には行かず。當人の方ては死際に成ても猶だ生延るだらうと云ふ樣な慾が有て。ツイ書く可き時期を失ふ事が有り勝てす。私しばかりは其樣な事が有ては成らぬと兼てから思つて居ますので。誰からも懸念されぬうちに作り度いと思ひ。先刻から獨り色々と考へて居るのてすが。何にしても梅子と松子との取極が肝腎てす。と云て其の取極が今までも出來ぬ程てすから。此上色々と屈托するより。三人て投票したいと思ひます。投票ならば三人の事だから、半々に分れる氣遣ひも無し、一度に極つて了ひますから。即座に決着を得るのてす』誰とて異存の有る筈は無い。葉井田夫人は唯だ首を垂れた儘てある。瓜首は極めて眞面目に『何より適當のお考へてす。したが投票は記名てすか無記名てすか』子爵は少し笑み『瓜首さん。此樣な時に法律口調は廢して下さい。此三人の間て記名も無記名も有りません。梅子なら梅子。松子なら松子と其名だけを書けば能いのてす』瓜首『蹄する所無記名投票てす。其れは何うしても無記名投票の方が投票の理論に適して居ます』子爵『投票用紙も。裁て拵へて置きました』愈よ梅子松子の運命の決する時が來た。全く三人の投票だから否應無しに。一時に決するのだ。子爵も落着いて居る。瓜首も落着て居る。獨り葉井田夫人のみは。自分の動悸が自分の耳に聞える程胸の波が高く打た

卅六　紙一枚でも威光がある

實に重大な場合である。藏戸家の千年後までの運命が。此の投票て決するのだ。何の儀式も無い子爵の病狀だけれど。何と無く氣が改まッて空氣が重くなッた

室中に何の音も無い。子爵が投票紙を取ッて分ける音がサワ〳〵と聞えた。唯だ三枚の投票紙。之が梅子と松子との運命をも含んて居るのだ。斯うなると紙一枚でも威光が有る樣に感ぜられる。是を扱ふ子爵の手先は震へる樣に見えた。受取る瓜首の手は爾ても無かッたが葉井田夫人に至ッては全く戰々した

次に筆墨を渡した。爾して子爵は言ふた『何うか能く考へて。後で悔む樣な事の無い樣に』ア、悔む事の無い樣に。之は何の意だらう。暗に梅子とか松子とか仄かす心だらうかと葉井田夫人は少し怪み。何方かと考へて。垂れて居た眼を聊か揚て見た。けれど子爵の顏は唯だ重々しいのみである。瓜首は筆に墨を含ませたまゝ天を仰ぎ。宛も神に禱る樣な音調で『何うか藏戸家の千百年の爲を誤らぬ樣に。何うか吾々一同。私情に誤られぬ樣に』と云て下に向た。私情に誤られぬ樣にとの語が妙に力强く聞えた。子爵の心にも感じたどらうが。殊に神經の微妙な葉井田夫人の心には浸透る樣に徹へた。夫人の手先は又震えた

頓て子爵は。病氣に似合はぬ確な手で投票用紙へ書いた。梅と書たか松と書たか其れは分らぬ。瓜首は一字毎に筆を揚げ其先を瓢乎々々と搖かしつゝ法律家然と書た。但し頭も例に依て多少動いた。葉井田夫人が一番後れた。殆ど恐々に書き終つた。爾して顏を揚げた時は全く眞青であつた。長い病氣の後とても斯うまで青くは無い。憂心忡々と云ふのは此樣な狀だらうか。頓て子爵は双方から投票を集めた。自分のと共に三枚。靜に數へて瓜首に渡した

『サア瓜首さん、其處で續上げて下さい。三枚だから。何方か多く成ッて居るのでせう』眞に何方が多く成て居るだらう。梅だらうか。松だらうか。瓜首は命に從ひ。先づ一枚を開いて讀ん

だ『草村松子』と。其聲は靜な室の中へ物凄く響いた。又次のを開て讀だ『草村松子』引續て最後の一枚を又讀だ『草村松子』三枚とも同じ事である

『春川梅子』と云ふのは一枚も無い。此とき。絶も入るかと疑はるゝ泣き聲が葉井田夫人の喉から細く〳〵糸の樣に洩れた。眞に弱々と泣くとは此事だらう。夫人は其身の前に在る小い卓子に全く凭み附き。顏を揚げぬ。唯だ其の背に波の打つのて泣入て居る事が分る。子爵御自身すらも堪へ兼たか。曇らじとすれど曇る聲で『ア、此樣な結果に成らうとは思はなんだ。何も是れほど梅子の方が。松子に劣つて居る譯では無い』と云ふて目を屢叩いた。そゞろ悲さに堪へぬ狀が推量せられる。『けれど何あに』と云て子爵は氣を取直したけれど。何うしても取直し得ぬ狀が。降り落る涙に分ッて居る『けれど何あに。三人の投票が揃ッて。葉井田夫人よ。是ほど目出度い事は無い。アゝ目出度い。目出度い。三人が三人とも投票する此上の無い後取りが藏戸家に出來た。アゝ目出度い』唯だ目出度いと許で。御自分が泣いて居るから葉井田夫人にお泣き成さるな。とも得云はぬ

涙と涙との間に介まり。瓜首は自分の勝利を喜びも得せずに。怪訝な顏て双方を見て居たが。此樣な狀ては何う云ふ事て投票仕直しの議が起らぬにも限らぬと思たか。獨り言て無く誰に向ッ

て云ふても無い中間の語調て『三人が三人とも同じ投票をしたのだから。最う仕直すと云ふ理由は少しも有りません。仕直す理由は少しも有りません』と低く繰返して居る

『誰も投票を仕直すとは云ひません』と云て漸く葉井田夫人は顔を上げた。爾して直に子爵に向ひ猶も咽びの止まらぬ聲て『梅子は今日から私しが養女に貰ひ受けます。私情ても何ても搆ひません。最う私しの娘です』子爵は手巾を取り。俯向いて鼻をかみ其序に目をも拭ふて『私しが悪かッたのです。筆を取る時まて梅子に仕やうと思ッて居て。ツイー』夫人『私しも初から其積て居ましたのにー』と許りて。後は云ずも。瓜首の言葉に制せられたとの意が分ッて居る。ソレ愈よ投票仕直しの議が初り掛けたと。瓜首は又も中間の聲て『投票に書た意思が本統の決心てす。其前の意見に何うてあッても効力は有りません』と言掛たが。其れよりもと氣が附たか『何しろ子爵よ。葉井田夫人よ。一同の意見が揃ひ。是ほどお目出度い事は有りません。早速お歡びを申上げます。藏戸家萬歳。松子嬢萬歳』と唱へた。是れて十々滅を刺した樣な者だ。愈よ事は極ッて了ッた

卅七　親子と云ふ心持

兎も角も極て了ッた。何と悔んても仕方が無い。のみならず又。銘々思ひ〳〵に投票して其結果が合たのだから。何も悔む所は無い。縱し投票の間際まて梅子と思て居たにしても全く瓜首の云ふ通り。投票の表へ書た名前が自分の本統の決心なんだ

葉井田夫人は斯う思ひ直して又子爵に向ッた『イヽエ能く思ふと全く是ほど目出度い事は有りません。三人の投票が松子一人に集ッたとは。其れが何より松子の優ッて居る證據と云もの。若し一票ても違たのが有ては互に後々まて氣まづい思の殘る所てす。私しは眞實に松子の當たのを喜ます』流石に事の分ッた夫人だから一旦の悲しみが通り越せば少しも愚痴らしい所は無い。却て子爵の方が。猶た殘念が納まらぬか。『何うか夫人。梅子の事は總て貴女に願ひます。今思ふと母親も無し。年も松子より下の者を。松子と競爭する樣な地位に立せたのは。私しが悪かッたのてす』夫人『貴方は其樣な事を仰有らずに。早く松子へ此吉報を聞かせ。親子と云ふ心持にお成りなさらねば。イヽエ梅子の事は御心配に及びません』瓜首も最う大丈夫と見た容子て『其れては子爵。早く。松子嬢の爲に——』子爵『松子の爲に遺書を作れと云ふのてせう。無論てす。最う極た以上は何も彼も其通りに運び。養女の披露なども早速に濟せます』

是て相談は盡きた。夫人も瓜首も退いた後に子爵はホッと息した『ウム。梅子へ一票も入らぬ

とは何だか公平を缺た樣な氣もするけれど仕方が無い。實際に當家の相續人にしては松子の方が優て居るのだらう。何も殘念に思ふ事は無い。最う是で重荷が降たのだ』果して重荷が降たのか知らん

此日の夕刻に及んでから帰つた。松子が丁度母夫人の室へ來合せて居る所へ子爵から使が來た。松子に話し度い事が有るから書齋まで寄越して呉れとの頼みを傳へて去つた。母夫人は直に尋常では無いと悟つた。毎もならば直々に松子を呼ぶのに、殊更ら此の母へ。松子を寄越して呉れと云つて來るは事柄が重大な爲に違ひ無い。夫人は松子に慇み附く樣にして『松子。松子。大變な場合ですよ。先刻瓜首と葉井田夫人とが子爵のお居室て三四時間も相談して居た樣だ。常に無く瓜首が私しへ挨拶せずに歸た所など見て。私は色々と推量して居たが。何でも相續の事に違ひ無い。松子。確りしてお呉れ。私しは若し此家から立去らねば成らぬ事にでもなれば全く死て了ひますから』松子『其樣な事を仰有ッたとて仕方が無いでは有りませんか』と云たまゝ子爵の室を指して去た

子爵は疲れた狀が見えるけれど先刻から見れば餘ほど落着て居る。多分は一眠り成さッたのだらう。松子の入來るを見るが否や。全く自分の娘の樣に。懷しげに手を取て『松子さん。先日來

の評議の結果。愈よ貴女を當家の相續人と云ふ事に定ました』流石に驚かぬ譯に行かぬ。松子は『エ』と云て殆ど顏の色を變へた。子爵『其れを和女に言渡す爲めに。呼んだのです。今日と云ふ今日から。貴女は私しの娘。藏戸家の女主人と爲るのですから。何うか其お積りて。私しに安心させて下さい。葉井田夫人も瓜首も皆貴女に贊成し祝詞を述べて退さました』松子は變つた顏色が容易には元に歸らぬ『私しは。此樣な大家を相續するなどゝは夢にも思つた事が有りません。重い責任に堪へられると思ひませんから』子爵『ナニ爾うて有りません。私しも相續人の出來たのを力に。何としても猶だ數年は生存へ。其の中に能く貴女に敎へて上げます』松子は涙こそ流さぬけれど。此の恩に感ぜずに居られやうか『有難う御坐います』と低く云つて子爵の手を取て吻接した。子爵も引寄せて其の前額を啜ッた。是れて親子の誓が成立たのだ。子爵『斯う極れば。是から私しは遺言狀をも認めますから。何か貴女から阿母さんへお話下さい』松子は命を領し。夢中の心地て退いた。爾して再び母夫人の室に入ると。夫人は少しの間だけれど十年も經た樣に待兼て居たが。直に前額を突出して『何うだッた。エ。松子。オヽ和女の顏色は。アレ惡い事なら最う私しへ知せてお呉れて無い。此家から出る樣なら私しは最う死た方が。死た方が——エヽ悔しい梅子に負けたと云ふのだらう。何うせ梅子には葉井田夫人が附て居るから叶はせん。アノ瓜首

も餘り頼み甲斐の無い老ぼれだ』罵ッて止め相にも見えぬ。松子は此言葉て初て自分と梅子と競爭して居た事を思ひ出し。梅子が何の樣に感ずるだらうと怪みつつも『阿母さん。好いか惡いか知りませんけれど。今日から私しを養女にすると子爵から言渡されました』夫人『エ、エ、何だと和女を養女に。藏戸子爵が』松子『ハイ私しを藏戸家の相續人に定め、葉井田夫人も瓜首も祝詞を述て退いたと仰有ました』草村夫人は。本統に氣絶した。折々用ふる氣絶とは違ひ。少しも勉めずに出來た氣絶なんだ。併し此の樣な氣絶なら何度ても仕たいだらう

卅八　御當家の爲に萬歳

『阿母さん。阿母さん。』と松子は。氣絶した母夫人を抱起し『何てすねえ。見とも無いては有りませんか』と殆ど矯める樣に言足した。草村夫人は目を醒した。松子『何うか確りして下さい。葉井田夫人でもお出てに成れば何うします』

眞に母御は力の盡きた狀てある『何と云はれても仕方が無い。私しの今までの心配を察してお呉れ。アヽ餘り安心して。餘り嬉しくて。私しは力も何も無くなりました』云ひつゝヤッと起直り。感心に堪へぬ樣に松子を頭から足の先まて見上げ見下し『オオ。何うしても和女は貴族の家

の主人と爲る樣に生れて居る。私しは乘てから爾う思ッて居た』松子は嬉しくも有るけれど全く極りが惡い『何故先ア貴女は人に聞れて恥かしい樣な事ばかり仰有るてせう。私しに極たとて未だ何うなるか分りはしません。子爵だとて葉井田夫人だとて私しよりも梅子さんの方を可愛がッて居らッしやる事は能く分ッて居ますもの』母夫人『イヽエ可ません。梅子は決して和女ほど賢くは無いのてす。賢い樣に見えても必ず尻尾を出す時が有るだらうと私しは思て居ました。イイ屹度尻尾を出したのてす。爾も無くば葉井田夫人までが和女の方へ贊成する筈は有りません』松子も考へれば考へる丈け。嬉しさが滿て來ると見え。頓て母の傍に据ッても居られぬ樣に立上り『私しは。此樣な事て胸騒ぎなどせぬだらうと。日頃から思て居ましたのに。何だか。動悸が打て參りました』眞に日頃の落着た狀とは違ッて居る。母夫人『動悸ぐらゐは幾等打ても好い本統に仕合せだよ。本統に運が好いよ』

全く此夫人は。今まて人の二倍も三倍も樣々の事を目論んだけれど皆失敗に終ッて來た。總て、自分の遣方の惡いのが失敗の原因だけれと。自分ては爾うは思はず。全く運が惡い。世間が惡い相人が惡いと。此樣にのみ思ひ。人を恨んて居たのだが。今度ばかりは。最初が自分の目論見から出た事て無くて自分の思ふたよりも旨く運んだ『アヽ善人には何うしても善の報が來るのてす

よ』是でも善人だと思て居る、松子は胸を鎮めつゝ『ホンに梅子さんは何うしたてせう』夫人『イヽエ梅子は決して藏戸家の相續人に成られる身ては有りません、女で子爵の位を得るとは、和女の樣な能く出來た婦人で無ければ、エ　梅子は未だ兒供ぢや無いか、是れて最う和女とは一段も二段も位が違ッた、並だとて友達の樣にも見えはしません、今日からは主人とお供との樣な者です、アヽ是と云ふのも全く私しが和女を能く育てゝ置た爲だ、アヽ萬事に氣を附けて育て上げたお影だ、親の有難さが初て分つたよらう、ねえ松子、私しを粗末に思つては成らないよ』言ひ度い熱を吹て居る

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌日の晩である、虎池大佐、丸龜男爵を初め、日頃當家と懇意にする五六の紳士が晩餐に招かれた、是は松子の養女に極た事を取敢へず披露する爲てある、松子は最も草村夫人の子ては無い藏戸子爵の娘である、未來の藏戸家の女主人である、今朝から早や子爵に娘同樣に扱はれ、一家の者から見ても最う主人と云ふ位に登て居る、全く草村夫人の云ふた通りだ、何も自分て主人と爲た積りて無くとも、傍の者が爾うするのだ、客一同の揃て居る所へ、子爵に手を引かれて出て來た、何う見ても姫君の位である、着物も爾う華美ては無いけれど、兼て子爵の手許に用意して

置たので、飾物は昔しから當家の寶物の一つに數られる夜光珠が襟の眞中から垂れて胸に星の樣に輝いて居る、誰が幾等羨んだとて、此の高貴な身姿は子爵家の姫君て無くては出來ぬ

誰れよりも惚々と松子の姿を見て居るは母夫人てある、松子の姿を見ては、チョイチョイと外の人の顔を見る、實に嬉しさの極點と云ふ者てあらう、子爵と松子とが然る可き場所まて進んて出ると、直に立つたのが瓜首てある、彼れは客一同へ對し言葉短に演說した、單に當家の相續人が極りましたと云ふ、披露だけてある、續いて子爵から一同への挨拶も有つた、松子も子爵の目配せに從つて客一同へ禮をした、禮とは唯だ首を垂れて辭誼をする許りだけれど、自ら品格が備つて、如何にも藏戸家の名譽に似合しい立派な相續人てあると、誰からも思はれた

是が濟むと一同は、代る〳〵松子と子爵の前に出て歡びを述ねば成らぬ、誰よりも先に立て走寄つたのが梅子てある、梅子は嬉しさに堪へぬ樣に松子の手を取り『松子さんお目出たう』と云た、其聲にも其容子にも、少しも嫉み羨む狀は無い、爾して松子の顔を見上げ『貴女は立派な方に生れ附て居ッしやるのてすよ、私しは羨むまいと思つても羨ましくなりました』と云て笑つた此樣な清い無邪氣な言葉が、外の人には眞似にも出來ぬ、眞誠に清淨無垢てある、客一同の目には絞る樣に涙が浮んだ、葉井田夫人は堪へ兼ねて退いた、子爵さへも何だか身體が震へる樣に見

えた。梅子は何の事とも知らぬが一同の容子の妙に變ッたに心附き。若しや自分の言葉に粗忽でも有たのかと、葉井田夫人の方を見たが。夫人は居ぬ。止むを得ず。松子の母の傍に走り『私しは何にも惡い事を云たので。有りませんよ』と斷る樣に云ふた。此まゝ置ては肝腎の子爵が泣き出さうも知れぬ。瓜首が直に氣を利かせて。諸君『御當家の爲に萬歳を唱へませう。萬歳。萬歳』と跛を合せた

卅九　晴た空に無數の星が

葉井田夫人も心を取直して出直して來て一同と共に歡びを述べた

誰一人松子の當選を尤もと思はぬは無かッたが又誰一人梅子の落選を怪まぬは無かッた。落選したとて少しも松子に劣る所は見えぬ却つて落選の爲に其の氣質の美しさが引立て能く分ッた。少しも松子を羨む容子も無く。又故と羨まぬ樣に勉めて居る容子も無い。全く羨むの嫉むのと云ふ曲ッた心を持て居ぬのだ。爾して松子の當選を喜ぶ事は誰にも劣らぬ樣に見える。イヤ唯だ草村夫人に劣る許りだ

子爵は無論滿足の體ては有るけれど梅子の此無邪氣な樣を見ては何だか心の底に安じ無い所も

有るのか。今までの樣に充分に梅子の顏を見ると云ふことをせぬ。梅子が子爵の傍に行て歡びを述べた時なども子爵は嬉しげて有たけれど聊か眼を垂れた。外の人々も梅子の方へ餘計に心を取られて居るらしい。松子の顏よりも梅子の顏の方を屢ば見る。中にも虎池大佐は梅子の爲に最も多く涙を浮めた人てあッたが。隣席の丸龜男爵に向ひ小聲て『大分運動の力が有た樣ですねえ』と云て草村夫人に目を注ぐと男爵も其意を悟ッて。我々の打續く不運て分ッて居ます』とて瓜首に目を注いだ。他人は何の事とも知らぬけれど當人同士には分ッて居るらしい。卓子の下て手を握り合ッて意見の合たのを喜んだ

併し晩食も無事に濟だ。勿論無事に濟まぬ筈は無いのだ。一同立上るに至り松子は梅子の傍に行き其手を取た。梅子も嬉しげに手を取られて立上り共に談話室の方へ行きつゝ。松子『私しは貴女が本統に喜んで下さるので。極りが惡い樣に思ひます。誰も私しを祝するよりも貴女に感心して居る樣です』梅子『本統に喜びますとも。其れに先日約束したては有りませんか互に羨んだり嫉んだりせぬ樣にと』梅子の言葉は全く眞面目てある。松子は少し笑ひ『貴女が羨んて下されば。モッと私しは嬉しいかも知れません』梅子『私しは羨ましいと云たては有りませんか。本統ですよ一昨夜も獨りて考へ。若し阿父さんを茲へ迎へ、之が私しの家てす御覽下さいと云ふ事が出來る

様に成たら何れほど嬉しからうと思ひ。葉井田夫人に。何を其樣に考へて居ると問はれました。けれどナニ、私しより貴女の方が此家の相續人に似合しい事は能く知て居ます。其れだから直に思ひ直し。嘘にも此樣な事を考へては、愈よの場合に失望して貴女を恨む樣に成ては成らぬと。自分の心へ意見しました』其時から此家は貴女の物だと私しは心の中で極て居ました』松子は殆ど感激して。決して私しは貴女に勝たいと思たのでは有りませんよ』梅子『其れは分つて居ます。自分で思たとて人の目鏡ですもの――』松子『其代り愈よ私しが相續する時が來れば。貴女の阿父さんを迎へ。兼てお話しの春川繪畫書館と云ふのを建て寄附しますよ。貴女は成る丈け長く此家に居て下さい。ねえ』梅子『子爵が歸れと仰有る迄は。初から居る積ですず。其れに競爭が濟だから又居心が好く成ました。オホヽ』松子『爾う仰有つて下されば私しも心が安まります』

此夜松子は大底梅子とのみ話して居た。葉井田夫人は早く退いた。草村夫人は最う瓜首の機嫌を取る必要も無く成たので。今まで一晩に必ず二三度は發して居た『ねえ博士』と云ふ語も忘れた樣に棄て了ひ子爵にのみ話して居た

夜更けて解散と爲たのち。松子は自分の居室に退いたけれど眠る氣に成らぬ。今まで充分に自分の嬉しさを味ッて見る暇も無かッたが。今初めて暇があつた。獨り二階の廊下に出た。月は

無いけれど晴れた空に。無數の星の燦めいて居るは丁度物など考へるに誂へ向の夜景である。向ふの空に隈を取ッて黑く聳えて見えるのは此家の領地の果である。彼所までも我物になるかと思へば。天に在る星の數々も我領地の物の樣な氣がせられ。胸も胖に心も廣がり。暫しは恍惚として居たが。此領地を誰と共に支配するかと思へば。無論我身の夫たる可き弓澤民雄である。オヽ民雄の事を。早く子爵に打明けねば成らぬ。忘れたとては無いけれど其暇を得なんだが。明日は朝の間に打明けやう。最う母とても異存は無いて有らうけれど。云へば又何の樣に遮られやうも知れぬ。先づ子爵に打明けて母には其後て話せば好い。けれど子爵は何の樣に思はれるて有らう平民主義と云ふ民雄の事だから。或はお獸び成さらぬかも知れぬ。又民雄も此事を聞き。何の樣に思ふだらう。幾等自分の腕一つて身を立るのを理想の樣に思て居ても。眞逆に妻が英國屈指の大金持と爲るを怒りもしまい。但し弓澤と云ふ自分の苗字を捨て。妻の苗字を名乘ると云ふ事に同意を仕て呉れるか知らん。若し子爵の方か民雄の方に故障が有て折合の附かぬ時は何うしやう其時は仕方が無い。此家を捨て民雄に就くのだ。此家を捨るは殘念でも有るけれど。那れほど心の美しい梅子さんに讓るのだと思へば斷念め易い。爾うだ何も最う惑ひ煩らふ事は無いと健げにも思ひ定めた

四十　爲か不爲か

松子の此決心は。松子の好運を羨まぬ梅子の心の淸さに劣るだらうか。否。決して劣りはせぬ梅子ならば知らぬと。外の人には迚も出來るとて無い。若しも松子を梅子の地位に立たせたなら梅子の爲る通りに爲るに違ひ無い。梅子を松子の地に立たせれば又松子の爲る通りに爲るだらう。全く梅松双美と云ふ者て。選ぶに骨の折れたのも無理は無い

此決心に從つて。松子は翌朝子爵の書齋の戸を叩いた。書齋の入口には額が掲て居て。當藏戸家代々が一家の題目と心に念ずる金言を書附てある "I hold what I held" と云ふのだ。『我れは我が有を有とす』と云ふ事て。眞に貴族の高い尊い心掛に叫ふて居る。自分の持て居る者は何所まても持傳へると云ふのだから。先祖に殘された家名へ少しも傷を附けては成らぬ。領地を少しても減しては成らぬ。儀式も格式も。傳はれる儘に守て。流石舊家の面目を少しも落さぬ樣にせねば成らぬ。此樣な心から貴族は總て保守主義に傾くので此一語が保守の大精神を煎じ詰めた者である。松子は此額を見て異樣に心が動いた。若し此言葉に從つて藏戸家の名譽面目を自分の此手て持こたへ。彌輝かせて後の世に傳へる事が出來たなら何て有らう。既に自分の物と極つた以上

は。確かに『我が有』てある。我が物てある。此の『我が有』を何所までも『我が有』とせねば成らぬ。我が物とせねばならぬ此の額が確に爾う敎へて居るのだ

其樣な事は有るまいと思ふけれど若しも民雄の一條を打明けるが爲に。我が有を有とするとの出來ぬ場合にも成れば何う仕やう。額の言葉に負くのだ。イヤ〳〵。藏戸家を相續する許りが我が有と云ふては無い。弓澤民雄も我が有なんだ。我が物なんだ。之を我が有とするのが。本統に此題目の意に叶ふ者か知らんど。何方を考へても道理は有る。聊か茲に至ツて躊躇の氣味を生じたけれど。徒らに惑ひ煩ふ樣な氣質ては無い。戸を開いて中に入た。子爵の前に恭々しく身を卸した

子爵も今は最う。松子を本統の我が娘と思はねば成らぬのだから。充分其氣に成て深い懷しみを催して居る。全く松子の顏を見て嬉しげてある。爾して何を言出す積て來たのだらうと怪み。成る可く言出し易い樣に。笑を浮べて待て居ると。松子は言ひ度げて容易に云はぬ。何所から言出して好いか分らぬのだ。けれど終に言出した『私しは是ほど言にくい事とは思はずに參りましたけれど』と丈て又途絕えた。子爵は何か母夫人の爲め無心にても來たのだらうかと思ふた。成る可く勵す樣に。全く隔ての無い父子の口調と爲て。何も阿父さんに向ひ言ひ憎い事は有りませ

んよ』松子『ハイ。爾は思ふて居ますけれど――篤とお察しを願ッて置かねば成りません。私しは私しはアノ自分の身體が全く自由では無い事を申上げて置き度いのです』自由て無い。とは何の意味だらう。通例何か約束に縛られて居る事を自由て無いと云ふのだが。扨は母夫人に言附ッて來たのては無のか知らん。子爵『其れは阿母さんも御存の事てせう』松子の顔はパッと赤らんだ『ハイ。イヽエ。私しには所天と定ッて居る人が有りますゆゑ』子爵『エ。エ』松子『其れを貴方に申上げねば成らぬと思ひまして。眞に子爵には寢耳に水と云ふ者だ。所天が有る。所天と定ッた人が有る『エ。許婚けが定ッて居ると云ふのてすか』

言出したからは早う度胸が据ッた『ハイ。爾てす。けれど其事は阿母さんより外は誰にも話た事は有りません。子爵は。何と云て。後の言葉を聞かうやら未だ思案が定まらぬ。唯だ有り合せの言葉を以て『梅子にも話しはせぬのてすか』松子『ハイ梅子さんとは何も彼も打明け合ふ程に仕て居ますけれど話しません。貴方には何うしてもお話しせねば成らぬと思ひますから。子爵は最と眞面目に『爾てすとも』松子『其人は弓澤民雄と云ひまして。今は倫敦て辯護士と爲て居ますが』是だけ云へば。多分民雄の此頃の名譽が子爵の耳に入て居やうかと思ッたけれど。無益てある。子爵の耳には。決して松子の耳に響く樣に民雄の名が響ぬ。仕方が無い。悉く云ふて了ふ一方だ

感心に松子は能く述べた。初て民雄に逢た時から。母が立腹した事も。其のち今まて唯だ手紙だけ遣取して。双方の心が少しも替らずに居る事も。有の儘に述て了ッて『私しは民雄の外には決して夫を持ちません。又何の樣な事柄の爲にも民雄との約束を取消す事は出來ません』子爵の顔は淵の深きが如してあふ。唯だ肅然と靜てあッて。贊成だか不贊成だか心の底を現はさぬ

何うやら贊成らしいと松子は思ッた。イヤ爾て無いのか知らん。子爵は同じ靜さの度合て『成るほど。初めて貴女に倫敦て逢た時。貴女の顔には何だか深い所が有る樣に思ひましたが矢張り此事の爲て有ッたのてすね』アヽ愈よ贊成らしいと。少し松子は力を得た『ハイ爾てあッたかも知れません。てすが民雄は此世に二人とは無い人てすもの』子爵は初めて。何うやら眞意を洩す樣な語調て『けれど其の許婚が。貴女の爲か不爲かは分りません』松子の思たより冷かてある。贊成らしく思ふて輝いて居た美しい顔は曇つた

四十一　爾してアノ舊進主義

我が娘には。成る可く當人の氣に合た婿を持せ度いとは。通例親たる者の心てある

子爵も爾は思ふのだ。松子ならば決して末の見込の無い樣な男を夫に持つ筈は無いから唯だ當

人の好みに任せて置て安心だと實は此樣に思ふて居た。けれど辯護士。イヤ辯護士にせよ何にせよ。職業の收入で世を渡る樣な自分の人が當家の婿に成れやうとは思ひも寄らぬ。兎に角當家と畧ぼ似寄た身分の人て無くては成らぬ。爾無くば世の同族から笑はれる。第一當家の面目に關するのだ。『我は我が有を有とす』と云ふ一家傳來の金言は決して其樣な意味では無い

子爵の今の言葉に斯る心が現れたから松子は早や失望して『貴方が贊成して下さるかと思ひました』と聊か恨めしげな言葉を洩した。子爵『贊成の出來る限りは贊成します。併し家柄身柄と云ふ事も考へねば成りません』確に民雄の家柄身柄が低過るとの意を示すのだ。爾して更に『何う有ても其の民雄とやらを捨る事は出來ませんか』松子は確な言葉て『ハイ出來ません』と言切り猶其上に『斯うなると多分相續の事もお考へ直し成さらねば可けまいと思ひますが。爾ならば何うか少しも私しへお氣兼無く爾う仰有て戴きませう』民雄の爲には此家の相續權を捨るも厭はぬとの心が發揮と分ッて居る。

全く子爵は呆れる樣に驚いた。けれど能く松子の氣質を考へると成るほど斯う無くてはなく自分の守る所を變ぜぬと云ふ氣象が有ればこそ當家を相續する事も出來るのだ。子爵は顏に當てゝ考へ。殆ど獨り言の樣に『勿論其樣な事情が有て見れば多少の局面が變じて來ます』

相續の事を考へ直さねば成らぬのか知らんとの氣も動いた。松子『其れに猶だ都合の惡い事が有ります。民雄は自分の苗字を捨て當家の姓を名乘る事を承諾しますか。しませぬか其れも分りませぬ』此一語が子爵の心には異樣に響いた

廣い此英國に。當家より上の貴族ならば兎に角。下の身分の者て。自分の苗字と當家の姓とを取替るのを否と云ふ人が有らうとは思はれぬのに。其れを何うだか分らぬとは何の樣な男だらう。若しも子爵が唯だ感情にのみ走る人ならば此語を聞て多少腹立しく感ずるかも知れぬ。けれど子爵の心には。眞に一家千歲の利害ほど重い者は無い殊には思遣も深くて萬事を極々公平に考へる氣質てある。若しも其れほど氣位の高い男なら。或は又と得難い婿ては無いか知らんとも思ふた。得難い者だけ益す得たいと云ふ心の起るが通例の人情である。何と返辭を仕やうかと稍久しく躊躇した上『貴女は私しへ義理が有ると思ひますか。民雄に義理が有ると思ひますか』松子『其れは兩方へ義理が』子爵『イヤ一方に從はねば成らぬ場合となれば』松子は少しも猶豫せぬ『其れは民雄の方が先ですから。先な方へ從ふが當り前だと思ひます』子爵の目には却て松子の直打が一段も二段も上ッた

松子は。言出した柄には云ふ丈の事を悉く云ふて了はねば成らぬと信じて居る『民雄は乘てか

ら。弓澤と云ふ自分の姓へ。自分の力で光を添へるのを何よりも大事だと心得て居るのです。爾して――』と言ひ掛けたが流石に言兼た樣に口籠つた末、又た思ひ切て『爾してアノ急進主義とか申まして。貴族は嫌ひだと云つて居ます』凡そ英國の貴族に取り急進主義と云ふほど恐ろしく聞ゆる言葉は無い。其れは其筈である。貴族的保守主義に根本から反對するのだもの。子爵は『エ。急進主義』と云たまゝ語が塞がッた。松子『ハイ他日代議士と爲て下院に出て。必ず平民主義の爲に畢生の力を盡すなどと云て居ます』殆ど貴族廢止に盡力すると云ふも同樣である。子爵は漸く落着て『私しはナニ。單に急進主義と聞た丈て躰震をする樣な世間の貴族的守舊家とは意見を同じく仕ませんけれど。兎に角。我は我が有を有とすと云ふ一家の金言を捨る事は出來ません。貴女の云ふ所で察すると。其の弓澤民雄氏には此の金言の如きは何の感じをも起させるに足りますまい。却て可笑しく聞える程てせう』松子『ハイ。爾かも知れません』子爵は熱心に首を突出し『貴女は彼れと許婚の約束をお取り消し成さい。ナニ穩かに。公明正大に。取消す道は私しから瓜首へ相談すれば幾等も有らうと思ひますから。エ。取消す事は出來ませんか。出來るのてせう。爾う成さい』松子『イエ。イエ。イヽエ。私しは命に替ても其れは出來ません』松子の此言葉には少しの裕りも無いと云ふ者だ。

四十二　圓く話が

アヽ『命に替へても』云ふは易くして行ふは難しとは此語てある。併し松子の言切る口調の確な所を見れば。眞に『命』に替てもとの決心が有るらしい。此女なら成るほど此決心を守るかも知れぬと。子爵は感心しつゝ見て取た

併し困ッた次第てある。子爵は當惑に堪へぬ如く頭を垂れ。片手で前額を抑へて居るが頓て『廣い世界て貴女が特に其樣な人を選ぶとは。急進家を選ぶとは――』松子『ハイ急進家を選んだのては無く弓澤民雄を選んだのです。矢張り前々から運が定ッて居たのだと思ひます』子爵『運が定つて居ると云て。貴女は其人の爲なら全く此家を捨てますか。捨るのを厭ひませんか』松子『ハイ。厭はぬと申せば餘り恩知らずの樣に聞えますが。恩を知ぬては有りません。此家を相續すると云ふ事は心底からの願て有りますけれど。民雄の方との約束が先てすから其方へ從はねば成りません』子爵の感心は益す深くなる計りだ。眞に男まさりとは此松子である。斯うも確な心を以て此藏戸家の女主人と爲れば。何れほど立派に一家の名譽を支へて行く事だらう『貴女の言ふ事は最もですけれど。私しに取ては實に不幸です。何うして好いか少しも考へが附きません』子爵は又

思案に沈んで了ッた

松子も思案に呉れて居たが。漸く思附た様に『お願ひてすから。何うか弓澤民雄をお招き成ッて。貴女が直々に當人の氣質など能く御覽下されませんでせうか』子爵は顔を上げて『成るほど其れは。出來ぬ事でも有りません。此場合に及んで兎も角も試み可き手段でせう。けれど私しは何ぢあッても。貴女が弓澤氏に感心する程に感心する事は無からうと思ひます。其れは今からお斷り申して置きます』松子は熱心に『民雄は此方へ來る虎池大佐や丸龜男爵や其他の紳士達とは全く質が違ッて居ます。アノ樣に口輕では有ませんけれど男らしくて。誰にでも感心せられます。多分貴方が。成るほど此男なら好いと仰有ッて下さる事に成らうと思ひます』成るほど是ほど信じて居ればこそ是だけの熱心にも爲れるのだ。子爵『イヤ定めし有爲の男子だらうとは。先刻から貴女のお言葉を聞て。思ッて居ますが。併し一つ何うしても感心の出來まいと思ふ所が有ります。其れは其の急進主義です』松子『でも民雄の口から政治論を聞きますと。急進主義ほど好い者は無い樣に感ぜられます。少しも世間の人の恐れる樣な其樣な急進主義ではありません』子爵は當惑の中で聊か笑を催ほした『私しをまで急進主義に改宗させるのでせうか』

『イヽエ。爾でも有りませんけれど、日頃から自分で。道理ある言葉には。何れほど辛くても從

はねば成らぬと云て居ますから若し貴方のお言葉が御尤なら民雄の方が改宗するかも知れません。決して人情を知らぬ樣な荒々しい氣質では有りませんから。お逢ひ下されば何とか貴方と民雄との間で圓く話が收まらうと思ひます』實に尤もな考へである。確に。女ながらも大家を治める丈の思慮に富て居ると子爵は又感心の度を深くしつゝ『兎に角私しは一應考へて。其上で。招くか招かぬか貴女へお返事致しませう。其れに就ては貴女の阿母さんへも一應相談しませねば』

母へ若し相談せば母が何れほどか民雄を惡く云ふ事だらうと松子は聊か心配した。けれど當然の事である『イヽ何うか爾う願ひます。けれど母は又た。世の中に民雄ほど憎い男は無い樣に思つて居ますから。何うか孰れにしても貴方が直々に本人を御覽下さる樣に願ひます』子爵『ハイ兎に角も母御にお目に掛た上て定めませう』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

松子が退くと同時に母草村夫人の許へ子爵から迎の使が行た。夫人は何用だらうと怪んだけれど。松子が話に來ぬのだから見當が附かぬ。勿論民雄の事などとは思ひも寄らぬ。何方にしても最う惡い相談の有る筈は無いのだから。事に依ると此身へ特別に隱居料を呉れると云ふ相談か知らん。爾だ何事にも能く行き屆く子爵だから。年々幾等々々の手當て老先を氣樂に送ッて呉れと。

アヽ全く其れに違ひ無い。成るほど此問題が猶だ殘て居ると知れば引續いて瓜首の機嫌を取て置かねば成らぬ所で有ッた。けれどナニ最う極ッた者なら仕方が無い。併し餘り喜でお受けするも可笑いから一應は辭退せねば萬事と釣合が取れぬなど。何事も取越して其れから其れと細かに考へる日頃の癖で。此癖が何時も失望の元に成るのだけれど自分では爾は思はぬ。是れが掛引の上手と云ふ者で自分の身上だと心得て居る。先づ一切の思案が定ッて。子爵の居室には入ッた

四十三　只驚きに驚いて

隱居料にても有附く事かと自分から取越して子爵の室に入た草村夫人に。子爵の第一の言葉は『貴女は弓澤民雄と云ふ人の人柄を御存でせうねえ』との問であッた

夫人は直に悟ッた。悟らざるを得ん。確に松子が此母を出抜て民雄の事を子爵に打明けて了ッたのだ『アレ松子が。民雄の事を貴方のお耳に入れるとは餘り甚いです。母に對して不孝です。何うか其事はお聞き成さらなんだお積りてお忘れ下さい。お揉消し成ッて下さい』是では返事に爲て居ぬ。けれど夫人は返辭に爲るか爲らぬかを考へる暇は無い。餘り困た問題だから只驚きに驚いて。只戸惑に戸惑ふたのだ。爾で有らうよ隱居料に有附くのと娘がヤッと得た大身代の相續

權を棒に振るのとは。餘り違ひ方が激しいから

子爵は少し笑つた『イヤ揉消すにも揉消されませんよ。松子さんが堅い許婚の約束が有て。取消す事が出來ぬと云ふのですから』夫人は血相を變へた『エ。松子が。其樣な事を云ひましたか。許婚などと。親の許さぬ約束が何て許婚でせう。其樣な約束を松子が覺えて居る筈は有りません』子爵『覺えて居ますにも。死だとて負かぬと云て居ます。けれどナニ。其れは第二として。民雄とやらの人物は何の樣です』夫人の返事は明白だ『私しは大嫌ひです』子爵は又笑んだ『貴方が大嫌ひと丈では分りませんが。何の樣な人ですか』夫人『何の樣にも此樣にもお話には成りません。私しの娘を盗みに掛る程ですもの。先づ盗坊です』唯だ民雄を罵りさへすれば好のかと心得て居る其れのみて無い。眞實憎さに堪へぬのだ。若しや娘の相續權にまで故障が出てはせぬかと思ふと。彼れの肉を食ふても足らぬ氣がする

『併し惡人ては無いのでせう。先づ詳しくお聞せ下さい。辯護士だとか云ひますが』夫人『ヘン辯護士。看板を掛けた丈て一人の依頼人の無いのを辯護士と云はれるなら。其れならば辯護士てせう。彼れは一度の辯護した事の無い中から辯護士だと云て居ます。其癖。横柄な事と云たら宛て貴族か何ぞの樣です。私しの許へ松子を貰ひに來た時なども。何だか己が貰ッて遣るぞと恩に着せ

る様な調子で。私しが矯めて遣たら立腹しました。何うてせう人の娘の心を奪ひ爾して咎められたとて怒る奴が有りませうか。本統に失敬な男ですよ』殆ど三文の直打も無い様に聞えるけれど。何だか子爵は見込の有る青年の様に感じた。貴族の様に横柄だなどと云ふ所が却て氣に入た。日頃此子爵の意見では。『男と云ふ者は爾う人に低頭平身する者で無い。人の機嫌を取る様な奴は。何所か自分の心に弱い所が有るので。詰り人から惠みを受け度いと云ふ活地の無い氣が腹の底に潜んで居るのだ。何でも人は自分の腕で自分に仕出すと云ふ獨立心が無くては可けぬと。御自分の腕で數代前から傾きかけて居る一家の財政を取直した丈け。イヤ取直して猶だ其上に盛立てた丈け甚く人に頼らぬと云ふ氣象に重きを置いて居る』成るほど分りました。其の氣象の張て居る所を松子さんが愛するのでせう』

『エ。愛する。松子が愛する。エ子爵。松子は今でも那の様な者を愛して居ると申しましたか』何でも彼でも松子が民雄を愛して居る様に子爵から思はれては大變だと夫人は堅く信じて居る。子爵『ハイ愛して居ますにも――』夫人『イヽエ爾ては有りますまい。唯だ正直一圖の心で。愛は最う失せたけれど一旦の約束だから守らぬば成らぬと思て居るのてせう。ハイ正直な事だけは感心てすよ。私しが殿重に育てた者てすから。正直と云ふ事は全く能く私しに似て居ます』斯うも云

へば娘の直打が上るかと思て居る。此の『私し』に似られて耐るものか。子爵『愛して居ますにも。私しから民雄と此身代と兩方を取事は出來ぬから。何方かを選べと云ひましたら松子さんは。其れならば身代を捨てゝ愛を選ぶと云ふ樣にお返辭てした』身代を捨てゝ愛。藏戸家を捨てゝ民雄。榮爵を捨てゝ平民。榮華を捨てゝ貧乏。貴族を捨てゝ辯護士。幾等繰返して驚いても同じ事だ。夫人は全く悲鳴の聲を發した。眞に何れほどか辛く且當惑に感じたどらう。子爵は柔かな調子で。『其れに松子さんが言ますには。民雄は貴族に反對して平民主義を主張する急進黨の意見では有るし。自分の苗字を捨てゝ藏戸家の姓を名乘るなどと云ふ條件には從は無いだらうと云ふ事でした』夫人は俄破と卓子に蹙み附いた。爾して泣いた『エ。悔しい。悔しい。私しは何だとて自分の娘に此樣に窘められるのてせう。何も折角向て來た此幸福と此名譽とを捨ねば成らぬ樣な惡い事をした覺えは有りません。何だとて。何だとて。此樣な辛い目に――』後は咽びに聞きも分けられ無くなつた。是れは全くの眞情である。餘りの事に泣く外は無い事に成たのだ

四十四　兩爲の計ひ

眞に身も世も有られぬ樣に泣くので。流石に子爵も氣の毒になッた。出來る丈の我慢は仕て。

此夫人にも松子にも兩爲と云ふ樣に計らひ度い

子爵は夫人の泣聲の稍や鎭るを待て『併し夫人。貴女は非常に仕合せと思はねば成りません。松子の那の氣象は世に又と無い寶です』夫人は顏を上げたが。悔しげな腹立しい色は失せぬ『親に不幸な那の氣象が何て寶です』子爵『昔から烈女とか貞女とか。歷史の上にまで名を留めるのは皆那の通りの氣象です。愛と云ひ義務と云ふ一念で。何の樣な利害や苦勞にも心が迷はず。是で無ければ眞の女では有りません』夫人は實に意外に感じた。何うやら子爵の言葉には猶だ脈も有るかの樣な所も有る。夫人『では松子をお咎め成されはせぬのですか』子爵『ハイ。却て私しの松子さんに對する尊敬は百倍も增しました。けれど何しろ遺憾なのは。其の民雄と云ふのが迚も私しと調和の出來相に思はれませんから』

夫人は全く猶だ脈が有ると見た。此容子なら有るも有るも大有りだ何でも子爵が一歩でも此上の思案を定めぬ中に何とか運動せねば成らぬと。非常の場合だけに非常な決心と勇氣とを起し『子爵。子爵。何うか孰れとも御決心を爲さらずに。暫く私しにお任を下さい。何とか私しが松子を說きますから。叱りますから。諭しますから』仲々念が入て居る。子爵『イヤ貴女が何とお諭し成つても。今更ら松子さんに其民雄を捨させると云ふ事は。其れは到底出來ますまい。其れより

も私しは。兎に角弓澤民雄と云ふのを此家へ招て逢て見やうかと思ひます。若し民雄が眞に人物で。私しと調和する事が出來たなら。何事も圓く治まる譯ですから。爾てす民雄の人と爲りを能く究めずに心配するのは順序が問違て居るだらうと思ひます』

何たる寬大な有難い言葉だらう。けれど草村夫人は思ひ込で居る。迚も民雄と此子爵と調和する事は出來ぬ。民雄と云ふ奴は那の樣な失敬な。憎らしい。橫柄な男だものと。自分の憎い奴は誰にも憎い者と思ひ。何うしても松子を思直させる外は無いとの決心が愈よ强くなる許りである

『何うか子爵。少しの間。御決心を爲さらずに私しへお任せ上さい。イヽエ松子が承知せぬと云ふ筈は有りません』と吳々も子爵に請ひ子爵が『ハイ其れならば一切の決定をば。貴女からお返事の有るまで待ちませう』と答へた

何でも松子を說伏せねば成らぬと大決心を以て子爵の前から退いたが。併し能く考へて見ると今まで松子に。民雄を思切せやうとした事は幾度てあるかも知れぬ。其の度に松子が毛ほども屈せなんだ事を思ふと。何やら覺束なく成て。大決心も搖ぐ樣だ。之を搖がせては成らぬと自分の氣を引緊めて。尋ねて行くと松子は緣側の所で梅子と連立ち。是から氷滑りに出掛けやうと云ふ所である

此時は二月の初で、眞冬の寒い盛なんだ　鐵裏の狹い長い舟底の靴を穿て、池の氷の上に滑る事は、英國人が男女とも、寒中第一の戸外遊戯と樂む所で、今しも梅子の方が自分で池の氷を檢めて來て是から兩人で出直すのである、婦人の中には隨分、外の寒い風に吹かれると顏の色艶が惡く荒びる質も有るけれど梅子は爾て無い、寒さにも暑さにも、何う異ても益す美しく見える許り、眞に天性の美人に生れ出て居るのだらう、白い頰、眞中の當りにポッと薄紅を指した樣に赤らんだ狀などは活畫とも云ひ度い程で、流石の草村夫人も此時ばかりは我が娘より美しいと、早や嫉みの樣な心が出た、爾して其心と共に三樣の考へを起した其一は唯此女が松子の大敵である是さへ無くば、松子に多少は無理が會ッても此家の相續權を取逃ずと云ふ事は無からうけれど唯だ此女の有る計りて心配が增して來るのだ、其二は松子が此女と共に氷滑りに行くのは非常な重見違ひてある、若し突落されたなら何うするか、其三は寧そ自分が氷滑りに行て、此女を突落して遣らうか知らん、と云ふのてあつた

隨分其三をさへ行ひ兼ねぬで有らうけれど眞逆に決心と云ふ程には至らず『梅子さん今朝は貴女お一人て滑つてお出で成さい松子には一時間ほど私しが用事が有りますから』と體よく言て松子を招き自分の室へ連て入つた

爾して何の樣な事を云たかは詳しく記す迄も無い、無論泣くのと威すのと哀訴嘆願するとの三の道具を、手品師の樣に使ひ分たけれど、其功能の無かつたのは、夫人が其まゝ病氣になり、子爲の許へお返辭に出る事の出來なんだのて分つて居る、其上に最一の大不幸は獨り池へ行た梅子が、氷の薄い所とも知らず、踏込んて池の底へ落入つたなどと云ふ間違も何にも無しに、無事に池から歸て來た事て有た、爾も無くば夫人の病氣は餘ほど輕くなッたかも知れぬ

松子が母への返辭は『若し阿母さんが其樣に仰有るなら、直に子爲へ相續の事を斷り、梅子さんを代りに直して、私しは民雄さんの所へ逃て行きます』と云ふのて有ッた、是ばかりは威かして無い、本統に爾うする決心が見えて居たから、夫人の方が折れて了ッた

子爲は愈よ決心して此翌日弓澤民雄へ招待の手紙を出した、何しろ松子が是ほどに見込だ男だから、遂て見ると夫人の云ふ樣で無く意外に譯の分ッた男かも知れぬ、果して本統に譯の分ッた男ならば、よもや自分の妻と爲る者へ、英國中て屈指と云はれる大身代の相續權を捨させる樣な其樣な邪慳な事はせぬのだらう、大抵の事は双方て我慢して折合が附き相な者だと子爲は此樣にも信じて居る

四十五　是も仕合であッた

弓澤民雄へ招待の手紙を出すと共に。子爵は猶ほ瓜首に命じ倫敦の同業者へ民雄の事を聞合させた。孰れの返辭も立派である民雄を褒めぬのは一個も無い

殊に民雄が。此頃法延で一方ならぬ手際を現し。早や既に若手辯護士中の第一に推され。上流社會からも一方ならず尊敬を受け初めて居る事さへ分ッた。決して草村夫人の云ふた樣な『一度も辯護をした事の無い辯護士』で無い

子爵は何だか懷しい樣にも思ふた。凡そ此子爵が世に第一の寶とするは藏戸家と云ふ我が家名で第二は人物である。御自分が自分の力のみを以て此藏戸家を盛返した丈に。如何ほど家名の盛衰が人物に依るかを知て居る。人物を得ねば盛な家も衰へ。人物を得れば衰へた家も盛になるのだ。家名を大事に思ふだけ益す人物を大事に思ふ

殆ど子爵は氣遣ふた『何うか民雄と折合ふ事が出來れば好い』と。爾して又思ふた『松子の直打は相續人と定ッて以來。一段上ッた。通例ならば前よりも疵の出る者であるのに。疵が出ずに直打の出るのは。全く心底から疵が無いのだ。若しも此で折合ふ事が出來れば。唯だ一舉て娘を

得た上に婿までも得るのだから。全く梅子に極めずして此松子に極めた方が幸ひて有ッた』と。實の所子爵は。今までも梅子に未練が殘り。何だか惜い樣に思ひ。殊に梅子が少しも松子に對して嫉妬の心など起さぬを見れば。可愛さの增すのみて有ッたが。今は早う分別が定ッた。若し梅子にしたならば。梅子が何の樣な夫を持つ事に成らうも知れず。其時に二度の心配をする所だッたが。松子には其れが無い。既に夫は民雄と定ッて居る丈に。又民雄が人物と定ッて居る丈に唯だ此身と折合さへせば其れて好いのだ。投票が仕合せて有ッた。何うか折合ふ樣にしたい

若し折合ふ事が出來ぬなら。其時は梅子にする。矢張り候補者が二人有たが是も仕合せて有ッた

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

招待狀の着た時。民雄は爾まて驚かなんだ。既に松子から幾度か手紙を得て。大凡を察して居た。けれだ行かうか斷らうかと思案はした。唯だ松子からも一緒に手紙が來て。是非來る樣にと有たので。何方かと云へば松子の顏を見るのが重大な事件の樣に思はれて行く氣に成ッた

勿論誰が見ても男の中の男だから。子爵家に着くが否や。何の方面からも好意を得た。唯だ草村夫人だけが非常に恐い目をした丈て有ッた。子爵との眞面目な話は。着た翌日から。毎日二時

間ほど三日に渉ッた。之は子爵が一日二時間より上、頭を使ふ事は醫師から許されぬ爲てある。見る度に子爵も民雄を尊敬する念が増した。子爵は民雄を平民社會の貴族だと思へば。民雄は子爵を貴族の中の平民だと思ッた。全く子爵は貴族ながらも平民以上てある。其の一家を盛返した艱難と勇氣とは無一物から立身した平民の英雄にも劣らぬ

けれど話は肝腎の所で合はなんだ。容易には合はなんだ。民雄は云ふた『私しは若し軍人に成れば。大將まて登らねば承知しません。政治界へ入れば總理大臣に成らねば止めません』と。此氣象が益す子爵の氣に入た。又云ふた『私しは此の弓澤と云ふ性が實に惜くて成りません』と。是ては幾等尊敬し合ても纏りは附かぬ。けれど痛く民雄を弱らせた事が一つ有る。其れは自分の妻たる者の身に降て來た幸福をば夫たる可き者が。我が意地の爲に捨させて濟むだらうかとの懸念であつた

此懸念だけならば併し。未だ民雄を壓へ附けるには足らなんだが。兎も角もと松子へ相談して見ると。松子は決して其樣な氣兼をして下さるなと云ひ。又民雄の自分の苗字を惜むのを甚く賛成した上に云た『私しは男が羨しいと思ひます。女ては何うしても自分の苗字を大事にする事が出來ませんから』民雄は其意を解し兼て『何故てす』松子『何故とても。何れほど大事と思ふ苗

字ても捨てゝ夫の苗字を名乘らねば成らぬては有りませんか』之別に深い意味が有て云ふた譯ては無いが民雄の心には深く徹へた。成るほど爾だ。此身は自分の姓を棄て松子の姓を名乘るのを拒むけれど。松子には其身の姓を捨させて此身の姓を名乘らせるのだ。是が公平な量見だらうか

彼れは或意味に於て男女の同權なる可きを信じて居る。又彼れは『公平』と云ふ事を一つの義務と信じて居る。人の苗字に從ふ事は何うあッても承知せず。人を我が苗字に從はせるには幾百萬の身代を捨させても構はぬだらうか。是れが公平と云ふ者だらうか

何うも『否』と云ふ外は無い。翌日子爵に逢たとき子爵は云ふた『弓澤さん。貴方は妻が大身代を持て居るのを何だか夫たる者の耻の樣に御思ひの容子てすが。此身代を其れほど大いと思ひますか。私しが貴方なら。ナニ妻に二倍や三倍する身代は今に作ると云ふ考へを起します』民雄は全く爾う思ふた。成るほど妻の身代を甚く大い樣に感ずるは。餘り活智が無い。妻の身代を此身の刺激と感じ一層上の奮發を起すのが眞の男子だと

幸ひ英國には二個の姓を合せて一個にする習慣がある。例へば父方の姓と母方の姓とを繋ぎ合せるのだ。其の例に從つて『弓澤藏戸』と名乘れば好いと。到頭双方の中間て子爵と民雄と折合

ふ事に成ッた。純粋の藏戸の姓は妻が名乘り、子爵の爵位も妻が嗣ぐのだ。自分は子爵への尊敬の爲め、妻への公平の爲め、又自個の奮發の爲め、我が意地を犧牲にするのだ。人間は人の爲に犧牲に爲ると云ふ事は喜ばねば眞成の人間で無いとの意見が日頃から民雄の胸中に横はつて居た

併し此折合は何よりも彼よりも子爵其人の人物品性が高つた爲である。全く民雄は子爵を尊敬す可き人と感じ。其人の嘆きと心配とを、何うかして弛めて遣らねば、成らぬ、と云ふ氣が起きた。兎も角も先は目出度い。是て草村夫人も、早う『一度も辯護をせぬ辯護士』を恨むに及ばぬ事とは爲つた

四十六　産むが易い

案ずるより産むが易い。先づ子爵と民雄との間に話が附た。草村夫人も民雄を憎まぬ事に成た民雄の評判は仲々好い

梅子までも民雄が藏戸子爵夫人の夫として適當の人物である事は認めて居るらしい或時松子が問ふた『梅子さん。貴女は民雄さんを何の樣にお思ひです』梅子は笑ッた『私しにまで褒めさせ度いとお思ひですか』松子『イエ爾ては有りません。惡い所が有れば。惡い所が有ると云て頂き度

いのです』とは云ふけれど矢張り褒めて貰ひ度いには違ひ無い。梅子は餘ほど眞面目に考へて『爾てすねえ。私しの父が男子美とか云て賞美する容貌とは違ひますけれど。茲へ來るお客の中では一番立派な方だと思ひます。本統に貴女はお仕合せですよ』松子『爾です。私しも仕合せだとは思ひます。けれど貴女の父上の云ふ男子美とは何の樣なのです』梅子は『丁度アノ』と云ひ掛て口を緘んだ。松子は攻める樣に『オヤ丁度アノては分らぬては有りませんか。丁度アノ何方の樣です』梅子の顏は聊か當惑げに紅んだ。松子『仰有らぬは猶ほ可笑いですよ。丁度アノ何方ですか』梅子『でも云へば笑ひますもの。先日も葉井田夫人に笑はれました』松子『云はねば猶ほ笑ひますよ』とて笑へば梅子も亦笑ひつゝ『其れては』とて松子の耳に口を寄せ何やらん細語いた。松子は又一入笑つて『オヤ貴女は肖像繪に成て居る次郎さんに』梅子『イヽエ父の男子美と云ふのが丁度那の方の樣な繪なんですよ』何たる親しい狀だらう。先ほどから室の一方て此樣を。見るとも無く見て居たのは草村夫人てある。夫人は梅子と松子との親密なのが氣に入らぬ。眞逆に嫉妬と云ふても有るまいけれど。最う確に自信して居る。梅子と松子とは全く身分が違ふ事に成たのだから爾う友達の樣に親しくさせては可けないと

若し梅子が侍婢か何ぞの樣に。謙くだッて松子に仕へたなら。其れなら草村夫人は喜ぶかも知

れぬ。イヤ實は其れても喜びはせぬ。此夫人の唯だ梅子を嫌ふのは同うも梅子の清い愛らしい狀である。何だか誰の顏を見ても梅子に同情を寄せて居る樣に見え。殊に葉井田夫人などは梅子を我が娘の樣に傷はり。其上に子爵自らさへ充分梅子を可哀相に思て居る狀が見える。此まゝで若し梅子を此家に置けば。何う云ふ表裏て子爵の心が飜へり又も梅子を養女などゝ言出さぬとも限らぬ。丁度梅子を此家に置くは娘の爲に大敵を養ッて置く樣な者てあると。此樣に思ひ詰めて居る

ひとい奴だなよ。　あきれたよ。　憎ッてしまう

今も梅子が松子に細語いた狀を見て。ッと立て玆へ來た。爾して二人の仲へ。割る樣に座を占めた。是れて話は止んて了ッた。此の翌日又も夫人の氣に障ッた事がある。其れは單に松子と民雄とが梅子の噂をして居たに過ぎぬ。けれど夫人に取ては大事件である。不思議に又。誰と誰との話でも此夫人の耳には必ず入る。本統に閻魔の耳の樣な耳だ。話の起りは分らぬが。何でも松子の問に答へる爲らしい。民雄は熱心に梅子を褒めて『何うして倫敦などに那の樣な清い令嬢が有りますものか。子爵も話の後ては屹と梅子さんの事を褒めますよ』夫人の耳には是だけで澤山てある。最う何うしても梅子を此家から追拂はねば成らぬと決した

直に葉井田夫人の室へ行た。最う全く激戸子爵令嬢の母と云ふ見脈が備ッて居る。けれど爾う

脛附けがましくは眞逆に葉井田夫人へ言へぬから旨く言葉を廻し『私しは梅子さんの父上が。最う嘸ぞかし淋しからうと思ひますよ。其れを吾々が思ひ遣らぬのは餘り氣が附かぬ樣に見えはせぬてせうか』何たる婉曲な言葉だらう。併し婉曲の中に早や『吾々』と云ふ言葉を加へ。自分をも葉井田夫人と同等に此家の主人株へ加へて有る。葉井田夫人は誰の何の樣な言葉を聞ても決して惡い方へは取らずに好い方へ合點して了ふ氣質だ『ハイ私しも爾う思ひ。先頃も招待狀を出しましたけれど。來やうと云はぬのです。最う一度手紙を出して見ませう。二度もお招き申せば幾等梅子の云ふ樣に繪の事にのみ夢中でも。お出て成さるかも知れません』お出で成さられて耐る者か。夫人は少し遽てゝ『爾でしたねえ。繪の事にのみ夢中で。人が招待狀など送ると腹を立て其方を恨む程だと爾う〳〵梅子さんが先日も云て居ました。矢張り招待狀などは出さずに。御自分が愈よ淋しく爲て。出て來る氣になる迄。此まゝ置く外は有りませんねえ』と招待狀の豫防線だけを張て切上げた。併し是れだけ云ふて置けば。又折の有た時。梅子を返す論を主張する下地には成る

けれど仲々折の有るまて待て居る夫人て無い。其れに爾う氣永くは待たれぬと信じて居る。直に其足て梅子の室へ行き。ツイ通り掛ッた風て中を覗くと。梅子は獨りて景色の畫を描て居る。

夫人は何氣無く入つて『私しは昨夜。貴方の阿父さんに大層恨みを云はれた夢を見ましたよ』一度も逢つた事の無い人を何て夢になど見る者か。けれど梅子は爾は思はぬ『アレ。私しは毎晩の樣に父の夢を見るのですよ』夫人『其れにしては貴女は餘まり不孝過るては有りませんか。何故早く娘を返して呉れぬとて其れは其れは昨夜のお恨みは大變でした』梅子は絶て悲しげに見えた事の無い顔を聊か曇らせ『手紙は月曜日と木曜日に屹と出して居ますけれど開封も成さらぬだらうと思ひます』夫人『其れなら一度歸て安心させてお上げ成さるのが娘の道ですよ』梅子『でも子爵が此方から歸れと云ふまて逗留せよと初からのお言附てすもの。父も其積て』夫人は呆れる樣に打笑ひ『アレ梅子さんは大統に正直だよ。子爵の御用は最う濟だては有りませんか』成るほど濟んだ。松子さんが相續人と定ッた以上は最う御用は無いのか知らん。今まて何敢其樣な所に氣が附かなんだらうと梅子は自分て怪んだ。其色を夫人は見て取り『眞逆に子爵の方から。サア用が濟だから最う歸れとは云はれぬては有りませんか。此子の樣な正直な子をお客に招いたら主人は事てす』と云つて宛も親しげに又笑談の樣に旨く打笑ふは。流石に多年練磨した口先である。梅子は初て氣が附て極りの悪い樣に『ては葉井田夫人に問ふて見ませうか』とて早や立掛けた、夫人『アレ葉井田夫人に。歸らうかなどゝ聞けば。引留めて下さいと持掛ける樣に聞えるては有りま

せんか。貴女の一存て取極て。イヽエ其れは向ふは挨拶ですから何時までも逗留せよと引留るに極て居ますから。何と引留られても。言出した上は最う留らぬ事にせねば貴女が笑はれますよ』梅子は涙を浮べた『ては爾う致しませう。私しは阿母さんが無い者てすから世間へ出ると人に笑はれる樣な事ばかりして居ます』夫人『だから私しが可哀相に思ひ氣を附けて上げるのてす』とは何の口から出る言葉だらう。爾して猶ほ釘を打つ樣に『實を云ふと。貴女が餘り此樣な所へ氣が附かぬから。私しは見るに見兼て居たのてすよ』と捻の戻らぬ樣に言足した

四十七　意外なる報知

梅子は全く故郷へ歸る氣に成つた。草村夫人に云はれた事を考へて見ると何うしても歸る外は無い

成るほど今日が日まで一言も『歸る』と云ふ事を言出さなんだのは自分の落度てあつた。何て氣が附なんだらう。定めし草村夫人も笑ふて居られる事だらうと。是ほどにまて思ひ詰めたが併し根が利發な質だから又氣が附た。眞に歸る可き場合なら子爵でも葉井田夫人でも此身へ向て『最う歸れ』と云て下さるに氣兼は無い。此身を娘も同樣に。信切にして下さる方が。爾う他人らし

く成さらうとも思れぬ。何事でも今まで葉井田夫人に相談したのだから。是も相談するが好らう。相談して草村夫人の云た樣に笑はれたとて仕方が無い。葉井田夫人に笑はれるのは少しも搏はぬ。爾うせねば何うも氣が濟まぬと。心を取直して直に葉井田夫人の許へ行き。爾して云ふた『私しは阿父さんの事が氣に掛りますから。最う御用が濟みましたら。歸らうかと思ひますが』葉井田夫人は冗談と思た容子て。唯だ打笑ッて『未だ御用が濟みません』と答へた。梅子『アレ本統てすよ。阿父さんが餘まり長く一人てすから』夫人『阿父さんの許へは子爵から此家の老女を附け。御不自由て無い樣にはして有るけれど。貴女が歸り度く思ふは尤もてす』梅子『ては歸して下さいますか』葉井田夫人『歸す時には私しが一緒に送て行きます』梅子は嬉しげに『本統に送ッて下されますか。其れは何時』夫人は又笑ひつ『時は未だ極りません。極れば私しから爾う云ひます。其時には送て行て爾して又阿父さんも一緒に迎へて來ます』此一語に葉井田夫人が梅子を自分の相續人にすると云ふ樣な心が籠て居る。けれど梅子は爾は思はぬ。唯だ夫人の送て呉れると云はれるのが嬉しい。兎も角も相談して先づ好かッたと心の輕く成た樣に感じ。今度は更に草村夫人の處へ行き『葉井田夫人に申ましたら。夫人が私しを送て遣ると仰有いました』と告た。夫人は不興な顏て『其れは何時てす。明日てすか。明後日てすか』梅子『其の日も葉井田夫人が定めて下さる

と云ふ事です』夫人は呆れた樣に『アレ貴からら日を極めねば可けぬては有りませんか。其れだから私しが氣を附けて上げたのです』梅子『ても葉井田夫人が餘まり御信切にして下さるから。何事も夫人の仰有る通りにせねば成りません』夫人は捨言葉の樣に『本統に貴女は氣が利かぬよ』と云た。けれど其實自分の思たより物事を心得て居ると。感心もし腹立しくも感じた

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此翌日の朝。草村夫人は。室の中に瞑ッて居る姿鏡に向ひ。自分の顏を照して見た。是は每朝する事であるが。氣の所爲か眉宇の間に確な決心の有る相が現れて居る樣に思つた『矢張り此顏は昔から云ふ烈女とか賢婦人とか云はれる人相だ。其れだから松子が那の樣に賢くて爾して確なのだ。最う何の樣な事が有たとて。爾うだ縱し梅子が當分立ち去らぬにしたとて。ナニ氣遣ふ事が有る者か。茲まて漕ぎ附けたのだもの。決して向いた運を逃がしなどする樣な愚かな人相では無い。勝軍と成れば何所までも勝果せねば』と呟いた。自分で自分の人相などを頼むは。餘り愚かて無い方ては無いなうだ

爾して一通りの身仕舞をして廊下へ出ると春の日が麗かに庭の景色を照して。少し天然を賞美する心の有る人ならば。去りも得ぬ程の光景である。併し此夫人の目には花や木や草などよりも

金貨一枚の色が餘ほど美しく見えるのだ。一寸振向て見は見たけれど、佇立みもせず其まゝ下の廣間へ降りて行くと、一方の卓子に今來た許りの倫敦タイムスと云ふ新聞が載て居る、夫人は其所へ行き手に取て、先づ流行社會の人々に關する記事などを讀んだが、別に氣に留る程の事も無い、次に電報欄を見ると『意外なる報知』と題した一項がある、何故だか此表題が強く神經に障ッた、夫人は目を皿の様にして讀下た『昨年の六月廿七日愛蘭近海にて沈沒したる汽船プリンス號の乘客にて溺死者に數へられたる人の中、一兩名帆前船ヴイクトル號に救ひ上られたるやの説あり、此船は南洋ニユジーランドへ向け航海の途に在りて、何所へも寄港せざりし爲め、其事は今日まで世に傳はらざりしなり、併し其の救ひ上げられし一兩名とは何人にや、遺族たる人々は此報に接し、徒らに空望を起して再び失望せざらん心掛けこそ肝要なれ、多分次號には詳細を報じ得る運びに至る可し云々』讀終ッて草村夫人は殆ど昨年藏戸子爵がプリンス號沈沒の報を讀みて驚いたと同様に驚いた、若しや、若しや、此の一兩名と云ふ中に、若しや、若しや

四十八　非道と云ふ者だ

若しや、若しや、若しや助ッたと云ふ船客の中に、當家の子息が居は仕まいか、草村夫人は不

安心に堪へぬ如く、身躰を戰々と震はせて、二度も三度も新聞を讀直した

眞逆に神が爾までは無慈悲て無いだらう此家の息子を助けるなどゝは餘り邪慳過ぎる、胴慾と云ふ者だ、非道と云ふ者だ、其れては神て無い惡魔だ

何たる得手勝手な考へだらう、夫人の心中には唯だ自分と云ふ一念より外は何も無い、何ても自分の身に都合の惡い事ならば總て非道だ、總て惡魔だ、此家の息子が助ッて居たならば子爵が何の樣にか喜ぶだらうなど云ふ思遣りは毛ほども浮ばぬ、唯だ自分の身が大事だ、何うやら斯やら藏戸子爵令嬢の母君と云ふ位地まて漕附けた今と爲て此家の天然の相續人に現れ出られて耐る者か

唯だ一圖に思ひ詰めて、松子の事さへも考へぬ、可愛いのは自分の身ばかりてある、幾たび恨しげに嘆息したかも知れぬ、幾度拳を握ッたかも知れぬが終に思ひ直した、イヤ此家の息子てある筈が無い、此家の息子は二人確りと抱合て海に沈んだ狀を、慥に見た人が有ッて、立派な死狀だと新聞紙も褒め、流石に貴族の息子だと其頃の人の噂にも成ッた、其れに若し當家の息子なら、船長も今までに必ず何處かゝら電報を寄越すとか何とかする、其樣な事の無いのは當家の息子て無い證據てある、アヽ詰らぬ事に氣を揉だと、やッと悟りの開けると共にホッと息して四邊を見

廻した

爾うだ確に當家の息子では無い。併し此新聞を此の家の人々が見る時には種々樣々に想像もし噂もするだらうと。又斯う思ふと是れが腹立しくて耐らぬ。現在自分の娘が最う當家の相續人と極て居るのに其前で若しや當家の息子が活て居るのでは無からうかと云ふ樣な評議をせられて其れを默て聞て居る事が出來やうか

松子と云ひ民雄と云ひ。少しも其樣な事に頓着せぬ氣質で相續權などは何時失つても搆はぬと云ふ樣な心で居るから。若し人が噂ずれば。好い氣に成て自分達まで其仲間に入り。彼あだ斯うだと推量を持出すに違ひ無い。アヽ癪に障る。忌々しい。此身が斯まで心配する大事の事件が。人の面白半分な噂の種などにせられるとは。其れのみか其噂から。又何の樣な事で何う變が起るかも知れぬ。追拂はうとした梅子まで未だ何時此家を立去ると極らず。若し地盤が動き出す樣な事が有ては大變だから。是れは此事を誰にも知らさぬ樣に伏せて了ふが好い。爾うだ

直に夫人は新聞紙を成る丈け細かに畳み隱し持て自分の室へ行き吸爐へ入れて燒て了ッた。日頃は可也に智慧の利く夫人で有たのに。餘り慾と野心とが亢じて眼も腦髓も眩で了たと見える。新聞紙を燒捨たとて人の口に戸の立られる者ては無い。戸を立たとて又事實其者を揉消す譯には

行かぬ

夫人が斯く新聞を燒捨た刻限てある。先頃から新聞紙を毎朝の樂として居る子爵は廣間へ來て卓子の中を見たが。二三の雜誌が有る許りて肝腎の新聞紙が無い。今朝に限て何う云ふ譯だらうと直に家扶を呼て詮議したが。家扶は確に此の雜誌と共に給仕に渡したと云ひ。給使を呼で調べると。確に子爵の直にお讀み成さるゝ樣に。小刀で小口まて截切て卓子の上に載せて置たと云ふ事だ。其れなら誰か持て行たのかと殆ど家中の人を茲へ集め綿密に詮議しても持て行た人は無い。子爵は一方ならず不興の顏色を現はした

未だ來ぬとなら我慢も出來るが。既に來た者が無くなッたと有ては我慢の仕やうが無い。大きく云へば一家の取締りにも關するのだ。其れに又。人が持て行く位なら何か大切な事柄が出て居たらうとの推量も自然に起る。何が出て居たらう。何の樣な事件が都て初ッたらう。其れとも特別に何か此家の者が見度いと思ふ樣な件ても有たては無からうか

怪んだとて無益だから。不勝無性に諦めたけれど誰一人子爵を氣の毒に思はぬは無かッた。中にも最も信切に子爵を慰めたのは梅子て無く松子て無く。葉井田夫人でも無く。草村夫人であッた

良あッて。草村夫人の許へ。松子の衣服の爲に仕立屋が來たと云ふ知せが有た。松子は今朝其れを持て居たので。直に一同の前を退さ母の室へ行て用事を濟せた。其あとてフト氣が附くと室の中に紙を燒いた匂が有る。何か大事の書類でも焦て居るては無からうかと暖爐の中を窺くと。確に新聞紙を燒たて有らうと思はれる樣な跡が殘つて居る。ハテな。と何だか不安心な思ひに胸を躍らせる所へ。母御が來た『阿母さん。阿母さん』と松子は聊か嚴い聲で呼び『貴女は先ア。何て新聞紙をお燒に成りました』と詰る樣に問ふた。母御はとぼけた『エ。新聞紙を。何も私しの處へ新聞紙などは來ませんよ』來ぬ事は知つて居るが。取つて來て燒たのだ。其れを『來ませんよ』など丶傍ッ方に返辭するが猶ほ可笑い。松子『子爵のあれほどお尋ね成さる新聞紙を。貴女が持つて來てお燒き捨て成さッたのです』夫人『エ。私しが』松子『ハイ。暖爐の中に紙を燒いた跡が殘つて居ます』夫人『ア丶爾う〳〵先刻。古い手紙などを。文庫の中を掃除して澤山其所へ入れました』松子は情け無いと云ふ風て『何て阿母さん。貴女は私しへまて其樣な事を仰有ります』夫人『古い手紙を燒たのが惡いのかへ』流石は松子は腹立しく感じたのか無言て自分の室へ去て了ッた。後て夫人は遠て丶暖爐の所へ行き。曾て此家へ來て以來重い物を持た事も無い手て。石炭を鷲握にし。溢れるほど其中へ詰め込んだ。手の掌の黑くなるほどは厭つて居られぬと見える

又一時間ほど經て松子は再び來た。氣に掛ッて成らのぬだ『阿母さん。貴女が新聞紙をお燒き成ッたのを最う惡いとは云ひませんが。其新聞紙に。何の樣な。燒捨ねば成らぬ事が出て居ました。何か貴女のお身に係る樣な事柄ですか。私しは心配て成りませんから。何か其だけお聞せ下さい』死ても我が娘に對し。新聞紙を燒たとは云はれぬ。殊には先刻散々に子爵を慰さめた所を。も見られて居るのだから。自狀しては餘り母たる威信に關する『アレ未だ私しを疑つて。五月蠅ては無いか』と。思ひ切て叱り附けた。松子も三たびは問はなんだ。併し新聞紙を燒た爲に。本統の事實も消えたゞらうか

四十九　次郎樣、藏戸次郎樣

話替つて。茲は瓜首法務士の事務所である。主人瓜首眞造は數ヶ月來。藏戸家の事にのみ暇を取られ。外の用事が澤山に溜たので。今日は朝から一生懸命に其等を取運んで居た『ヤッと先づ子爵と民雄との間の折合も附き。己が顏を出すにも及ばぬ事と爲つて安心した』とは彼れが幾度も繰返した獨言である

全く安心したのだらう。彼れの爲す事には多少の非難は有るとしても。正直と熱心とは人より

も優れた男で。今まで藏戸家の事柄が殆ど自分の家の事柄の樣に氣に掛つて居た。其れが一段落附たのだから。重荷を卸した樣に思ふのも無理は無い

彼れの用事と云ふのは矢張り。依頼されて居る事件に就て。書類を調べるのである。朝の八時頃から初めて。二時過までも係り。一日分と定た丈を大方調べ終ッた頃。室の外から戸を叩く者が有た。彼れは依頼者の一人だらうと思ひ『サア此方へお入り成さい』と答へたが。頓て入つて來る人の姿を見て忽ち震ひ揚ッた

椅子から轉がり落なんだが不思議だと云ふ可き程だ、眼を眞圓に張て。呆れた樣に口を開いた。けれどアッと叫ぶ聲さへ出ぬ。何故に斯う慌いたのだらう

入ッて來たのは唯だ若い一紳士である。毛の着た外套の襟を。掻卸して出した顏の靑い事。衰へて居る事。殆ど幽靈かと思はれるが。今は晝間の二時だから幽靈にしては時刻が早い。けれど彼れは幽靈の歩みかと思はれる樣に。搖ら〳〵として瓜首の傍に寄り。騷がぬ言葉で『アヽ貴方にさへ見知られぬほど私しの姿は變ッたてせうか。直接に家へ行かいて好い事をしましたよ』少しも聲に力が無くて。多少の悲みをさへ帶びて居るかと疑はれる。瓜首はヤッと聲が出た。而も度はづれに大きな聲が『ヤ。貴方は——貴方は。誰てすか。墓の中から出て來たのては無いので

せうヲ』相手は矢張り引立たぬ調子て『先ア墓の中から出た來たも同じ事てす。貴方は私しを知りませんか』知らぬては無い。餘り意外だから。知つて居ても爾と合點が出來ぬのだ。彼れは例の德利を忙しく振つヽ立ち上ッて客の肩に手を掛けて。斜に下から窺き上げた『アア。爾だ、爾だ。矢張り爾だ。次郎樣。藏戸次郎樣。次郎樣では有りませんか』客『次郎と見えるなら次郎てせう。私くしは。貴方から斯う冷淡に迎へられやうとは思ひませんてした』瓜首『でも次郎樣は。イヤ貴方は溺死なさッたては有りませんか』客『ハイ自分でも溺死の積てあッたのが。不思議に助けられました』瓜首『是は不思議だ。實に不思議だ。助かる筈が無い樣に思はれましたのに』

遙々と。而も一方ならぬ思ひて歸て來て此樣に謂はれては餘り心持が宜く無いだらう『私しは病氣てすから。其れに甚く疲れて居ますから。一時間ばかり寢かして下さい。其の上て無くては話す氣力も有りません。茲まて實はヤッと來たのてす。ナニ別室に及ばぬ此室の長椅子て宜いのてす。每も運動の歸りに身を横たへた長椅子が。友達の樣に思はれます』と云ひつヽ蹌踉く樣に長椅子の所に行き身を投出したは。成るほど瓜首の目に能く覺えの有る次郎の癖てある。彼れ『眠る前に一言聞き度いは。阿父さんは御無事てせうねえ』漸やく瓜首は我に歸ッた。今までは呆氣に取られて夢中て居たのだ。幾等德利を振たとて追附かなんだのだ。彼れは忽ちに遽て。ふため

く様な體と爲て『次郎様。次郎様。イヤ最う次郎様ては無い貴方が本當の御當主だ。本當の藏戸子爵です。子爵。子爵』打つて變つた様な言葉に。次郎は驚いた。自分が子爵とまて言はれるからは。扨は父上は最う亡くなられても仕たのかと疑ふ様に。寢かけて居た身が跳ね起きて『エ。父上は何うか成つたのですか』瓜首『ハイ何うか成されました。確に何うか成さつたのです。けれど御心配に及びません。未だ御無事ですから。併し先ア。貴方が活てお歸り成つたのは何より目出度い事では有るが。是れは先ア大變な事に成り相だ。草村夫人が何の様な事をするだらう』次郎は父が無事と聞き『アヽ父上が無事なら其れて宜しい。少し私しは眠りますから』再び其身を横へたは。如何にも疲れに堪へ難いのだ。瓜首『寢るのは後にして先あ。何うして貴方が助ッたか其れを搔摘んで聞かせて下さい』次郎『其れは今日のタイムスに一寸と出て居ます』とて外套の衣嚢から。自分が瀛車の中で讀だ新聞を投出して置いて。目を閉ぢた

瓜首は忙いて披き讀み『成るほど分ッた。帆前船に助けられてニウジーランドへ。其れでは今まで分らなんだも無理は無い。けれど此新聞を見ては。子爵も定めしお驚き成ッたならうが。驚けば茲へ迎へが來さうな者だ。ハテな。ハテな』云ひつゝ又次郎の顏を見れば。先刻初て見た時よりも。次第次第に昔の次郎の顏に成ッて。懷しさと嬉しさが自分の胸へ湧出て來た。幾等私情

を禁物として居る法律家ても。自分が件ては抱もし撫で摩りもした主人同様の家の息子が。死だと思たのに助つて歸つて來て見れば嬉しく感ぜぬ譯に行かぬ。彼れは其の寢顏を倩々見て『アヽ流石に。猶だ子供だなア。最う眠ッて了ッた。併し此容子ては餘ほど疲れて居ると見える。可愛相に。自分て何だか。病氣だと云た様だッた、爾だ非常に顏色が惡い。衰へて居る。折角活て茲まて歸て。氣落がして若しもの事ても有れば。爾だ醫者を迎へて置かうか知らん。兎も角も目の覺めた時に飲む様に葡萄酒を持て來て置かう』感心なほど氣の附くは矢張り眞心のある男である

五十　何を見たのだらう

眠ッた次郎の枕許で。瓜首は看護人の様に番して居た

次郎の眠りは穩かて無い。彼れは躰體の何所かに病氣が潜て居ると見え。幾度か寢返をし。又悶いたり。爾して或る時は『オオ兄さん。兄さん。私しも行くから待て下さい』なゞゝ叫んだ。全く意味も無い寢言ては有るけれど。兄の太郎が溺死して自分一人丈け助ッたのを遺憾の様に思ふて居る狀が察せられる。眞に彼れは兄思ひの氣質てあッた

番しながら瓜首に様々な事を思ふた。何しろ次郎の助ッて居るのは有難いけれど。不意に此事

を子爵の耳に入れたら。子爵は氣絶なさるかも知れぬ。嬉しさに驚くのは幾等驚いても構はぬと云樣な者の。子爵の此頃の健康は。殆ど毛の髮て重い石を吊して居る樣な者だ。何時切れて了ふかも知れぬ。健康な此身てさへ出扱に次郎の現れた時には。度を失つて魂も消え肝も潰れる程てあつた。況して子爵は非常に心臟が弱つて居ると醫士の診斷てあつたのだから。動悸ても打つ樣な事に出會へば。其の動悸の唯だ一打て打驚されるのだ。アヽ目出度い事は目出度いけれど。何うして子爵の耳に入れやうと。胸に支へるほど當惑したが。頓て思案の着た樣に『アヽ是れは密に葉井田夫人に話し。夫人から物柔かに子爵へ知らせて貰ひ。爾うして其上て父子の對面をする外は無い』と呟いた

けれど其後が何うなるだらう。何しろ大騷ぎに違ひ無い。既に相續人の盡きた者と定つて。後へ松子と云ふ立派な相續人が出來。弓澤民雄と云ふ其の婿夫までも定まつたのだから。之れが若し。松子とも梅子とも相續人の定まらぬ中て有たら。別に面倒も無いけれど。アヽ何うしたら好いだら。面倒な事と云へば一々此の己に落て來る

人に相續權を與へて。嬉しがられる樣な周旋は好いけれど。與へた相續權を取返して。恨まれる樣な仕事は餘り有難く無い。六かしい事には成た者だ

色々と考へる間に次郎は目を覺した『アア何故。私しが生殘つたてせう。何故兄さんが生殘らなんだてせう』と。彼れは起直るが否や云ふた。矢張り夢の續きが心の中に殘ッて居ると見える。

瓜首は用意して置た葡萄酒を彼れに與へ『最う其樣な事を思ふたッて仕方が有りません。何しろ貴方の助かッたのが何よりも目出度いのです。サア之をお上り成さい。爾して助ッたお話を伺ひませう』次郎は少し葡萄酒を嘗めたが多くは飲まぬ『私しは未だ病氣が有るから何にも飲食の氣が起りません』瓜首『病氣が。てはニューージーランドて瘴霧に中られたのてせうか』問ひつゝも氣遣ッた。彼れは溺死から助かッて。爾して病死する爲に歸京した樣な者では有るまいか。次郎『何うか私しを家へ早く連て行て下さい。阿父樣と葉井田夫人の顏を見たいと思ひます』

何だか云ふ事が心細い。瓜首『連て行て上げますとも。ですが餘り阿父樣を驚かせては可けませんから。ハテな。何うしやう。アヽ爾だ。私しと一緒に箱馬車の戸を閉ぢて。人目に觸れぬ樣にして行きませう。若し下部などが見て。驚いてお屋敷へ馳返り家中を騷がせる樣な事にでも成ると——』次郎『ハイ成る丈け騷がせぬ樣にして下さい』瓜首は直に退き。馬車の用意を命じて置て又次郎の傍へ來た

『てすが貴方の病氣と云は何の樣なです』次郎『救ひ上げられて間も無く熱病と爲り。ニューージー

ランドへ着た時まで私しは夢中でした。船長の話には、プリンス號の沈んだ後へ通り合せ。直に救助の爲め小舟を卸したけれど。間に合はず。纔に死骸の樣な者二個を拾ひ上げた相ですが。其一個が私しです。一個は倫敦の商人で矢張り私しと一緒に歸りました。其人の方は先づ無事でしたが。私しの方は呼吸は吹返したけれど今云通り熱を發して。到底助るまいと思た相です。彼の地へ着て後も。病院へ入られ少しは好く成りましたけれど。好ッたり惡かッたりて。醫者が風土が變らねば全快はせぬと云れました。其中に今の船が濠洲を廻り再びニウジーランドへ寄ましたから。船長に頼で又載せて來て貰ッたのです。幸ひに溺れた時持合せて居た金子が無事に胴衣の中に有た爲め船賃だけは拂ふ事が出來ました。けれど船の中で又病氣が再發し。到底助からぬと思ひましたが此國の土を蹈むと勇氣が出て漸く茲まで歸りました』實に痛々しい次第である。瓜首『手紙は出しませんでしたか』次郎『手紙を幾通も出しましたけれど。私しの歸た船まで便船が無かッたのですから。一纒に成て明日頃父の許へ着くのでせう』瓜首『成るほど爾うだ。運の惡い所へ連て行かれた者ですねえ』

云ふ中に馬車の用意が出來た。何しろ早く屋敷へ連て行き。充分に養生させねば折角助かッたのが再び水の泡と爲て了ふ恐れが有る。直に瓜首は其身と共に扶け載せ。靜に馬車を進めたが。

留守中の變た子爵家の有樣などは父上からの話しの種に。取て置くが好からうとて何にも云はぬ。其中に馬車は藏戸家の門の近くまで進んだが。次郎は物に驚いた樣に『オヤ』と叫んだ。瓜首は何事かと能く見ると。次郎の目は馬車の窓から斜に。門の横手なる茂ッた槐樹の蔭の方へ注いで居る彼は何を見たのだらう

五十一　待て下さい、待て下さい

『アレ。彼れは誰てす。誰てすか瓜首さん』と次郎は叫んだ。誰でも無い梅子なんだ

梅子は門の傍なる槐樹の蔭で駒鳥に餌を遣て居る。是は葉井田夫人の大事な鳥で。梅子に其の飼ひ方を頼んてある。梅子は大切な任務の樣に心得て。朝晩の寒暖などを考へ。或時は樹の蔭へ。或時は日向へなど籠のまゝ種々の所へ持て行くのだ。瓜首は簡單に答へた『あれは春川梅子さんと云ひ遠い御親類の方てす』詳しい事は子爵の話の種に取て置くが好からうと仲々綿密に注意して居る。次郎『エ。梅子。春川梅子。大層美しい——名前ですね。何うして茲に居るのてす』瓜首『貴方は爾う首を出しては了ませんよ。阿父樣に逢ふ迄は誰にも顏を見られぬ樣に成さらねば』次郎は殘念相に首を引きつゝ『てすが何うして彼の樣な方が』瓜首『子爵が招いて。久しくお屋敷に逗

留させてあるのです。詳しい事は子爵がお話し成さるのでせう』云ふ中に梅子は此方の馬車を見た。誰にても隔ての無い氣質だから或は籠を樹に掛けて走ッて來るかも知れぬ。來られては面白く無いのだから。先ずれば人を制すと云ふ兵法て瓜首は馬車から降り自分で梅子の傍に行た『梅子さん今日は皆さんは何の樣な御容子てすか』梅子『今朝タイムス新聞が無く成たとかて子爵が大層お力落しの御容子てした。其外には何事も有りません』タイムスが無く成たとは、彼のプリンス號の事が出て居たので。誰かゝ何うかしたのだらうかと怪んだけれど充分には合點が行かぬ。梅子は馬車の方を見て『此樣な好い天氣に。何故アノ樣に馬車へ蓋など成さるのです』と問ふた。瓜首『ハイ實は誰にも覗かれ度く無い品物を積て居るのです。左樣なら』と。梅子が馬車の傍へ來ぬ樣にまじなひして。爾して再び馬車に歸り。玄關の方を指して進めた。外の人なら今の言葉を聞き猶更ら馬車の中を覗き度がるかも知れぬけれど梅子に限て決して其樣な事は無いと瓜首は見拔いて居るのだ

頓て玄關の近くへ行くと家の内から音樂の音が聞え又引續いて若い女の謠ふ樣な聲も微かに聞えた。次郎は又怪んて『私しの居た時とは何だか容子が違ッて居ます。誰が謠ッて居るのでせう』瓜首『是も遠い御親類て。矢張り子爵に招かれ。久しく逗留して居る草村松子と云ふ方です。委細

の事は父上からお聞き成さい。貴方は決して首を出しては可けませんよ』斯云て次郎を隅の方へ小く成らせて置き。自分だけ降りて内に入り。先づ家扶に逢て葉井田夫人を子爵の居間へ迎へさせた

此居間を我物顔に使ふのは少し專横てあるけれど。是くらゐの事は止むを得ぬ場合だと信じて居る。全く止を得ぬ場合てある。爾して何事かと怪みつゝ入て來た葉井田夫人を座に着かせ『夫人。夫人。非常な事件が湧て來ましたから。決して肝を潰しては可けませんよ』と幾度も念を推して置て次郎の活て居る事を言出した。夫人は最初には信じ得ず。次には信じ得て打驚き。最後には喜んて泣いた。瓜首『サア貴女さへ其通りですから。之を子爵へお知らすには餘ほど大事を取らねば成りません。若し痛く驚かせ申して動悸の爲に心臟に異變をお起し成さる樣な事が有ては大變ですから。何うも是れは不器用な私しには出來ません貴女がお引受下さらねば』何が何でも子爵へ直に知らさねば濟まぬ譯だと夫人は感じた『宜しう御坐います私しが引受けます。茲へ子爵に來て貰ひませう』と云ひ。又家扶を呼び。其旨を命じ。爾して子爵の來る迄に猶も細かな所を一々聞た

其中に子爵は別に怪む容子も無く入ッて來られた。今まで松子の音樂を聞て居たのだ。葉井田

夫人は何氣なく『今朝貴方はタイムスが無く成て甚く殘念な御容子でしたが。今瓜首さんから。其タイムスに出て居た事柄を聞きましたよ』子爵『何の樣な事柄です』夫人『あのねえ。妙な事件ですが。電報欄にプリンス號の乘客の中で二人だけ。ニュージーランド行の帆前船に拾ひ上られた人が有る容子だと出て居た相です』極めて自然な。何事も無い言ひ方だけれど。子爵は早や顏の色を變へ『エ。プリンス號の乘客が二人だけ助かッて帆前船に。爾して其れは何者ですか。何者ですか』とて夫人と瓜首との顏を熱心に眺めた。夫人は恐れた。是でも自分の云ひ方が荒々し過ぎたか知らんと。子爵は二人の答へぬ狀を見て『餘所の人が二人助ッたッて仕方が無い。別に此家へは關係が無いのだから。アヽ矢張り今朝。新聞紙を見ぬ方が好ッたかも知れぬ。見れば詰ら無く心を痛める所で有た』と云ひ。失望だか落膽だか。殆ど見るさへ氣の毒な樣に淋しげな笑を浮めた。夫人の目には又涙がにじみ出た。瓜首『ですが。其の助つた者が何者だか早速問合す必要は無いでせうか』子爵『有りません。有りません。若し當家の子なら問合さずとも歸て來るから』アヽ問合せて失望するが恐しいのだ。夫人『若し其二人の中に當家の子が一人居たら何うでせう』子爵『夫人。笑談にも其樣な事を云つて下さるな』夫人『アノ併し居ないとは限らぬては有りませんか。萬々一。若し居たと分れば貴方は何う成されます。お驚き成ッて御病氣に障りませうか』夫

人の言葉は妙に笑談らしく無く熱心な所が見えるので。子爵『爾ですねえ若し家の子が一人でも居れば――』と言掛けたが急に。何か心へ徹へる所が有たと見え『待て下さい。待て下さい。私しは胸が騷いで。イヤ爾う考へる丈でも何だか。心が轉倒する樣で。アヽ。少し胸を落着てから考へませう』と云ひ胸を幾度も撫卸した。夫人は本統に氣遣ふた爾して強て笑談の樣に打笑ひ『オホヽヽ。若し一人でも居れば。貴方は驚きの餘りに心臟が破裂するでせうか』子爵『イエ。イエ。其樣な嬉しい事なら幾等驚いたとて心臟に徹へません。徹へて死だとて搏ひません』宛も死と云ふ强敵を引受けるとても云ふ樣に兩手を膝に突張ッて身搏へした

五十二　此人は誰れ

眞に子爵は太郎次郎のうち一人でも活て居れば。其嬉しさに死でも搏はぬだらう

葉井田夫人は云ふた。貴方はお搏ひ成さらずとも私共は搏ひます。息子が一人活て居て主人が一人亡くなれば差引き却て損てすもの』とて打笑ひ。更に『死ても搏はぬと仰有らずに。決して死なぬ決して驚かぬとお受合成さる事は出來ませんか。夫人の言葉は妙に根强い。妙に。樣子の有りさうに聞える所が有る。子爵は怪しみながらも熱心に『其れは受合ふ事が出來ますとも。

無論出來ます、息子が活て居ると聞て驚ろいて死る奴が何所に有りませう』とは云ふ者の何んだか心が騒いて來る。夫人『其れならば申ますが、實は』子爵『エ、エ、實は』夫人『ソレ其樣にお驚き成さるのでは有りませんか、實は一人り活て居るかも知れませんよ』子爵は合點が行た樣に『夫人、夫人、其樣な笑談は止して下さい、息子の活て居るのは病氣に障りませんが、笑談こそ命にも障ります』瓜首は最早や時分は好しと見て『子爵、笑談で有りません、次郎樣の方が全く活て居られます』子爵『全く、全くですか、次郎でも太郎でも活て居れば私しは一時に病氣が直て了ひます』未だ笑談としか思ひ得ぬ、夫人は瓜首に目配せして『ては茲へ連てお出で下さい』と云ふた瓜首は心得て立上ッた

笑談ならば斯うまで念を入る筈は無い、子爵は初めて眞實に驚いた『エ、夫人、エ瓜首さん、本統に次郎が活て居るのですか』と瓜首の後を追ふて立んとした、夫人は直に引留めて『ソレ其樣にお驚き成さるが恐いから私し共が心配したのです、何うか先づ落着てお据り下さい、落着て、落着て』子爵『本統ならば本統と、初から云て呉れれば何も驚きはせぬのです、笑談が出拔に誠と爲ては誰だとて驚きます』とは、不思議な言分だ、笑談の前置が有たればこそ、是くらいの驚き方で濟て居るのだ、夫人は確と子爵の手を捕へ、其身が瓜首から聞た丈の事を殘らず述べた、子爵

は聞終ると共は『ア、有難い、有難い、天に謝さねば成りません』とて泣いた

斯る所へ、餘ほど緩くりとして瓜首は次郎を連て來た、彼れは病惱て居るけれど嬉しげに笑み『到頭、家へ歸りました』と云た、此聲を聞き此姿を見て、お驚き成さるなと吳々の注意を受けた子爵よりも、注意を與へた葉井田夫人の方が驚いた『アレ、何うしやう、本統に次郎だよ』と夫人は叫び殆ど氣絕したかと思ふ許りに椅子に沈んだ子爵の方は『ア、夢だ』と云たけれど直に次郎を抱寄せて『オ、能く活て居て呉れた、能く歸て呉れた、定めし艱難辛苦した事だらう、次郎、次郎』と涙一ぱいの眼で其顏を見て又見直し、殆ど果しが無い樣に見えた、頓て夫人が起直り之も『オ、次郎、次郎と』云ひ『貴方ばかり爾う眺めずに私しへも次郎をお借し下さい』と云ひ、手を差延べて彼れを引寄せ『本統に能く歸て呉れた』と同じ樣な事を云て唯だ一同が果しも無い喜びの團塊とは成て了つた

けれど喜びの落着くに從つて目に附くは次郎の衰へた顏色である、確に彼れは深い病氣を持て歸つた、イヤ猶だ全く病人である、夫人『其方は先ア、何れほどか艱難した事だらう未だ病氣が直らぬの』次郎は心配を掛けまいと强て容子を引立てゝ居る『ナニ、太した事は無いのですけれど、海の中で頭でも打たか時々腦の心へ痛が差込みます、其時には眠らずに居られませんが眠れば直

に直ります』輕さうには云ふけれど、何うも輕くは無いらしい。言葉にも容子にも、少しも引立た所が無い。昔の活々した次郎に比べると次郎では無い次郎の脱殼である。次郎の影ばかりである。或は海から助ッて我が家へ死に來たのでは有るまいかと、先刻瓜首の疑ふた樣な疑ひが一樣に夫人と子爵との心に起ッた。子爵『先づ家へ歸ったのだから一生懸命に養生せねば』次郎『ナニ大丈夫ですよ阿父さん。私しは家へ歸て天國へ着た樣に思ひます。馬車の中では事に由ると數時間の中に息を引取るのかと思ひましたが。門の外へ來ると天使の樣な美人が居まして。本統に天國の入口の樣に見え。心が輕くなりました』子爵『天使。天使。何の事だ其れは』夫人『アヽ梅子が門の外に遊で居たのでせう』次郎『爾です。其梅子です』子爵『梅子と云ひ松子と云ひ。家には美しい客が有て。其方が居た頃より此頃では却て賑かに成て居る。色々氣の紛れて面白い事も有らうから。其方が自分で病氣を直す氣で居れば直に直る』

梅子松子と云ふ事は葉井田夫人の心へ妙な心配を起させた。夫人は子爵の顏を見て『ですが子爵。アノ兩女を何うしたら好いのでせう』成るほど是れも容易で無い問題である。眞の相續人が歸て見れば彼の兩女を何う處分すれば好いだらう。子爵は『孰にしても其處分は今までの處分よりは仕易いでせう』と云ひ。更に。何の事かと怪む次郎に向ひ。相續の一條から。梅子松子を迎

へてある次第を掻摘んで物語ッた。次郎は聞終ッて『爾ですか其れでは兩女とも私しの歸たのを。惡い奴が出て來たと邪魔の樣に思ふのでせうねえ』葉井田夫人が直に打消し『ナニ兩女とも其樣な卑劣な心は毛ほども無い。必ず其方の歸たのを喜びますよ。殊に梅子などは其方の肖像畫へ艸花を備へなどして自分の兄の供養てもする樣に勉めれ居ました』次郎『エ。あの梅子さんと云ふのが。私しの肖像畫へ。艸花を供へて下すッたり』夫人『爾さ。だから全く自分の兄ても歸て來た樣に喜びますよ』

次郎は聞て嬉しげて有ったけれど其れは少しの間て。直に又『アヽ頭が痛く成りました。少し私しを茲へ寢かせて下さい』と云ひ出した。勿論直に其意に從た。爾して彼れが眠るが否や子爵は『醫者を迎へて置う』云ひて茲を立ち瓜首は次郎の歸宅を披露する事に就き子爵へ相談する事が有るとて。續いて去り。獨り葉井田夫人のみ。嬉さと心配と混雜た樣な面持て次郎の寢顏を守つて居たが。凡そ卅分ほども經て。何か次郎の目の醒めた時の飲料をても用意して置ふと思ひ之も立ッた。斯うして一同が去り。室の中には唯だ眠た次郎一人と爲た所へ誰だか爾とも知らずして靜に這入て來た人が有る。多分は子爵が茲に居る事と思ひ。用事ても有ッて子爵を尋ねて來たのだらう。此人は誰れ。草村夫人。其とも梅子